

宗方小太郎日記，明治 43～44 年

大里 浩 秋

1. はじめに

本所報No. 37 に宗方小太郎の明治 21 年の日記（中国滞在時期のもののみ）を載せ，No. 40 に明治 22～25 年，No. 41 に 26～29 年，No. 44 に 30～31 年，No. 46 に 32～33 年，No. 47 に 34～35 年，No. 48 に 36～38 年，No. 49 に 39～40 年，No. 50 に 41～42 年の全部を載せた。今号ではその続きとして，明治 43～44 年の宗方の手書きの日記を活字に起こすとともに，解題をつけることにする（ただし，43 年の一部は省略）。

前回までと同じであるが，お断りすべきことをいくつか記す。解読できなかった文字は□で示した。また，原文のカタカナは，西洋の固有名詞，外来語の表記を除いてひらがなに改め，漢字の旧字体は新字体に改め，適宜句読点を加えたが，日本の人名の漢字は原文のままにした。私の解題中での原文の扱ひも同様である。日記の解読と入力作業は，本学中国言語文化修士課程修了（文学修士）の増子直美さんに手伝ってもらった。

2. 明治 43 年 1 月から 3 月，7 月から 12 月までの日記

明治 43（1910）年の日記は，1 月 1 日から 3 月 27 日，3 月 27 日から 7 月 27 日，7 月 27 日から 12 月 31 日までの三綴じからなっている。

まず，1 月から 3 月の日記を見ると，上海で迎えた正月早々に，沙市の領事代理をしていた片山敏彦と熊本国権党の指導者津田静一の訃報が届いたことが記されている。このうちの片山は，漢口楽善堂時代の仲間であり，沙市から運んだ遺体を迎えて本願寺で追悼会を開き，さらに船で日本に運ばれるのを見送っている。また，3 年来家族とともに住んできた上海の家を引き払って熊本に移る準備を進めて，1 月末には東和洋行に宿を移し，2 月 4 日に乗船して帰国の途に就いた。

熊本では借家を探して新屋敷にそれを求めて住むとともに，1 月上海にいる時に申し込んだ大阪朝日新聞社主催の世界一周会の手続きを進め，3 月 7 日までに会費，つまりは旅費 1950 円を支払っている。かなりの高額であるが，海軍軍令部から「欧米漫遊の補助費」として 500 円をもらっていることが分かる（3 月 18 日の日記）。

なお，日記中 2 月 10 日の途中から 2 月 16 日までの記録が欠けているのは，その部分が筆者の不注意により手元にないためで，今後補充して御覧に入れるつもりである。

次に，3 月から 7 月の一綴じは「欧米鴻爪紀」と題した，アメリカ，イギリス，フランス，イタリア，ドイツ，ロシアを巡る旅行をした際の見聞録であるが，ここではその「緒言」を載せるだけに止める。

「余生れて二十有二始て清国に航し，呉越燕楚の間に放浪すること茲に二十七年矣。而して足跡未だ欧米の地に印せず，常に以て憾と為す。此次大阪朝日新聞社第二次世界一周会を主催す。余乃ち会員の

列に加はり、明治四十三年三月念七郷里を發し、四月二日東洋汽船会社の地洋丸に神戸に搭じ、先づ米國に航し、然る後英、仏、伊、獨、露の諸國を歴遊し、七月中浣を以て國に歸らんと擬す。到る処見聞を収て日誌と爲し、名を欧米鴻爪紀と謂ふ。要するに鴻爪を雪泥に印するに過ぎざるのみ。之を緒言と爲す。

明治四十三年四月三日伊勢湾航行中地洋丸六号船室に於て 宗方小太郎識

欧米旅行から帰った後の一綴じでは、熊本在住の80人を相手に8月6日に「欧米漫遊談」をし、翌日にはロンドンから写真などが届き、その数日後には長時間留守にした家族をねぎらうためであろう瀬戸内海の旅をしている様子が知れるが、まもなく海軍軍令部からの電報で9月に北京に出張することになった。こうして北京行の準備をしようとする時期に、韓国併合のニュースが流れてきて、それに満足している様子を日記に記している。

9月14日に上海に着いて、そこに滞在する日本人とひとしきり交流した後、23日に上海を發つて芝罘經由で27日に天津着、日本租界旭街芙蓉館に泊まりながら、小幡西吉領事に会い、同文書院卒業生で天津にいる者13名と飲み、熊本県出身者の歓迎宴に出たりして、29日に北京に入った。

北京では丁香胡同にある海軍官舎に滞在しながら、軍関係者、外交官、民間人等大勢の人と会っている様子を日記から伺うことが出来る。日記にある肩書きのまま拾うと、軍関係者では、下瀬軍医、青木少将、本莊少佐、菊池駐屯隊長、小森少佐、町野大尉等、外交官では、伊集院公使、本多熊太郎、大河平隆則、松岡洋右三書記官等、民間人としては、順天時報の上野岩太郎、高宮、神田正雄等。また、東亜同文書院卒業の中川、岡本、林出、波多など。他には、着いたばかりの頃にたまたま北京にいた内藤湖南、同郷の狩野直喜（いずれも京都帝国大学教授）と数回会っており、11月2日には、駆け出しの外交官として駐ローマ大使館書記官をしていた吉田茂の手紙を受け取っている。

しかし、この時海軍の指示で北京に出かけたのは、彼ら北京に滞在する日本人に会うためというよりも、西太后亡き後の清朝政府が強まる国会開設の要求にいかに対処しようとしているかを實地に調査し、それによって、清朝の存立基盤の強弱や反対勢力の動向を確認しようとするものであり、したがって北京で大勢の日本人に会った際にも清朝を巡る情勢についての意見交換をしたのであろうと推測されるのである。10月3日に、順治門内に行つてそこにある法律学堂に設けられた資政院（立憲制を実施するための中央の諮問機関。地方に設けられた同様の機関は諮議局である）の開院式に摂政王載灃が出席しようとする場面をながめたのを皮切りにして、10月、11月と数回資政院に出かけて議會を傍聴し、11月4日には国会開設の期限を早めて宣統五（1913）年に開設するとの上諭が出て、7日にはその発表があったことを祝す生徒の提灯行列があったと書いている。また、5日には国会請願代表団や諮議局や資政院の関係者と談じており、こうした資政院内外の動きを盛んに海軍への報告に記している。

こうして、2か月滞在した北京を11月30日に離れ、12月2日から13日まで漢口に滞在してから上海に行き、そこでこの年を終えるのである。

ここで、この年に書いた海軍宛報告の号数と日付を、『宗方小太郎文書』（以下、『文書』と略称、原書房、1974年）のそれと対照しつつ日記から拾い出すと次のようになる。なお、『文書』中に収録されていないものについては、号数の前に※印をつけることにする。

1月15日—「報告を發す」とあるが、『文書』にはない。第319号の可能性ある。1月18日—第320号、10月4日—第322号。※第323号「資政院に対する卑見」（日付なし）は、日記に記載されていないが、上海社会科学院歴史研究所（以下「上海」と略称）に所蔵されている。10月8日—※第324号（上海所蔵「資政院議事狀況並に所感」）、10月10日—第325号、10月15日—「報告を發す」とあるが、号数は不明。『文書』にはその頃の内容として日付なしで第326号と第327号が載っているの

それに該当する可能性がある。10月20日―「報告二封を發す」とあるのは、『文書』に10月18日第328号と日付なしの第329号が載っているのに該当する可能性が高い。10月20日―第330号, 10月23日―第331号, 10月27日―第332号, 11月1日―第333号, 11月4日―第334号, 11月6日―第335号, 11月13日―第337号。11月17日―「私信にて報告を發す」とある。11月21日―第338号, 11月23日―第339号, 11月25日―340号。11月27日―「報告を發す」とあり、『文書』に日付なしで載る第341号に該当する公算大。12月22日―※第342号(上海所蔵「国会速開運動」), 12月26日―※第343号(上海所蔵「資政院における弾劾案の影響」)。

日誌

正月元旦 陰。黎明起床。身を清め衣を改め四方を拝し家族と元朝の式を行ひ、十時総領事館に至り聖影を拝し、十一時倶楽部の名刺交換会に出席す。正午家に帰る。朝来賀客接踵して至る。午後知人を歴訪して正を賀す。

正月二日 晴。賀客来て刺を投ずる者多し。午前出て廻礼す。午後木下温知、其戚族山内少佐と共に来り雉一羽を贈る。晚沙市よりの電至り領事代理片山敏彦本日前六時急病にて死去を報ず。真に悼む可きなり。昨来内外各地よりの年賀状頻に至る。

正月三日 陰。午前より午後に涉り賀客相踵て至る。三時電車領事官宅に至り正を賀す。年賀状約三百通を内外の知人に發す。

正月四日 雨。正午有吉領事の午餐会に臨む。同座寺垣中将、竹内須磨艦長、以下海軍士官二十余人と浮田、三穂の諸人なり。四時辞帰。晚加藤少佐、松井少佐、河野久、中島為喜を招き晚餐す。

正月五日 陰。津田静一氏東京に於て客月念八逝去の訃至る。氏は熊本の先輩にして学徳兼備の人、痛惜の情に禁へず。内外知人百余名に賀状を發す。安村参謀来訪、写真を贈る。

正月六日 陰。東京津田信卿に弔詞を發し奠儀三元を送る。海軍々令部名和少将、吉田参謀、細川侯爵、男爵、宇土細川子爵、鍋島侯、清浦氏、伊集院公使、以下数十人に年賀状を發す。午前〔後〕六時杏花楼の同県人会に出席、九時帰る。濃霧。

正月七日 濃霧。午前中島、松井と旗艦須磨に至り、寺垣司令官、艦長、副長、安村参謀を訪ひ別を叙す。明日出港、南清各地を巡航するを以てなり。十一時帰る。寺垣司令官の来訪に接す。上野貞正、西本省三来訪。各地知人の賀片至る。

正月八日 陰。午後清子を伴ひ靴、書籍を購ふ。

正月九日 雨。午前六三亭の滬謡会新年初会に出席。田村の脇を謡ひ夜に入て帰る。風雨甚暴。村上貞吉、佐々布武来訪せりと云ふ。

正月十日 雨。大阪朝日新聞社鳥居に致書し、同社の主催に係はる世界一周会に加入の事を申込む。

正月十一日 雨。加藤少佐、池部雀彦、沢村幸夫、東和の主人来訪。露国大使館田中少佐、上田仙太郎に賀状を致し、外に独逸宇野哲人、武者小路公共に賀状を郵寄す。熊本片山哲哉氏に弔詞を發す。東京根津一に致書、田岡の事を商量す。

正月十二日 雨。井手、秦来訪。午後郵便局、領事館に至り、午後六時井手と有吉領事の晚餐に赴き、加藤、松井等と会談、十一時帰る。北京上野岩太郎、川島浪速の信、並に各地の年賀状至る。

正月十三日 陰。加藤少佐来訪。

正月十四日 半晴。午後福利公司に至り皮箱、帽子等を購ふ。五時郵船埠頭に故片山敏彦の靈柩を迎ふ。襄陽丸にて到る。之を東和洋行に送り夜靈前に旧交数人と会し、十時半帰る。森茂の詩信、並に北京地方より年賀状至る。軍令部名和少将より日露戦史第二編を送り来る。

正月十五日 微雪。午前福利公司に至り、転じて本願寺に赴き片山敏彦の追悼会を営み、午後一時半其の靈柩を筑前丸に送る。名和少将、伊集院中佐、吉田中佐、増田中佐、上野岩太郎に致書し、軍令部

に報告を發す。内外知人に年賀状四十余通を郵寄す。夜佐々布來訪。

正月十六日 陰寒。午後加藤少佐來訪。佐々干城、亀雄の信、並に年賀状十余通に接す。夜島田数雄來談。

正月十七日 陰寒。午後正金に至り預金百元を受取り、二時領事館に至り同文會支部の委員會に列し、四時歸る。夜中島為喜、佐々布質直來訪。

正月十八日 陰。北京川島浪速に家族の写真を送る。海軍に報告を發す。東京池邊吉太郎に致書す。午後内人と大馬路の洋店に至り毛蒲団、玻璃器、茶器、毛布等を購ふ。晚有吉領事の招宴に新六三に臨む。同席は阿部、河野、井手、神崎、加藤、松井、中島、及余なり。十時散ず。

正月十九日 陰。午前井手と姚文藻を博物院路に訪ひ、正午歸る。松尾相義來訪、宝生流に入門を勧む。之を諾す。岡幸七の信至る。名古屋平井徳藏より漬物一樽を送り來る。平井に札状を發す。夜佐々布來訪。

正月二十日 雨。午後池部政次來訪、晚に及で去る。作新社、郵便局に至り五時歸る。狩野直喜、松倉善家、久門商和、小室縫之助、井野熊喜の信、並に年賀状数通至る。岡幸七に復書す。

正月二十一日 雨。同文書院上野貞正、京都狩野直喜、東京久門商利に致書し久門に支那官員録を郵送す。正金より預金百十四円を受取る。午後加藤少佐、児玉來訪。時報館より昨年八月より十二月迄五ヶ月分の報酬二百五十円を送り來る。大阪鳥居赫雄母堂の訃至る。田中清司、岩永八之丞、岡次郎、鶴岡永太郎等の信至る。夜井手三郎、佐々布來訪。

正月二十二日 陰。田岡に致書、鶴岡、岩永等に復書す。川原袈裟太郎の信至る。大阪鳥居に弔詞を發し奠儀を送る。午後筆、墨、詩箋を購て歸る。夜井手三郎の南清行を浦東商船会社の船に送り、十一時歸る。微雪、寒氣甚し。

正月二十三日 陰。午後加來、甲斐両生來訪。晚小学校長高橋栄七以下男女教師七名を招き支那料理を會食す。朝來清子恙有り、携て秋野医院に至り受診。

正月二十四日 快晴。大阪原田棟一郎に致書す。

正月二十五日 陰。澤村、加藤壯太郎來訪。井野春毅、島田儀一兩夫婦を晚餐に招く。大阪朝日社世界一周會係、野満四郎、佐々布遠、白岩龍平、今村直夫、山口昇、竹崎春熙の信至る。

正月二十六日 快晴。一周會係に申込書を送る。外に原田棟一郎、片山哲哉、竹崎春毅に致書す。野満、白水館に到書す。保定田岡正樹、黒川敬藏の信至る。田岡に復書す。領事館、民団、俱樂部に帰国の届を為す。夜家族と村上貞吉の招宴に杏花楼に赴く。伊東米次郎夫婦と主人夫婦なり。散後三馬路口春貴茶園に至り演劇を觀、十一時歸る。阿部一毛來訪せりと云ふ。

正月二十七日 快晴。午前同文書院佐藤喜平次來訪、一千元の元利を返却し、並に三千元に対する昨年十二月迄の利息百三十五円を渡す。南京辻武雄、蘇州高田九郎來訪。辻は満期にて帰国する者なり。津田信卿、豊岡保平、守永少佐、波多博、河合良朔、軍令部の信、並に伊集院公使、青木少将以下の年賀状十余通至る。松井少佐晚餐の招有り、辞之。午後上海日報社、澤本、松尾を訪ひ、四時歸る。保定田岡に到書す。松尾に宝生流入門料五円を交付す。晚井手友喜、島数雄、佐々布質直、辻武雄、高田九郎を招き晚餐す。

正月二十八日 陰。午前土井伊八、太平保險会社長中村静嘉氏の書信を携へ來訪。檜垣清学士、東洋協會幹事長門田正経の紹介状を持參し來り訪ふ。午後池部雀彦、井手友喜等來訪。洋服屋に銀八十元、雇支那人二名銀二十四円を与ふ。外に正月分房租四十円を付す。杭州岡田徳好、遼陽上妻博路、内田友義等の信至る。是日午後より行李を收拾す。東和より二人來り助く。

正月二十九日 陰。午前辻、高田來訪。午後阿部一毛、辻、高田、檜垣の帰国を送る。歸りて行李を收拾す。中島為喜、並に同文書院熊本県人全部來り別を叙す。

正月三十日 陰。朝來行李を整頓す。午後東和洋行より二人、並に佐々布來り幫助す。

正月三十一日 晴。朝来行李を收拾し、午後に至り終はる。尽く之を東和洋行に送る。西田善蔵、池部雀彦、加藤少佐等来訪。是日加藤に現寓所を引譲る。四時出て理髪し、七時家族と中島為喜の招きに赴く。支那料理の饗有り。十時帰家。行李を一括し三年來の寓所に別を告げ、十一時東和洋行に移寓、午前二時就寝。東京根津一、軍令部、齊藤國雄、池永省三、末廣、上田仙太郎等の信到る。

二月初一日 晴。朝同寓松井少佐を訪ひ小談。保定田岡に根津の返書を郵寄す。広東領事館転交として軍艦須磨乗組の今泉周逸に英語教師の事を申送る。午後郵船会社に至り荷物積込の事を依頼し、領事館に有吉領事、浮田、三穂、中畑、紀成等と小談。帰途村上貞吉、河野久太郎等を訪ひ帰る。中島、加藤来訪せりと云ふ。井野、近藤来訪。

二月二日 晴、寒気甚。午前狄平、加藤、中島、前島、秋野等を訪ふ。午後長尾楨太郎来訪、十景詩箋一匣を餞す。川本、井手等来訪。晚知人の招宴に新六三に赴く。会者御幡、河野、土井、青木、澤本、井手の諸人なり。井原真澄来会、今夕南京より来着せりと云ふ。十時辞帰。

二月三日 快晴。北島、井手、池田、木下夫婦、福岡等来訪。午後篠崎、島田列を訪ひ、墨銀を日本貨幣に兌換して帰る。名和少将、伊集院参謀、久門商和、中島半次郎、成松、松岡洋右、野間善左の信、並に東京紅葉館に於ける伊集院、佐原、平井、堀田等の合作信片至る。東京名和少将、伊集院に復書す。晚有吉領事の招宴に赴く。余を主賓とし加藤、松井兩少佐、並に中島、神崎、三保の諸氏来会。十一時辞帰。

二月四日 快晴。午前村上貞吉来訪。出て領事館に至り荷物証明書を受取り有吉領事以下館員諸氏に告別、十一時帰る。吉永、南雅雄、中山胤男、市川信也列来訪。福州吉原洋三郎、井手三郎の信至る。東洋協会門田正隆に致書。中畑栄、横山慶三、紀成虎一、加来等来り送行。前島次郎、古莊弘、松井石根、佐藤喜平治、木幡恭三、高橋栄七、井手友喜、和田連次郎、加藤壯太郎、並に熊本県学生全部十余人来て行を送る。島田数、佐々布、遠藤弘造、荒木、上野貞正来送。十時東和洋行を出で春日丸に上る。有吉領事、浮田郷次、三穂官補、井原真澄、伊東米次郎、中島為、島田儀一、幡生源二郎、平野勇蔵、御幡雅文、岡田徳好、篠崎、秋田、澤本、土井、河野久、今井、市川、弘内、北島、高比良、福田、柴田、本莊、鈴木島吉、荻野元、志保井、中島虎吉、蛭子、池部、長尾、村上、矢田部、西田善蔵、児玉、平井、徳永、米田、辻、河合、吉永列来り送る。森茂来訪、今夕大連より来着せりと云ふ。酒を把て暢談、十二時辞去。午前一時半就寝。

二月五日 穩晴。半田、秋野、中島等と同船たり。午前五時半開船。食後南雅雄来訪。南昌より帰来、同船帰国する者なり。

二月六日 陰。静穩。夜に入て五島の前を過ぐ。

二月七日 陰。未明長崎港に入る。七時検疫。八時同船の諸氏に別れ四号波止場に上陸す。税関監吏磯崎雄熊諸事周旋、荷物四十余点一物をも検査せず通過するを得たり。十時半土佐屋に入る。篠崎、秋田、井手、中島為、古莊、蛭子等に致書。午後磯崎を訪ひ小談。帰途山口武洪を敲き談話時を移て帰る。岩永八之丞来訪。夜勤工場に至り物品を購ひ、十時帰る。

○以下は日記中に挟んであったメモ——「船票 82, 長崎宿 21, 写真焼増代, 東和払 82, 汽車 35, 船祝儀 10, 雑 10, 大計三百二十元許。長崎税関四号波止場磯崎」

二月八日 雨。澎湖島寺垣第三艦隊司令官に致書す。午後鈴木行雄来訪。家族と御幡雅文の留守宅を訪ひ、晩に及で帰る。

二月九日 快晴。熊本白水館、河口介男に電報を發す。上海有吉領事に致書す。午前御幡夫人、並に山本静也来訪。中食後土佐屋を出で停車場に至り午後一時十分の汽車に乗ず。佐賀にて晩食し、長洲を過ぎ不破昌材に面し、九時半上熊本駅に達す。白水館主人、並に河口、古閑等来迎。白水館に投ず。

二月十日 晴。午前鎮西館平山、岡、中知、九州日々社板井を訪て帰る。午後大江、田中、河口、古閑宅を歴訪して帰る。保定田岡、並に鳥居の信に接す。高田九郎、河口介男来訪。夜田中清司、佐藤敬

太，辻武雄（この後は16日まで欠）

二月十七日 晴。午前長野一誠翁来訪。午後平山岩彦，島田常吉，竹中某来訪。三時出て池部武次，秀次，千田一十郎，長野一誠を訪て帰る。夜佐々布遠，町野健吉来訪。伊集院，加藤壮太郎，松井石根，辻源助に致書す。

二月十八日 晴。午前緒方，池田，阿部野，津野宅を訪ひ，物産館阿部野の処に小談，正午帰る。武藤嚴男氏来訪。午後辻武雄を新屋敷を訪ひ，船津より片山への香典を渡して帰る。蓋辻明日御船片山宅に赴くを以てなり。夜佐々布遠来訪，桜井町家屋の事略成議有るを報ず。田中清司来談。東京井上雅二の信至る。

二月十九日 晴。河口，小早川を訪ふ。午後桜井町，新屋敷両処の家屋を見る。是日世界一周会員確定の通知状至る。夜井芹来訪。

二月二十日 晴。午前新市街喜友会能楽堂に至り仕舞，並に謡曲を聴き，正午大江の午餐に赴き，四時辞して佐々布，田中を訪ふて帰る。夜石原醜男，早川新次来訪。是日辛島格，池内源七，上田正喜来訪せりと云ふ。

二月二十一日 晴。午前園田勘吾，生田清範，沼直治，千田一十郎，河口介男来訪。軍令部吉田中佐，井上雅二，奥村傳，西村時彦に致書す。晚鎮西館の招宴に赴く。佐藤敬太，古莊韜，緒方二三，阿部野，石原，八木田，松村，美代，金津，中路，外二人と真藤義雄，早川新次等なり。九時半散ず。

二月二十二日 晴。市役所，警察に至り世界一周旅券願の手續を了し，大阪朝日新聞社に一周会保証金百五十円を肥後銀行より送る。午後三時偕行社の熊本城史談会に出席す。明治十年今月今日を以て戦を開き熊本籠城の計成る。例年本日をも以て紀念会を開き十年戦役に関する談話を為し来れり。六時帰る。晚家族と河口宅の晩餐に赴き，九時帰る。是日午前真藤，坂本来訪。新屋敷の家屋借入れの約成る。

二月二十三日 晴。午後岡辰喜来訪。白岩龍平，伊集院俊の信至る。三時新屋敷に至り家を見る。夜白岩に復書す。津野を訪ふ，在らず。

二月二十四日 晴。午前旅券願の件に付き警官来訪。午後津野一雄，並に高等工業学校生徒，上田力校長中原淳蔵の紹介にて来訪，明後日談話会にて一場の談話を乞ふ。事故を以て之を辞す。夜津野宅にて謡会を催し，十一時帰る。

二月二十五日 雨。佐々布来訪。藤本友世，甲野吉蔵，河口介男来談。晚米原繁蔵来訪。五時佐々布の招饗に静養軒に赴く。洋饌の饗有り。九時帰る。米原来訪。謡曲二，三番を謡ひ，談話十一時に及で去る。

二月二十六日 雨。午前新屋敷の宅を見，井芹を済々鬢を訪ひ，帰途米原を丸子旅館を訪ふ，在らず。西村時彦，井上雅二の信，並に澤村大八翁昨日死去の訃至る。午後澤村宅に至り暗す。唐人町に至り傢具数点を購ふ。夜津野来訪。

二月二十七日 快晴。是日新屋敷三百六十七番地の借宅に移らんとす。朝来行李を收拾す。沼直次，河口，田中，古閑来り助く。午前家具を送り白水館より新屋敷の寓に入る。井芹経平，浅井寅喜等来訪。

二月二十八日 陰。津野一雄，外一名来訪。午後近隣を廻訪し移転の挨拶を為す。二時高麗長国寺に至り澤村大八翁の葬儀に列し，五時帰る。津野来訪。古閑次郎，松倉善家来訪。中村静嘉の信至る。

三月一日 快晴。岳翁，河口，毛利来過。毛利勧誘の不動貯蓄銀行に毎月清子の名義にて五円二十銭加入の事を約す。東京井上雅二に亡友遺墨二卷，荒尾の手書八通，石川の手札九通，廣岡の手札一通，楽善堂規則一冊を送る。奉天上妻博路の信至る。井場熊喜氏来談。中村静喜，阿南鎮民の信至る。中村に復書す。夜古閑次郎，浅井寅喜を訪ふ。沼直次，石原，金津来訪。

三月二日 半晴。中村静嘉に復書。市役所，鎮西館に至り，正午帰る。

- 三月三日 陰。建具の張り換を為す。沼直次来り周旋す。浅井寅喜，松倉兄弟来訪。米原の信至る。夜坂本政平来談。
- 三月四日 陰，寒甚，大雪。大阪鳥居，原田棟一，京都狩野直喜に致書す。阿部野，緒方，澤村晴夫，上野源治等前後來訪。西本省三，井手友喜の信至る。
- 三月五日 晴。朝栗林来訪。十時池田に至り緒方二三の朝鮮行を送り，帰途生田清範，早川新次を訪ひ，正午帰る。河口呆訪。午後佐々干城氏来談。浅井の信至る。
- 三月六日 陰。午前喜友会の能楽を觀んと欲し新市街に至る。来週に延期の事を聞き春日に至り松倉兄弟を訪ふ，在らず。帰途高田九郎を訪ふ，亦在らず。矢島篤宜を練兵町を訪ひ中食の饗を受けて帰る。原田隆升，津野一雄，永原虎雄，吉田某，早川新次来訪。
- 三月七日 晴。岳翁，生田清範来訪。午後大阪朝日社一周会係に会費残金千八百を郵送す。外に写真一葉を送る。外務省天野恭太郎に致書す。宇土川野廉，奥村に致書す。井上雅二の信至る。之に復す。
- 三月八日 晴。午前十時熊本駅に至り宇土行の汽車に乗ぜんとす。後れて及ばず。待て零時半に至り上車，宇土に至り奥村宅を訪ひ，去て細川邸に小林を敲き寛談。辞して川野廉，松岡競を訪ひ，五時去て法華寺，城山の先塋を展し，一里に帰り晚餐し，八時半の汽車にて熊本に帰る。田中清司来訪。隈元喜助，井手友喜，緒方二三，原田棟一郎の信至る。
- 三月九日 快晴。根津一の信，並に東京安達謙蔵の電報至り，塩田整理案通過の事を報ず。塩浜田畑，三角浅井，並に米原に致書す。小山令之来訪。夜生田清範の招宴に鷹匠町長崎別荘に赴く。同座は江良惟一，江口昌條，田中之雄，落合東郭，鳥居雷田，渡邊西密，小早川，稲田，菊池東郊，輪良井雨堂，清藤秋窓等なり。九時辞して阿部野を訪ひ小談，帰る。
- 三月十日 快晴。朝練兵場に至り奉天占領の模擬戦を觀，大江に小談，正午帰る。根津，安達に致書す。夜沼，上野来訪。
- 三月十一日 快晴。松田敬三郎，友枝伴三，澤村幸夫来訪。午前県庁保安課に至り世界一周の旅券を受取り，帰途市役所，大谷高寛を訪ひ帰る。朝日新聞社に旅券を郵送し手数料二円三十四銭を送る。原田棟一郎に致書す。晩田中清司宅の招宴に赴き，九時帰る。風甚。軍令名和少将の電報至る。之に復電し，並に書信を致す。
- 三月十二日 晴，朝微雪。沼来訪。平井徳蔵，安達謙蔵，吉原洋三郎の信至る。平井，佐々布，浮田に致書す。西村天囚より一周会画報，川口市之助より写真を送り来る。蔵原惟昶来訪。正宗作の鉢割一口を贈る。天野恭太郎の信至る。
- 三月十三日 快晴。田岡正樹，川口市之助，上妻，阿南，八田兵，甲斐等に致書す。午前古莊韜，久野尉太郎を訪ふ，在らず。矢鳥来訪，留めて中食す。角田政治，日吉又男来訪。平井に致書す。夜井口，小山令之来訪。宇野哲人来訪，新たに独逸より帰来せる者なり。
- 三月十四日 晴。鳥居赫雄，西村時彦に致書す。伊集院俊，吉田増次郎，井上雅二，田岡正樹，一周会係の信至る。伊集院，吉田，井上に復書す。午後阿部野，井口呆訪，共に出て渡鹿，保田，窪地方に散策し，五時帰る。
- 三月十五日 雨。原田棟一郎，浅井寅喜の信至る。原田，川野廉に致書す。小山令之来訪。河口呆男，沼直次来訪。午後宇野哲人を本山を訪ふ。夜澤村幸夫を訪ひ上海に送るべき物品を托す。
- 三月十六日 晴。午前生田清範，並に洋服屋来訪。フロックコート一着を新調す。価五十円。午後辻武雄来訪。海軍々令部より一千六百元郵送せりとの電報至る。上海井手友，漢口岡に致書す。
- 三月十七日 晴。東京安達謙蔵の信至る。宇土川野廉の信に接す。川野，浅井，宮坂九郎，田畑亭記，米原に致書す。生田中佐の奉天戦紀念会席上其の書画帖に左の一絶を題す。夜原田隆升を訪ふ。
百戦老将話北征，忽看席上風雲生，風収雲散对樽坐，人与梅花一樣清。
- 三月十八日 雨。海軍軍令部より四月至九月手当金千百元，並に欧米漫遊の補助費として五百円送り来

る。軍令部副官に領収証を発送す。古莊韜，沼直次，松田某前後來訪。夜河口を訪ふ。

三月十九日 陰。午後長野一誠氏を訪ふ，不在。去て鎮西館に平山，緒方，中知等と談，四時帰る。夜毛利，矢島，稲田，緒方列の招饗に静養軒に赴き，九時帰る。浅井，川野に致書す。

三月二十日 陰。午前井芹を訪ひ，去て生田清範，角田政治を訪ひ，正午帰る。河口来訪。午後三城豊造来訪。名和少将，吉田中佐に致書。上海井手に一書を致す。波多博，伊集院，鳥居の信至る。上田正喜，池内源七来訪。

三月二十一日 午後雨。根津一の信至る。午前大江を訪ふ。午後沼直治，井口忠，緒方二三，阿部利恭，松倉善家，右田某来訪。

三月二十二日 雨。河口来訪。午後井手友喜来訪，昨夜上海より来着せりと云ふ。井手三郎の信至る。東京安達，広島亀雄に致書す。

三月二十三日 晴。早川，白石，松田敬三郎，佐々木徳母，澤村雅夫等前後來訪。松田の為に井手，浮田に紹介を為す。

三月二十四日 晴。鳥居，原田に出発を報ず。東洋協会に去年七月より本年二月迄八ヶ月会費四円を郵送す。午前東京池邊に電報を發し，鎮西館，九州日々社，河口，緒方を訪ひ帰る。午後河口，久野尉，右田良男，矢島，生田，角田政，宇土奥村来訪。夜古閑夫婦来談。

三月二十五日 晴。午前肥後銀行に至り海軍よりの為替を受取り更に之を大阪百三十銀行に為替を取組み，松倉，毛利，内藤を列訪し，唐人町より旅行用品を購ひ帰る。友枝伴蔵，上野政久来訪。夜大江を訪ふ。

三月二十六日 雨。午前豊田虎之進，佐々布遠，井場熊喜，牛島貫吾来訪。出て理髮。辻，井場，井芹，田中，佐々布，武藤，原田を歴訪して帰る。米原の信至り，江島永年に対する借用証に証人たらんことを依頼し来る。大坂佐野に致書す。河口介男来訪。江良惟一，泉館来訪。上海上野，木幡，佐原，松井，中島，篠崎，加藤に致書す。井芹，原田，武藤来訪。夜田中夫婦，並に佐久来訪。夜雷雨。

三月二十七日 積陰。是日熊本發世界一周の途に上らんとす。詰朝入浴。

明治四十三年七月二十七日起

日誌

熊本，広島，上海，天津，北京，漢口，上海

七月二十七日 午前岳丈来顧。田中清司亦来訪。留守中加藤壯太郎，米原繁蔵，中村新太郎，杉田與之助，児玉英蔵，阿部嘉志，西尾富次郎，梅原徳治郎，井内太平，佐々布質直の信，並に平井海軍中佐の電報，齋藤國男の電報に接す。毛利篤来訪。

七月二十八日 微雨。土屋元作，井手三郎，松倉兄弟に致書す。午前原田，武藤，辛島，毛利，内藤，隅田，山田，九州日々，河口，荒木，田中，早川，角田，佐々布，古莊，大江，井場，坂本を歴訪す。勝木，佐々布来訪。矢島来訪。松倉善家来談。

七月二十九日 晴。午前上田正喜，古莊韜，奥村傳，佐藤，田中両生，福島政太郎来訪。鳥居赫雄，土屋元作，古川俊，本島正札，八木富三，池部雀彦の信至る。安田善雄，安田善五郎の信至る。夜徳田，勝木，辻武雄，上妻来訪。

七月三十日 晴。緒方二三，久品介善来訪。鳥居赫雄，齋藤國男，浅井寅喜，辻武雄の信至る。佐々干城，久野尉太郎来訪。鳥居，齋藤，土屋員に復書す。早川新次来訪。齋藤國男の信至る。四時永野金十郎，正木，久野を訪ふ。

七月三十一日 晴。午前久布白，松倉兄弟，檜木，上妻，福島，吉田善門，久品介善，豊田，落合等を歴訪す。山田珠一，井場熊喜，平山岩，長野金，河口，落合等前後來訪。上妻の信至る。夜河口来訪。

- 八月一日 晴。午前武藤巖男，内藤儀十郎両氏来訪。岡辰喜，白石卯一來訪。山田珠一來訪。夜大江に至る。
- 八月二日 晴。矢野諸房来訪。鳥居，土屋，狩野，中島為喜の信至る。夜津野一雄，坂本政平来訪。
- 八月三日 晴。井芹，隅田，松倉親敬，高田九郎，吉田善門前後来訪。長野一誠翁の信至る。夜雷雨。
- 八月四日 晴，午後雷雨。江良惟一來訪。長野一誠，伊集院俊，吉田増次郎，亀雄，清浦奎吾諸氏に致書。外に中村，清水，梅原兄弟，本島，中島為喜，加藤壯太郎，高橋正二，米原，古川俊，八木富三に信片を發す。午後浅井寅喜，田中重来訪。夜古閑信夫来訪。
- 八月五日 陰。井手友喜の信至る。午後井手三郎来訪。
- 八月六日 晴。辛島，牛島，小早川来訪。午後永原虎雄，井手三郎，勝木恒喜，本島正礼，並に同文書院卒業生数人来訪。五時静養軒の請待会に赴く。二時間に亘る欧米漫遊談を為す。会する者山田，辛島，吉永，高岡玄眞，江良，武藤巖男，川野如矢，林立夫，平山，岡，中路，井手，松倉，勝木，早川，藤森，毛利，福島政，久野，中村元，矢島，渋谷，犬養，内藤正，小早川，緒方，池田勇，由比，隅田，門池，矢島七郎，板井，井芹，佐々布，本田，本島正，永原虎，佐藤敬，佐藤，々 [同]，田中，白岩，松村辰，河田，河添，平田以下総数八十人。
- 八月七日 晴。川島浪速，田山宗堯，土屋員安，白岩龍平，鳥居赫雄に致書す。内田友義の信至る。之に復す。倫敦山中商会よりテーマス舟游の題名録，並に写真を送り来る。北京波多博より支那館員録を送来。濱崎，風間，宮本，安田兄弟，八田，澤野，伏田，濱野，波多，上野岩等に復書す。大連田岡正樹の信至る。之に復す。海軍春日某来訪。井手，松倉來談，留て晩食す。夜阿部野来訪。
- 八月八日 晴。朝山田，河口，鎮西館を訪ひ，理髮，帰途牛島を敲き歸る。井手，勝木，沼来訪。晌午井手，勝木と水前寺臨水亭に至り，舟を賃して伊佐別荘に赴き，謡曲二，三番を歌ひ中食す。午後二時緒方，中路，阿部野，早川，高田，辻等来会。舟を雇て画湖に遊ぶ。日暮臨水亭に歸る。新月如眉，風趣甚可。九時車を賃して歸る。角田政治の信至る。
- 八月九日 晴。山田珠一に信片を發す。是日午前七時半の汽車にて門司に至り，更に広島忠海に赴かんとす。七時内人並に清子を伴ひ上車，上熊本駅に至り上車，鳥栖にて原口聞一に邂逅，同車門司に至る。二時着，石田旅館に投じ入浴，小休，忠海に電報を發す。五時商船会社の武庫川丸に搭ず。海上平穩。
- 八月十日 晴。七時宮島の前を過ぎ，宇品に至り梶泊半小時，八時半開船，音戸の瀬戸を過ぐ。両山相扼し水道甚狭し。右側の小島に平相国清盛の墓有り。午後一時忠海に達し上陸，亀雄來迎直に其寓に投ず。門司港に瀕し風光極佳。晡時城山に登り眺望。前面の海島久野島に砲台有り。内海の要地なり。
- 八月十一日 晴。午前六時より小舟を賃し亀雄及び家族と久野島海に泛で釣魚を試む。獲る所少なからず。正午鮮を割て中餐す。味頗美。午後二時半歸る。夜市中を一巡し郊外を散策して歸る。
- 八月十二日 晴。田岡，清水，中村新，西村時彦，奥村傳，土屋元作，末永一三，林安繁に葉書を發す。晚中学校長江口俊博來り食事を共にす。夜に入て雨。
- 八月十三日 陰。午前十一時利根川丸にて忠海を發す。弟夫婦來送。門司に至る一等船資十二円半たり。音戸，呉，宇品を経て夕陽宮島を過ぐ。満山の蒼翠斜照に映じ風致状す可からず。海上極て穩。
- 八月十四日 晴。午前七時半門司に達す。上陸車站に至り九時の汽車に乗ず。午後四時上熊本着，車を驅て家に歸る。吉田，伊集院両中佐，中澤武兵衛，岡幸七郎，生田，波多，井野，葉室，白岩，荒木善八，柏木幸助，鳥田儀一，小川平吉，米原，石川文，並に同文書院竹下小太郎，水上喜代八等の信に接す。不在中原田隆升，佐藤，田中之雄，西山，石原，上田正記，辛島格，池内源七，高木，木下等来訪せりと云ふ。
- 八月十五日 晴。是日旧曆盆会の為め家族同伴午前十時の汽車にて宇土に至り，車を賃して法華寺，城山の先塋を展し，奥村宅に至り中食の饗を受け，午後三時の汽車にて熊本に歸る。春日にて松倉を訪

ひ小談，帰途本荘に緒方二三，池田勇を訪ひ，五時帰宅。大野謙二郎来訪，留て晩食す。

八月十六日 晴。午前辛島，中路，田中之雄，井芹を訪ひ，去て阿部野を茶業組合に敲き小談。勝木と鎮西館に至り，正午帰る。夜大江を訪ふ。

八月十七日 午後雷雨。午前田中之雄来訪。濱崎，米原の信至る。木下来訪。

八月十八日 晴。桑原信五郎，井手三郎の信片，並に牧放浪，瀬川浅之進等の寄り合ひ書の信片至る。夜河口宅を訪ふ。

八月十九日 晴。軍令部岩村副官の電報至り，九月より余到北京出張を求め来る。野満四郎の信到る。吉田増次郎，増田高頼，伊集院俊三中佐に致書す。外に柏木幸助，石川安次郎，中澤武兵衛に復書す。帝国生命保険会社員木下来り余の終身保険一千元申込の手續を為す。

八月二十日 晴。午後辻武雄，古荘嘉門翁を訪ふ。四時西岸寺に至り河添泰喜の葬儀に列す。十八日病死せし者なり。池畑平次郎来訪。

八月二十一日 晴。豊田虎之進来訪。緒方二三，波多博，森茂の信至る。波多，森茂，上野岩太郎，津田武，高宮議に致書す。岩村海軍々令部副官に復書す。津野一雄来訪。午後津野を訪ひ，共に出て勝木恒喜を竹部に敲き，謡曲を謡ひ五時帰る。

八月二十二日 晴，熱甚。柏木幸助より蝦でんぶを贈り来る。日韓合邦決行さるべしとの新聞号外を配達し来る。夜石原醜男来訪。

八月二十三日 大雨。保険会社医員来り診検して去る。村山正隆長崎よりの信至る。海軍軍令部より北京出張旅費五百円を送り来る。田中瑞穂来訪。深水十八に本人推薦状を發す。海軍に金子領収証を發送す。韓国皇帝は国を挙て我天皇陛下の統治に帰し奉る事と為り，韓国は愈々我帝国の領土と為れり。石原来訪。

八月二十四日 晴。八木田直次，狩野直喜に致書す。午後荒木善八，田中瑞穂来訪。河野久太郎，八木田直次の信至る。

八月二十五日 晴，熱甚。海軍々令部次長藤井少将，並に竹下大佐，吉田，伊集院両中佐の信至る。余の北京出張に付き種々要件を報じ来れり。午前肥後銀行に至り海軍よりの送金五百円を受取り，帰途日本生命，帝国生命両保険会社に本月より明年八月迄一ケ年間の懸金を払込み，途中鎮西館に至り小談，帰る。佐藤，有働両生来訪。

八月二十六日 晴，熱甚。午後勝木恒喜，平田彦熊来訪。午後毛利篤，菅沼敏雄来談。柏木幸助に致書す。夜田中，河口宅を訪ひ，十一時帰る。

八月二十七日 晴。午後久品介善を訪ふ。本日上京するを以てなり。去て沙取に至り佐々干城氏を訪ひ小談，辞して臨水亭に至り古城貞吉の招待会に臨む。会する者二十余人。八時帰る。田中宗堯，田中瑞列来訪せりと云ふ。井手三郎の信至る。

八月二十八日 晴。木下廣次翁逝去に付き弔詞を發す。鳥居赫雄に致書す。晌午敬神党の祭事に藤崎神社内の式場に臨む。遺物の書画，刀劍，甲冑，衣類等を陳列す。十二時帰る。午後古城貞吉を京町に訪ふ，在らず。帰途池内源七，角田政治，佐々布遠を訪ひ，四時半帰る。

八月二十九日 晴。午後家族と沙取臨水亭に至り，親戚全部を請待し船二隻を賃し酒饌を具して画湖に遊び，五時半臨水亭に帰り小休，車を雇て帰る。角田政治，平田彦熊来訪せりと云ふ。

八月三十日 晴，熱甚，寒暖計九十五度。午前佐々布遠，河口介男来訪。午後田中，佐藤両生来訪。是日より有蘭善行を書生として寄宿せしむ。

八月三十一日 晴，熱甚。海軍々令部次長，並に竹下大佐，吉田中佐に復書す。平田彦熊，木下敬雄，西山武八等前後來訪。井手三郎，安河内弘に信片を發す。

九月一日 晴。内田康哉，山座円次郎，吉田茂，青木新，中島半次郎，岸倉松，尾崎盛恂，武者小路公共，上田仙太郎，田中耕太郎，井戸川辰三，亀井陸良，榎木俊三，桑原信五郎，齋藤力に欧米漫遊中

- の礼状を發す。田中新平の信至る、之に復す。午後鎮西館に至り小談。夜大江を訪ふ。
- 九月二日 晴。鳥居赫雄，古莊韜の信至る。上海中島為喜，加藤壯太郎に信片を發す。坂本政平來訪。新屋敷小学校に金十円を寄付す。夜家族と出て建町に至り，八時帰る。河口老母，古閑夫婦來談。
- 九月三日 晴。中村六蔵氏に地久節の事に付き答書を發す。安河内弘，朝日新聞社員の信至る。午前勝木恒喜，井芹経平，菅沼某來訪。
- 九月四日 晴。北京小森海軍少佐，並に上海井野春毅，福岡安河内に致書す。午前十時鎮西館の日韓合邦奉告式に列し，正午帰る。島田常三郎來訪。三時半池田に至り勝木の清国行を送る。葉室謙純の韓国より歸來せるに會ふ。五時帰る。
- 九月五日 雨。朝古莊嘉門翁來訪。角田真平，菅沼周次郎の信至る。有働生來訪。午後一時の汽車にて宇土に至り，奥村宅にて田畑新平列に會し田畑家政の事を談合し，六時の汽車にて帰る。途中春日に松倉善家を訪ひ，八時帰宅。古城貞吉の信，並に海軍々令部岩村副官の電信至る。
- 九月六日 大雨。朝大谷高寛來訪。田山宗堯，長崎郵船会社支店，角田真平，菅沼周次郎に致書す。安達謙蔵，岩村副官に致書す。荒木善八，勝木恒喜の信至る。晩内人と雨を冒し上車，高田原古閑宅の招饗に赴く。九時帰る。
- 九月七日 積陰，熱甚。午前葉室謙純，河口介男，古莊韜來訪。午後阿部野，久野來談。市原源次郎の信至る。長野一誠氏來訪。夜田中清司，石原醜男來談。
- 九月八日 雨。井手友喜，伊藤善之助に致書す。午後葉室，田中瑞穂來訪。田中は明日より營口に赴くと云ふ。六時山田珠一の招饗に静養軒に赴く。同座は山崎正菴，由比高等学校教頭，小早川秀雄等なり。九時辞歸。
- 九月九日 晴。午前岳翁，葉室，山田珠一，宇野貞友來訪。午後出て門池，久野尉，坂本政，井場，辻，葉室侃温，長野一誠，山田珠一，河口介，鎮西館平山中知，内藤儀十郎，古閑信夫，住田正章，毛利，辛島格，武藤巖男，原田隆升，町野健吉を歴訪して別を叙す。夜大江に至り告別，九時帰る。長野一誠，井手三郎に致書。
- 九月十日 晴。朝角田政治，田中清司，葉室謙純，佐々布遠，阿部野利恭を訪ひ叙別，九時帰る。辛島格，門池，阿部野，松倉，早川，住田，沼前後來訪。明日を以て家を辞し禹域に遊ばんとす。行李を取捨す。夜毛利，井場，上田正喜，徳田，石原，上妻，角田來別。朝來下痢数回に及ぶ。
- 九月十一日 穩晴。朝出て入浴す。内藤儀十郎，毛利篤，武藤巖男，原田隆升，岳翁來送。安達謙蔵，竹下小太郎の信至る。平田彦，安達，田畑新平に致書す。古莊韜，平山岩彦來り送る。午前十時半家を出て上熊本駅に至る。葉室兄弟，河口，上田正喜，早川，辻，井手，松倉，阿部野，中知，美濃部，上妻，石原，田中，田畑，住田，角田，久野，沼，等來り送る。八時四十七分長崎着，土佐屋に投宿す。
- 九月十二日 半晴。留守宅，平井，実相寺，川島，齋藤國男に信片を發す。午後三時旅館を出て春日丸に乗ず。黒澤岳州税関長，渡邊喜助，濱丈夫，土佐孝太郎等同船たり。四時十五分出口。海上平穩。
- 九月十三日 陰。海波稍高し。
- 九月十四日 陰。午前二時船呉湊口外に達し潮を待て仮泊す。七時半朝食。九時郵船埠頭に達す。加藤壯太郎，松井少佐，安村少佐，浮田郷次，井手友喜，木下温知，井野春毅，黒川新次，弘内一海，島田数雄，中島為喜，池部雀彦，藤井太七，澤本良臣等來訪。東和洋行に投宿す。井手，安河内，加藤，阿三，廷宝，篠崎等來訪。午後二時寺垣中将來訪，五時辞去。晩食後加藤駒治と談ず。藤井太七來訪。寺垣司令官より明日午餐の案内状至る。晩食前井手，加藤，長尾，篠崎を歴訪して帰る。雨。夜松井，中島を訪ひ，九時半帰る。
- 九月十五日 雨。午前十時領事館に至り有吉領事，浮田，三穂，徳永，古谷栄一等に面す。古谷は昔年漢口に於ける知人なり。十一時明石の汽艇にて旗艦に至り，寺垣司令官の招宴に列す。同座は黒澤礼

吉，東條隅田艦長，加藤少佐，真田艦長，安村，田中兩參謀等なり。二時辞帰。雨甚。南陽丸に至り木下，角田に留名刺而帰。村上貞吉，井野春毅，土井伊八，浮田，木幡列を訪ふ。木幡には母堂死去の奠儀五元を贈る。井手，安河内，加藤駒治等来訪。神崎正助来訪。

九月十六日 陰。留守宅に封信，並に信片を發す。海軍に着報を出し，大江，田中，川口，井手に致書す。海軍竹下，森兩大佐，吉田中佐に發信す。土井伊八，澤村幸夫，渡邊某，工藤常三郎信，平井徳藏の電報至る。工藤，土佐屋に復書す。晡出て中島を訪ひ，転じて加藤壯太郎の晚餐に北山西路の寓に赴く。真田明石艦長，安村參謀，浮田，三穂同座たり。十一時帰る。古谷栄一，横山，佐々布，市川等来訪。不在中安村，長尾，島田儀市等来訪せりと云ふ。

九月十七日 快晴。午前安達一時，石渡邦之助の帰国を春日丸に送る。帰途上海日報社に小談。中食後豊陽館に至り寺垣司令官，真田艦長，田中參謀等に面す。諸氏に〔は〕本日銭塘觀潮の為杭州に赴く者なり。三時帰る。河野久太郎，池部雀彦，秋田康世，並に熊本学生八人来訪。安河内来たり，本年一月より八月に至る三千円の利息三百六十円を納む。五時半井手友喜の招邀に赴く。同座は井野，池部，島田等なり。九時帰る。

九月十八日 陰，午後三時比雨。午前井手友喜と同文書院に根津を訪ひ中食の饗を受け，福岡，小田，安河内，青木等に名刺を留めて帰る。帰途河野久を大倉を訪ひ，二時帰寓。山田純三郎，藤富敬三，児玉英藏，木幡恭三等来訪せりと云ふ。四時出て松尾，島田儀市，秋田，神崎，荻野，古谷，横山を歴訪し，六時井野宅の晚餐に赴く。秋田，井手同座たり。九時月を踏で帰る。是夜中秋之望月色甚朗。

九月十九日 微雨。留守宅，緒方，阿部野に致書す。午後出て井野に至り齒を療し，去て井手友を訪ひ，転じて島田数雄の病を問ひ，澤本に名刺を投じ，帰途加藤壯太郎，佐々布，藤富等を訪ひ，五時帰る。篠崎来訪。海軍より十月至十二月三ヶ月分手当五百五十円を送り来る。岩村副官に致書，金子領収証を送る。

九月二十日 陰。午前海軍よりの金子を受取り之を正金に預入す。木幡来訪。午後篠崎を訪ひ，理髪して帰る。狄を訪ふ，在らず。天津瀬上恕治，並に北京中畑栄，上野岩太郎，小森正鋭に致書す。熊本留守宅に發信，出発を報ず。嘉悦敏，松井石根来訪。嘉悦は今日北京より来着，近日緬甸より雲南干崖に入り明年正月四川に出て帰国すと云ふ。大賀亀吉，野満四郎に致書す。晚嘉悦と松井の晚餐に赴く。加藤壯来会。十一時帰る。

九月二十一日 晴雨無定。午前根津一，嘉悦敏，松井石根来訪。中食後寺垣司令官を豊陽館に訪ひ，去て書籍一，二冊を購ひ，帰途瀬川浅之進の来着を聞き之を領事館に訪ひ，共に出て寺垣中將を敲き小談，帰る。井手友喜来訪。六時伊東米次郎，有吉領事の招宴に六三亭に赴く。寺垣中將，瀬川，嘉悦，松井，鈴木，三谷，深野，並に香港郵船支店長楠本武俊等同座たり。九時帰る。池部政治の信至る。

九月二十二日 雨。海軍々令部菅沼周次郎に致書す。午前加藤，安村兩少佐来訪。寺垣司令官，木幡恭三，池部雀彦，福岡禄太郎来訪。午後河野久太郎，西田善藏，澤村幸，水上，波多野，佐々布，藤富，福田，児玉列来訪。留守宅，井手三郎，松倉善家に致書す。是日日本人俱樂部より招待有り，之を辞す。御幡雅文，青木喬，中島為喜，松井石根，藤井太七，甲斐友比古，安河内弘，井野春毅来訪。夜出て井手宅を訪ふ。八時和田連次郎，嘉悦敏，篠崎，井手，加藤壯太郎，加藤駒等来訪。

九月二十三日 晴天。是日此地を辞し北清に向はんとす。早起行李を戒む。午前九時東和洋行を出で金利源碼頭に至り，招商局の新銘号に搭ず。井手友，井野，池部，甲斐，小笠原，西山，河野，加藤壯，山田純，藤井兄弟，辻等来り送る。心気不舒。正午開船。呉淞口外に出れば波浪甚高し。晩食を用ひず。

九月二十四日 微雨，波浪甚高。夜に入て風濤險惡，船体揺動已まず，眠を成す能はず。

九月二十五日 晴。午前九時船芝罘に入る。浪高ふして上陸する能はず。空く港内に錨泊して一日を送れり。

九月二十六日 快晴。午前八時上陸。市中を巡覧し煙台半島を一周して、領事館に至り土谷副領事、三浦一等に面し小談。去て画葉書を買ひ郵便局に至り内人、清子、並に寺垣司令官に発信し、十時帰船。是日秋空如拭、海山画くに似たり。船楼四望甲午の往事を追懐し感慨四集。二時半開船。同文書院修学旅行生豊島彦四郎、富森皆三、石川道弘の三人来り船に乗ず。六時長山列島の間を過ぐ。是日晴空寥廓、夕陽甚だ好し。上海天津間一等船賃六十弗。上海芝罘に四十二時間を要し芝罘天津に二十四時間を要せり。太沽口より天津迄白河を溯るに七時間を費せり。

九月二十七日 快晴。午前七時太沽口外に達す。潮を待つ少時、八時啓輪、九時白河口に入る。昔年北洋の重鎮たりし海辺の砲台營壘、北清事変以来全く廢墟と為り旧觀を留めず。余白晝に白河の全流を溯りしは、二十年九月大屋半一郎と偕にし、二十一年佐野直喜と共にせし以来、今回を第三次めとす。三十六年には夜中之を下りしなり。九時四十分塘沽を過ぐ。郵船会社の出張所有り。曲折迂廻して七十二沽を溯る。兩岸の荻花秋風水の如く、満月蕭条詩思頻に動く。午後二時右岸に塩坨有り、高低遠く相連る。兵を置いて之を守る。二時半紫竹林の棧橋に達す。芙蓉館の店員、並に瀬上恕治馬車を以て来り迎ふ。瀬上と同車、旭街芙蓉館に投ず。小休、出て小幡領事、及び三浦喜傳を訪ひ、五時帰る。小幡領事西吉、新橋栄次郎来訪。木幡より今夕敷島に招飲、之を辞す。鮫島三雄、森川某来訪。晚同文書院卒業生の此地に在る者より招待す。之を辞すれども可かず、已むを得ず之に赴く。来会田中茂松、鮫島、内藤士謙、副島、江原、村岡、富岡、藺村、森田元の十三人なり。九時半敷島を辞して帰る。北京小森少佐、上野岩太郎、中畑栄に明後日入京を報ず。

九月二十八日 晴天。朝三浦喜傳、田中清、瀬上恕治前後來訪。熊本留守宅、安河内、加藤壯太郎、井手友喜、岡幸七郎、山田珠一に発信。正午三浦宅中餐の招に赴き、四時前帰る。矢田領事官補来訪せりと云ふ。森、田岡に詩信を發す。高島醇、古閑次郎来着。晚同県人の招宴に列す。会者三浦、田添豊造、田中清、真藤捨世、中村致夫、紀田寛作、齊藤藤壽、豊岡良平、内藤熊喜、古閑次郎、高島醇、瀬上恕治等なり。十時散ず。昨日白河途上所得二絶如左。

飄蓬身世伴閑鷗、白水潮平樹影浮、無限金風吹不斷、荻花七十二湾秋。

其二

萍跡西東道万千、老来意氣欲凌天、塞雲辺月感多少、一褐秋風又入燕。

九月二十九日 晴天。早朝古閑と別れ、八時二十分芙蓉館を辞して河北車砧に至り、八時五十分北京行の汽車に乗ず。瀬上、塚崎、田中清、内藤熊等来送。十一時四十分北京前門着、大河平書記官、狩野直喜、上野岩太郎、波多博、高宮議、津田武、中畑栄、小森少佐、林貞雄等の諸氏来迎。丁香胡同の海軍官舎に投ず。小森、上野と会食す。午後波多博、高宮議来訪。四時小森氏と出て伊集院公使、本田書記官、松岡洋右、高尾亨、中畑栄、下瀬軍医、青木少将、本莊少佐、菊池駐屯隊長、狩野直喜、内藤湖南、小村俊三郎等の諸氏を歴訪して帰る。中川芳三郎、岡本理治等来訪せりと云ふ。夜本田佐八来訪。

九月三十日 快晴。午前小森、実相寺、高尾、伊集院公使、小村俊、中畑栄、大河平隆則、岡本理治、中川芳三郎等を歴訪し、去て順天時報館に上野、津田、高宮、波多、山崎等を訪ひ、正午帰る。東京増田中佐の信至る。午後狩野直喜、中川芳三郎、神田正雄等来訪。

十月一日 快晴。午前神田を訪ひ、去て汪康年を梅竹胡同に訪ふ。病弱憐むべき者有り。去て良弼を後円恩寺胡同に訪ふ。西華門に転居せりと云ふ。川島浪速宅に至り松本菊松等と小談、帰る。山崎、波多、小森、小村俊三郎来訪。松田藤男、岡本理治来訪。

十月二日 快晴。是日同文書院出身者の案内にて通州に遊ばんとす。七時岡本来迎、共に出て前門車站に至り同四十分通州行の汽車に乗ず。八時二十分宝通寺駅着下車、西門を入り北門内の天興居飯館に投じ小休、北門の城壁に上る。眼下の大道は山海関に通ずる者なり。回顧すれば、明治二十二年北京より友を送りて此に来りし以来屈指已に二十又一年矣。俯仰今昔多少の感無き能はず。城壁を歩いて

東門に至り、転じて天興居に帰り中食す。午後四時出て車站に至り、五時二十分の汽車に搭じ北京に帰る。同遊者は中川芳三郎、岡本理治、川上市松、田中、高島、本田佐八、安藤、外三名なり。三浦國器来訪せりと云ふ。

十月三日 健晴。朝小森氏来訪、馬車共に出て小村俊三郎を訪ひ小談。去て順天時報社に上野を訪ひ、三人同車順治門内に至り摂政王資政院開院式に臨むの光景を観る。沿道禁衛軍、歩軍統領の兵士、巡警を以て警戒し、兵馬雜還大敵に臨むが如し。正午驪從順治門内の法律学堂なる資政院仮議事堂に入り開院式を挙行せり。是日内外人の傍聴を禁じたり。帰途青木少将、伊集院公使を訪ふて帰る。熊本宅、寺垣司令官に致書す。

十月四日 晴。午前三浦國器、波多博、山崎膽、小森少佐来訪。海軍々令部に報告を致す。東洋協会門田正経に致書す。晚伊集院公使の饗宴に赴き、十一時帰る。

十月五日 快晴。午前實相寺、本多、松岡洋右等を訪ひ、正午帰寓。田中第三艦隊参謀、露国田中中佐、田中水穂の信至る。田中、安村両参謀、加藤壮太郎、井手友喜、高田九郎に致書す。午後石川半山、汪康年来訪。夜青木少将宜純の招宴に赴く。伊太利、西班牙の武官同座たり。十一時帰る。

十月六日 積陰。心気不舒。朝豊島捨松を訪ふ。昨夜帰来せる者なり。去て李盛鐸を東单牌楼二条胡同に訪ふ、在らず。上妻博路、岩村大佐の信至る。鳥居、土屋員安、土屋元作、井手友喜、上妻博路、内田友義に信片を發す。午後石川半山を訪ひ、去て外務部侍郎曹汝霖に名刺を留め、禁衛軍旅団長良弼を光明殿胡同に訪ふ、在らず。帰途小林吉人、上野岩太郎を訪ひ小談。四時半前門車站に青木少将の帰国を送ら [り] 帰る。雨。

十月七日 晴。午前波多博来訪。正午小森と資政院に至り議會を傍聴す。高宮、上野、神田諸人来会。午後二時に始まり四時に散ず。倫貝子總裁を以て議長を兼ね。帰途順治門より城壁を歩して帰る。汪康年の案内状至る。大河平隆則来訪せりと云ふ。

十月八日 快晴。李盛鐸、汪康年、鷺澤に致書す。晚小森、余の為に公使館本多、大河平、本莊、中畑、高尾、小村、下瀬以下を招き会食す。十時散ず。海軍々令部へ報告を發し、九州日々、上海日報に資政院の概況を報ず。

十月九日 快晴。午前理髮。林と城壁を散歩し、晌午帰る。津野、村松岩、清水十二郎、外山捨造の信、並に露国田中、上田、佐原、小田合作の信片、留守宅の書状到る。正午順天府丞李盛鐸来訪。相見ざる十二年、寛談時を移して去る。川島謹一來訪。奉天井深に詩信を發す。

大地茫々一葉秋、江山滿月入新愁、燕雲遼水人千里、夢落塔湾雪夜舟。

狩野直喜、上野岩太郎、波多博、外一人来訪。

十月十日 快晴。海軍吉田中佐、清水十二郎、留守宅に封信、米原、村松、石原、河口、住田、瀬上に信片を發す。午後正金に至り少坐、帰る。内田友義の信至る。豊島捨松来訪。大河平より明晩招邀の案内至る。

十月十一日 快晴。佐野直喜、末永一三、河野久太郎、松井石根、中島為喜、井野春毅、三浦喜傳に致書す。午後小林吉人、本莊少佐来訪。晚大河平の招饗に赴く。同座は豊島、下瀬、狩野直喜、内藤虎次郎、外一名なり。食後鉢ノ木、加茂を謡ひ、十二時帰る。

十月十二日 快晴。午前豊島、鷺澤、汪康年を訪て、去て李盛鐸に抵り、正午帰る。午後林と城壁に上り前門に至り、城を下り廊房頭条胡同を見る。昔年積善堂の所在地にして二年以上居住せし所。市街全く一変し旧址尋可からず。此を去て二十年、今日重遊今昔の感に禁へざるなり。夜小森氏の晚餐に赴き、九時帰る。

十月十三日 快晴。朝八時半前門外東車站に至り狩野直喜、内藤虎次郎等の帰国を送り、去て順天報社に上野、波多、津田を訪ひ、十時帰る。三谷末次郎来訪、本日奉天より来着せりと云ふ。法学士齋藤延、波多博前後來訪。軍令部吉田中佐に致書す。

- 十月十四日 快晴。重慶宮坂九郎に致書す。奉天中西正樹、熊本井手、早川、上海山田純三郎に信片を致す。松倉の信至る。之に復し、別に西村天因に致書す。午後三谷、齋藤、小森を訪ふ。
- 十月十五日 快晴。海軍に報告を發す。副島八十六に致書し大隈伯の來遊を勸む。熊本留守宅に寄書す。午後三谷末次郎來訪、晚餐の案内を為す。先約有るを以て辞す。六時大河平を訪ひ小談、去て順天時報上野岩太郎の招宴に赴く。同座は小森、小林兩人なり。十一時辭歸。
- 十月十六日 微雨。波多と門頭溝に遊ぶの約有りしも雨の為に中止す。終日在寓。
- 十月十七日 晴。神嘗祭。南満会社留学生江藤大吉來訪、同県人なり。午後城壁上を散策す。波多博來訪せりと云ふ。晚小森の晚餐に赴く。齋藤延夫婦同座たり。十時辭歸。月色甚好。上海加藤の信到る。
- 十月十八日 晴。波多博來訪。寺垣司令官、増田高頼、堀田英夫、岡幸七郎、上海日報、九州日々社、加藤壯太郎、赤松慶太に致書す。晚齋藤延の晚餐に赴く。
- 十月十九日 陰。午前安藤不二男、波多博來訪。午後資政院議会に至り傍聴す。国会速開案緊急動議として提出され審議に付する事と為れり。五時歸る。中川芳三郎より案内有りしも行かず。松本菊熊來訪、二十一日会に招待の事を告ぐ。
- 十月二十日 陰。留守宅の信二通、吉田壽三郎、井手友喜の信、並に二十一日会の案内状至る。井上雅二より其新著に係はる巨人荒尾精一冊送り來る。井手友に信片を致す。海軍々令部に報告二封を發す。午後豊島捨松來訪。小川勝猪、波多、鷺澤與四二前後來訪。安村、田中兩參謀に発信す。
- 十月二十一日 晴。海軍への報告、並に東洋協會門田正経に致書す。中川、岡本、林出、本田、波多諸人に明日晚餐の案内状を出す。午後三井川嶋銃一來訪。六時小森少佐來訪、共に出て日本人倶楽部の二十一日会の招待に赴く。酒間諸人の歡迎演説有り。來会者本多熊太郎、大河平隆則、松岡洋右の三書記官、高尾亨、本莊、小森兩少佐、菊池駐屯隊長、町野大尉、下瀬軍医正、小林吉人、松本菊熊、実相寺貞彦、鷺澤與四二、中畑栄、石川安次郎、高宮議、豊島捨松、松本重威、外二、三人なり。九時散ず。更に諸氏の東道にて長春亭の歡迎会に臨む。余を主賓とし、主人には本多、本莊、小森、菊池、実相寺、大河平、高尾、松岡、上野岩、小林、高宮、神田正雄、小村俊三郎、鷺澤、中畑、石川、豊島等の諸友なり。高興湧くが如く極て盛会なり。十一時散ず。
- 十月二十二日 陰。田中清司、田畑新平、留守宅、大江、河口に致書す。大連森茂の詩信至る。中食後順天時報に至り高宮、神田等同道、資政院に至り議会を傍聴す。是日国会速開問題を議し、満場一致一名の異議無くして可決し、起草員六名を設て上奏文を作る事として散会せり。五時歸る。晚同文書院出身中川、岡本、林出、波多、本田、並に小森少佐、林を招き晩食す。本庄少佐來訪。九時散ず。画家大聖寺、内藤虎次郎の紹介にて來訪。
- 十月二十三日 晴、風大。海軍に報告を發す。津田武來訪、留て中食す。小森、齋藤兩氏來り散歩を誘ふ、行かず。東洋協會に報告を發す。寺垣司令官に報告の複写を送る。実相寺より明日晚餐の案内至る。土屋元作の信至る。
- 十月二十四日 快晴。漢口岡、九州日々山田、上海中島に資政院の状況を報ず。午前出て公使、本多、本莊、菊池を訪て歸る。赤松慶大の信、並に公使より天長節夜会の案内状至る。海軍吉田中佐に発信す。七時実相寺の招宴に正金銀行に赴く。同座は伊集院公使、本多、大河平、松岡三書記官、高尾、豊島、小村、外一人なり。支那料理の饗有り。十一時散ず。
- 十月二十五日 快晴。夜來頭痛甚。午後高宮議、神田正雄來訪。栗村顯三郎死去の訃至る。齒痛。
- 十月二十六日 快晴。堀田少佐に致書す。波多、小森來訪。
- 十月二十七日 陰。海軍に報告を發す。午後城壁を散歩し、歸途理髮して歸る。
- 十月二十八日 快晴。松田満、松島正吉、坂田長平に致書す。上海山田純三郎の信至る。禁衛軍良弼に致書す。豊島を訪ふ、在らず。齋藤延の処に小談して歸る。夜小森宅の晚餐に赴き、九時歸る。
- 十月二十九日 快晴。午前五時より小森、齋藤、林と暁を侵して崇文門外の暁市を看る。賤民雜還、陳

する所の貨一として見るに足る者無し。八時帰る。岡幸七郎，野満四郎の信至る。大井少佐，津野一雄，留守宅の信至る。波多博来訪。野満四郎，吉田寿三郎，深水十八，森茂に復書す。大河平隆則来訪。

十月三十日 積陰，微雨。本田佐八来訪。熊本宅の信至る。留守宅，上妻に致書し，別に栗村顕三郎の死を弔し其未亡人に致書す。津野一雄，永原虎雄に致書す。上野岩太郎来訪。波多，中川，松岡洋右，高尾亨来訪。

十月三十一日 陰。冷氣頓加，始て冬衣に更む。小森来訪。

十一月一日 快晴。三浦國器来訪。軍令部に報告を發し兼て南下の事を通報す。午後順天時報に上野，高宮列を訪ひ，四時帰る。

十一月二日 晴。井手三郎，藤本親信に致書す。羅馬大使館書記官吉田茂の信至る。松本菊熊，波多博来訪，留て中食す。吉田中佐に致書，報告に代ゆ。

十一月三日 天長節。快晴。九時公使館に至り聖影を拝し，駐屯軍の分列式を觀，終て軍隊内の余興を縦覽し，正午祝宴に列して帰る。大井少佐に致書す。井手，佐野，松倉，齋藤國男，勝木，河口，松井石根，加来敏夫の信至る。天長節紀念画葉書を内人と清子に致す。勝木，齋藤に復書す。七時伊集院公使の夜会に臨む。九時帰る。

十一月四日 快晴。朝高尾亨の帰国を送る。是日午前十時半日本，米國に遊歴中の載洵貝勒帰京す。海軍吉田中佐にイ号私信を發し国会開設年限の事を報ず。外に加藤少佐，岡幸七，橋三郎に致書す。製鉄所事務官田島勝太郎来訪。実相寺より晚餐の案内有り。波多来訪。夜実相寺宅に至り会食す。同座は製鉄所長官中村中将，西澤公雄，田島勝，三好，三菱若松店長，外一人なり。十一時帰る。国会開設の期限を宣統五年に縮短するの上論出づ。

十一月五日 快晴。井手友，小林和介に信片を發す。海軍に報告を發す。宣教士丸山傳太郎，画家大聖寺宗軒，小森少佐来訪。狩野直喜の信至る。加藤壯太郎に報告の写を送る。午後波多，堀内干城，小川某来訪。城壁を散歩す。八時総布胡同鷺澤宅に至り国会請願代表団孫洪伊（直隸），諮議局常駐員陳登山（湖北），資政院議員吳賜齡（広西），仝李素（山西），国民公報主筆徐公勉（湖南）等に会し酒間時事を談じ，十二時半散ず。邦人の同席は鷺澤，波多，松本菊熊，小川某なり。林出賢次郎来訪せりと云ふ。

十一月六日 快晴。午前本庄，実相寺，中村雄二郎，西澤公雄，小森，本多書記官等を訪ひ，十時帰る。京都狩野，土屋，鳥居，井手，松倉の合作信片，竹下大佐勇，田中清司，瀬上恕治の信至る。海軍軍令部に報告を發す。

十一月七日 晴。午前豊島捨松，神田正雄，田島勝太郎，汪康年，鷺澤等を訪ひ，正午帰る。午後石川半山を訪ひ旁聴券を借り資政院に至り，傍聴半にして出で，石川，上野を訪て帰る。夜本多より長春亭に招宴，辞して往かず。小森と出て前門城壁に上り各学校生徒の提灯行列を看る。其数極て多く皇居の大清門外と前門の間に群集し，車馬の往来全く杜絶するに至れり。宣統五年国会開設の事発表せられたるを以て之を祝する者なり。夜更雨。

十一月八日 陰。鉄峯領事館焼失せるを以て森田領事，並に内田，本田，森岡に見舞状を發す。東京井手に信片を發す。

十一月九日 陰寒。中島為喜，岡幸七郎に致書す（支那郵便）。藤井太七に致書す。波多来訪。留守宅の信，並に寺垣司令官の書信至る。夕川島浪速の帰京を迎ふ。

十一月十日 晴。午前本庄，本多を訪ひ，晌午帰る。熊本九州日々社に通信を發す。夜汪康年の招宴に東四牌楼福全館に赴く。同座は大学堂教官蔣，汪，範の三人と上野，小村，豊島，山崎膽等なり。十時散ず。

十一月十一日 快晴。前十時豊島を誘ひ漢陽製鉄所長李維格を北京ホテルに訪ふ，在らず。午後小森を

- 訪ひ小談。大阪西村時彦の信至る。夜小森宅の晚餐に赴く。
- 十一月十二日 晴。終日在寓，去年北清旅行紀を卒業す。
- 十一月十三日 晴。上妻，安村介一，田島勝太郎の信至る。海軍に報告を發す。勝木恒喜に致書す。江藤大吉，小森夫婦，波多，本田佐八來訪。本田を留め晩食す。齋藤國男の電報至る。
- 十一月十四日 晴，陰。午前滿洲日々新聞主筆稻垣伸太郎來訪。正午齋藤延，小森夫婦を午餐に招く。土屋員安，森茂，深水十八，内田友義，森田鉄峯領事，田岡正樹の信至る。熊本宅，並に土屋員安に葉書，田岡正樹，狩野直喜，齋藤國男に封信を發す。波多，三浦國來訪。
- 十一月十五日 晴，風塵大起。九時前門外に至り西澤公雄，齋藤延等の帰漢を送る。豊島と大河平の宅に至り茶を啜り，グランドホテルに成田鍊之助を訪ふ，在らず。本多書記官，伊集院公使を訪ひ暢談，一時前帰る。夜小森來談。
- 十一月十六日 風大，寒氣頓に加ふ。森岡正平，吉田寿三郎の信至る。午後波多來訪。晚古市博士の謡曲を聴かん為め袂背胡同の正金住宅に赴く。待て八時に至る。風邪の為來らず。謡会員十余人と会食して帰る。
- 十一月十七日 晴。海軍に私信にて報告を發す。成田鍊之助來訪。川島浪速より明午餐の邀帖至る。留守宅に致すの信を認め三浦の帰国に托す。晚波多，三浦，林三人を招き火鍋子を会食す。
- 十一月十八日 快晴。朝小森來訪。十一時川島浪速宅の午餐に赴く。同座は古市博士公威，成田鍊，町野大尉夫婦，松本菊熊等なり。食後古市氏の謡有り。二時成田，古市と孔子廟を見る。周代の石鼓有り。国子監に至る。中央に乾隆帝の玉座有り。背後大学を刻す。字体甚勁拔。廻廓に十三經の石碑有り。孔子廟修繕の為め廟中の至聖先師孔子神位，並に十哲，其他の神位も国子監中に収容中なり。元明時代の石碑等有り。孔廟と国子監構内の柏樹老蒼愛す可く，皆二三百年代の物なり。去て雍和宮に至る。西藏仏，並に五百羅漢等有り。現に黃紀喇嘛僧の數五百人有りと云ふ。帰途三条胡同に稻垣伸太郎を訪ひ名刺を留て帰る。夜小森宅の晚餐に赴く。同座は上野夫婦，岩井尊文等なり。十時帰る。
- 十一月十九日 健晴。午前大河平を訪ひ小談。実相寺，中畑に名刺を留て帰る。城壁上を散歩す。明日三浦國器の帰国に托し留守宅に栗を送る。
- 十一月二十日 穩晴。午前波多，小森來訪。十一時西直門外植物園（万種園）の飯莊に県人会の招待に臨む。上野岩太郎，津田武，小林吉人，以下四人なり。支那料理の饗有り。五時帰る。軍令部吉田中佐，並に熊本永原虎雄，留守宅の信至る。
- 十一月二十一日 快晴。去年今日は北京を去て漢口に下りし日なり。長崎九州日之出新聞社岩永八之丞來訪，一昨日来着せりと云ふ。海軍に報告を發す。
- 十一月二十二日 雪。九時半前門外に至り成田鍊之助，古市公威の漢口に下るを送る。小田切萬壽之助に邂逅す。山崎膽，松本菊熊，波多博前後來訪。井手友喜，西本省三の信至る。漢口岡に致書，三十日出發を報ず。晚本庄少佐宅の小集に赴く。会者本庄，川島浪，小森，波多，松本，鷺澤，並に天津軍医某なり。十一時帰る。
- 十一月二十三日 晴。朝岩永八之丞，秋山昱禧，豊島捨松を訪ふ，在らず。秋山，小森來訪。狩野直喜，内藤虎次郎，吉田増次郎，齋藤國男の信至る。井手，西本に復書し，海軍に報告を發す。熊本留守宅に致書す。岡幸七郎，橘三郎，田岡正樹に信片を發す。
- 十一月二十四日 晴天。名和少将に致書す。波多來訪。阿南鎮民，西沢公雄，軍令部，熊本留守宅の信，並に大河平より送別の為め今夕小集の案内至る。川島と先約有るを以て之を辞す。二時汪康年を東單牌樓金魚胡同對過梅竹胡同芻言報館に訪ひ別を叙して去り，分司庁胡同に川島を訪ふ。小田切在焉。晩食後寛談，十時に及び別を告て帰る。
- 十一月二十五日 穩晴。阿南，熊本留守宅に復書し，海軍に報告を發す。午後本庄，大河平を訪ひ，去て石駙馬大街に至り小林吉人を訪ふ，在らず。帰途順天時報社に上野，津田，山崎，高宮，波多を訪

ひ別を告て帰る。

十一月二十六日 穏晴。午前豊島，神田，小田切，鷺澤を訪ひ告別す。午後伊集院公使，本多書記官，中畑等を訪ひ実相寺を敲き小談，五時有吉明を迎へ，七時森大佐を迎て帰る。正金中川より明日招宴の帖至る。多忙を以て辞す。

十一月二十七日 陰寒。正午小田切，実相寺来訪。其の案内にて小田切の寓に至り会食す。同座は豊島，鷺澤，神田等なり。四時帰る。岩永八之丞を三菱に訪ひ別を告ぐ。其の本日出発，満洲に赴くを以てなり。海軍に報告を發す。松本菊熊来訪せりと云ふ。

十一月二十八日 雪。午前松本菊熊来訪。午後波多博来訪。夜八時石川半山の招宴にグランドホテルに赴く。同座は上野岩太郎，豊島捨松，川島浪速，小田切萬壽之助等にして，余の送別宴なり。十時帰る。

十一月二十九日 大雪紛飛，乾坤一白地上積むこと尺許。午前公使館に至り公使，有吉上海領事，大河平，小村等に別を告げ，正金に中川，岡本に別れて帰る。正午波多博，松本菊熊，小森氏と四人中食す。明早啓程南下せんとす。行李を取捨す。大河平来り別る。晚伊集院公使の招宴に赴く。同座は有吉明，森大佐，本多，松岡両書記官，小田切，実相寺，小森，小村，川島，大河平，中畑，本庄，下瀬，近藤，矢田，平塚等なり。十時別を叙して帰る。豊島，杉の郵便局長，内田，林出，小村俊等来り別る。神田，江藤来別。

十一月三十日 雪。午前五時半起床。行李を戒め別を森氏に告げ，六時前門西車站に至り漢口行七時の汽車に乗ず。小森，上野，波多，松本，林，本田，小林，津田，高宮，江藤，稲垣，内田，岡本，川島，中川等暁を侵して来り送る。七時発車。沿道積雪皚々，銀世界の如し。九時定興県を過ぎ易水を度る。昔年単旅風雪を衝て之を度る，回顧正に二十一年矣。正午新樂県を経て濁漳河を過ぐ。一時正定に到る。熊本宅に信片を致す。車中開封人張登雲に邂逅す。早稻田出身の者にして邦語を善くす。順徳府にて北京上野，波多，津田，並に東京佐藤真一，清瀬規矩雄に信片を郵寄す。夜十時半彰徳府着。雪を踏で迎賓館に投ず。破壁寒灯，冷氣肌を刺し眠を成さず。

十二月一日 晴。午前六時宿を出で七時の車に乗ず。熊本留守宅，井手三郎に信片を發す。黄河北岸に至れば雪全く無し。夜来心気不舒，悪寒頭痛，車中嘔吐数回，頗艱む。午後六時駐馬店着，冲長松，林田勇，塩見某来迎。漢口日報にて余の南下を知り来迎せりと云ふ。第一賓館に投宿す。晚餐に洋食を取る。沿道第一の旅館なり。冲，林田来談。留守宅，川島浪速，吉田中佐，小森，林貞雄，根津一に信片を發す。

許州以南地味肥沃，鄆城より南水路舟楫の便有り。

河南知県陸寿図来談。

十二月二日 晴。六時茶を啜り旅館を出で汽車に上る。広水に至り中食す。此地溪山の風致旧に依て好し。王家店に至る。駅の左方に石山有り。盛に建築用の石材を出す。午後五時漢口大智門着。橘三郎，岡幸七郎，宝妻，渡邊郵便局長，波多野春作，中久喜信周，隈元喜助等来迎。橘公館に投ず。角田隆郎，曾田某，中久喜，中津純人等来訪。入浴後橘，岡，宝妻と会食し，八時半諸子と出で義士伝の講談を聴き，十一時帰。

十二月三日 晴。午前出て理髪し，渡辺，長安を訪ふ。長安の店にて中食し，帰途正金に小林和介を敲き帰る。濱丈夫，中久喜来訪。午後來栖領事，波多野，角田，岡等を訪ひ，四時帰る。晚岡宅に至り橘，長安，宝妻等と会食す。

十二月四日 晴。午前四時起床。岡，宝妻，濱丈夫，内田，佃，茂木と三菱の小汽船にて羊樓に下り獵す。午前一の獲る所無し。晌午下游白虎山に下り雉子二羽，鴨一羽を獲，三時船に帰り，七時漢口に帰着す。村松，有安，三木，中地，香月梅外等来訪せりと云ふ。

十二月五日 陰。頭痛。朝来栖領事代理来訪。午前楊子荃，李泉溪来訪。岡西門の処に至り中食す。熊

本宅，井手友喜に発信す。晚香月，橘，宝妻，来栖，小平，中久喜等と岡宅にて昨日の獵獲物を会食す。

十二月六日 陰。平岡小太郎，三木甚市来訪。角田より晚餐の招有り。先約有を以て辞す。午後岡と骨董舗に至り玉製硯屏一座を購て帰る。小林和介来訪せりと云ふ。夜九州日報水野疎梅，岡西門，小平篠坪，岡山雲介，中久喜信周等と詩会を催し五古一篇を合作し，十時散ず。

十二月七日 陰天。石丸素一來訪。晚同文書院出身者の歓迎会に山月亭に臨む。角田隆郎以下会する者三十人。香月，平岡亦来会。余一場の講話を為し，歓談十時に及で散ず。

十二月八日 快晴。午前香月と出て三馬頭に至り筆を購ひ帰る。北京松本菊熊に致信す。晚角田の招宴に福宮に赴く。余を主賓とし同座は橘，岡，永峯，香月，平岡等なり。十時散ず。

十二月九日 晴。午前橘，岡，香月等と新築領事官舎を覽す。晚橘の東道にて喜楽に至り雑煮，汁粉，鶏飯を会食す。七時青年会に至り一場の講話を為す。聴集，武漢兩地の人士百余人，清人数人有り。一時間の談話を為し，八時半帰る。

十二月十日 晴。午前三井に丹羽，横山を訪ひ，去て角田，長安，三木を敲き帰る。中食後民団に大間智，日報社に岡を訪ふ。上海中島に致書，十三日の南陽丸にて下江を報ず。佃某，河井平次郎来訪。夜日本人倶楽部の招邀に赴く。十時帰る。

十二月十一日 陰，朔風凜烈。午前四時起床。小輪船にて白虎山に赴かんとす。風大にして船を出す能はず。因て大智門車站に至り汽車にて瀨口に向はんとす。時間後れて及ばず。再び折回して小輪に搭じ青山に至り上陸，僅に鳩一羽を獲，三時小舟を雇て帰る。風大にして浪高く危険甚し。六時漸く漢口の下流に達し上陸するを得たり。七時正金小林和介の招宴に赴く。余を主賓とし，角田，橘，丹羽，高木，長安，渡邊，河野医士，岡，菊池，志保井等なり。十時半散ず。隈元来訪。田岡の信片至る。

十二月十二日 陰寒。北京小村に托し波多に時計を返却す。午後岡を訪ふ。晚来栖官補の招宴に其の官邸に赴く。十時辞帰。

十二月十三日 晴。午前三井，正金，日清，三菱，郵便局，領事官，岡等を歴訪して別を叙す。午後市川信也来訪。晚橘の饗有り，角田，来栖，岡，中久喜，濱，宝妻等来会。八時南陽丸に上る。橘，岡，角田，長安，宝妻，中地，隈元，横山，小林，渡辺，中久喜，来栖，佃，波多野，河野，渡辺，隈元，村松，白倉，濱，三木，曾田，市川，茂木，大間知，横田，牧田，中津，並に高木，福島，河井等来送。九時開船，諸友と握別す。微雪澹月江城夢の如く，風趣状す可からず。木下と談じ，十一時半入浴，就寝。

十二月十四日 半晴。午前九時半九江に達す。御園生深造来訪。磁器数点を購ふ。午後一時半開船，廬山積雪を見たる。北京伊集院公使，本多，大河平両書記官，川島，上野，実相寺，石川，森，小森，林宛の礼状を認め船中信函に投ず。

十二月十五日 快晴。午前七時蕪湖着，八時開船。午後一時南京着。海軍吉田中佐，並に本庄，豊島，鷺澤，松本，波多，中川，岡本，山崎，高宮，津田，小林吉人，小川勝猪，三浦，瀬上，小林和介，橘，宝妻，中地，岡幸七郎，来栖官補，渡辺，河野豊蔵，長安，角田，及び熊本宅に致すの信を作り，之を船中信函に投ず。午時過鳥江，有詩。

林落蒼々一望平，臨風吊古若為情，項王廟下鳥江水，野渡無人舟自橫。

午後一時南京に達す。紫金山上積雪皚々たり。六時鎮江に達す。三山風景依然絶好。□□の頃星火万点，斜月夜江宛然詩中の景なり。松岡恭来談。八時半開船。

十二月十六日 晴。午前木下船長の金蘭簿に詩句を題す。晌午船吳淞口に入り午後一時半上海に達す。井手，島田，中島，加藤，西本，池部列来迎。東和洋行に投ず。神崎正助，山田勝治来訪。加藤の処に至り晩食し，八時帰る。佐々布来訪。河野来訪。海軍より一月至三月手当五百五十円を送り来る。岩村副官の信至る。蘇州高田九郎の信至る。

十二月十七日 晴。午前井野，河野，村上，山田勝治等を訪ふ。山田の帰国に托し巴緞筆を池邊吉太郎に贈る。領事館に至り領事以下館員全部に面して帰る。午後一時半諸人と本日入港の軍艦対馬に至り新任司令官川島令次郎，参謀増田高頼に面して帰る。安河内，西本，木下夫人，井野，甲斐来訪。晩謡会に出席し，十時帰る。井手三郎，狩野，齋藤國男，津野，森岡，松倉，白岩，小泉土之丞，田島勝太郎の信至る。

十二月十八日 陰。午前大井海軍少佐，宮崎民藏，中島為喜，藤井太七，美濃部正美，佐々木武藏，石田栄等来訪。宮崎より金談有り。午後領事其他と本日入港の軍艦秋津洲を訪ひ艦長安保中佐に面して帰る。平井中佐より日本の鮮魚一簍を贈り来る。嘉来，荒木来訪。晩加藤宅の招饗に赴く。同座は川島司令官，町田対馬艦長，安保秋津洲艦長，増田先任参謀，大井少佐，森少佐等なり。十時散ず。篠崎，東條政二（隅田艦長）来訪せりと云ふ。

十二月十九日 積陰。正金に至り銀百元を受取り内五十五元を宮崎民藏に付す。北京波多博，林貞雄，井手三郎，津野一雄，松倉善家に信片を發す。午後宮崎来訪。二時出て狄平，中島を訪ふ。司令官以下各艦長，参謀来訪。夜有吉領事の招宴に六三亭に出席。川島司令以下各艦長，並に居留民の有力者七，八人同座たり。九時半散ず。熊本宅に発信す。篠崎を訪ひ十時帰る。

十二月二十日 雨。吉田中佐，岩村，牛田両大佐，伊集院俊，平井徳藏，副島八十六に致書す。白岩龍平，高田九郎に復書す。夜倶楽部の艦隊歓迎会に出席し，九時帰る。

十二月二十一日 陰寒。朝来各新聞紙を通読して午後に至る。三時出て上海日報社に至り島田，井手等を訪ひ，毛衫一件を購て帰る。北京波多博の信至る。秋田康世来訪。六時新六三の会に赴く。同座は有吉，南，三谷，中島，河野，神崎，井手友，浮田，黒川，西郡，三穂，外一人なり。十時半散ず。

十二月二十二日 晴。海軍に報告を發し，別に予算表，外一件を郵送す。午後佐々木，藤井，河野等を訪ひ，水壺一個を購て帰る。晩三井藤瀬より案内有り，加藤，神崎と馬車にて赴く。幡生，鈴木島吉同座たり。十一時帰る。北京波多より度支部予算総表を送来。

十二月二十三日 晴。荒木四郎彦来訪。橘三郎に致書す。海軍に宣統三年予算総表を送る。東洋協会に三月至十一月九ヶ月分会費四円五十錢を送る。蘇州高田，北京波多に致書す。午後加藤壯太郎，島田数雄，澤本良臣，井野春毅，秋田康世を歴訪し，六時神崎宅の晩餐に赴く。同座は加藤，岡田徳好，鳶兵太郎等なり。十時散ず。

十二月二十四日 快晴。西本，布施知足来訪。海軍に発信す。午後熊本県同文書院生一同来訪。晩加藤と馬車を同ふし領事官舎に至り上海道台劉，其他支那官吏を主賓とせる宴会に臨む。十時散ず。

十二月二十五日 晴。三浦國器の信至る。秦，美濃部，中島，島田儀一，島田数前後來訪。内外各地への年賀状二百を認む。

十二月二十六日 晴。年賀状百五十通を發す。熊本宅，並に上野岩太郎に致書す。海軍に報告を發す。欧米各国の知人へ年賀状を發す。留守宅，並に平井中佐の信至る。林権助，内田康哉，珍田捨巳，山座円次郎等各大使並に書記官，其他在欧米諸知人に致書す。佐々木，水上来談。夜河本，真島次郎，池田郡蔵来訪。池田より煙草，菓子を贈る。十時半出て博愛丸に布施知足，岡田徳好の帰国を送る。十一時半帰る。

十二月二十七日 晴。午前加藤を訪ふ。時報館狄平に致書す。晩理髮。蘇州高田の信至る。夜加藤と談ず。

十二月二十八日 晴。午前木下温知，領事，上海日報を訪て帰る。狄平来訪。年賀状を發す。松倉の信片至る。留守宅の信至る。午後六時上海日報の忘年会に杏花楼に赴く。社員全部と加藤壯太郎，浮田郷次，中島為喜，篠崎，鈴木重，秋田，池部，松岡，澤本，西田耕一等なり。九時散ず。

十二月二十九日 晴。年賀状を内外知人に發す。澤村幸夫来訪。時報館より年末の礼物火腿，蜜柑を送来。加藤壯太郎来訪。

十二月三十日 晴，風大。午前加藤，井手を訪ふ。午後時報館より本年正月より四月に至る例銀貳百元を送り来る。城外骨董舗に至り水匙，墨架を購ひ，福利にて高帽一個を求め，河野を訪ふ。中根齊に逢ふ。晩河野より六三に招邀，中根，河本同座たり。九時帰る。今井邦三来談。此日本願寺龍溪玄義，並に横山慶三，木下温知告別の為め来訪す。横山は米国に転任すと云ふ。

十二月三十一日 快晴。午前十時横山，木下の帰国を筑前丸に送る。木下に蜜柑一籠を托し熊本に送る。午後留守宅歳暮の信，吉田中佐，宮崎民藏の信至る。中根齊来訪。晩加藤駒次と中島宅に至り晩食，詩を賦して十二時半に至り辞帰。

庚戌除夜

歳月匆匆万感生，残燈挑尽坐天明，茫茫往事試回首，都是黃梁夢裡情。

四十三年此夕尽く矣。感何ぞ堪へん。回顧すれば，本年春初家を挙て上海を去り新たに居を熊本新屋敷に卜し，四月より世界漫遊の途に上り米英仏瑞独露清の八国を周歴し，帰朝の後再び上海を経て北京に入り資政院の状況を視察し，年末漢口を経て上海に帰れり。春初以来踪跡縦横約三万余哩得る所少しと為さず。茲に四十三年を餞して眷恋の情に禁へず。

3. 明治44年1月から12月までの日記

明治44(1911)年の日記は，7月14日までとそれ以降の二綴じからなっている。

前年後半出張で主に北京に滞在した後，漢口経由で上海に着いてそのまま上海で新年を迎え，6月末まで滞在した。上海に滞在した時期についてみると，まず元日に，漢口楽善堂の仲間であり，その後も東亜同文会の活動にもともに参加してきた中西正樹が寧古搭（現在の黒竜江省牡丹江市にあった地名）付近で馬賊に襲われて重傷を負ったとの知らせがあり，その後も中西に手紙を書くやら見舞金を出すやらしている。また，上海においても北京の国会開設に関わるその後の動きや4月の広州での黄興ら革命派の蜂起失敗についての情報等，盛んに海軍宛に報告しているが，それまで日記には「報告」とのみ書いていたのが，この時期には「政況報告」と書くことが多くなっており，とくに1月下旬に数日をかけて35枚の報告を書いたとするのは，筆者にとっては未見であり気になる内容である。また，報告を書く一方で，蘇州や徐家匯などに狩猟に出かけたり，謡曲を習ったりしているのは従来通りである。

2月15日の日記に伊集院公使に「上海に言論機関を設けることを提議せり」とあり，5月12日には「昨年北京にて伊集院公使と商量の件成立し」，宗方が主宰する組織を9月に実行に移すことにしたとするのは，飛んで8月5日に東京で有吉明上海領事に会って「上海に於ける設備費其の他五百円を受取」ったことに続く話と思われ，それがさらに飛んで，1914年から宗方が経営する東方通信社として実現をみたと考えられるが，その確認は今後の課題となる。もう一つ日記中であって状況が不明なのは，3月24日に海軍宛「調査部設置費用予算」として「創業費三百五十円，毎月三百五十円，旅費年千二百円」を伝えたとする点であり，これについてもその後どうなったかの確認は課題として残る点である。

海軍軍令部から連絡があつて，7月から手当てがそれまでの1年間2200円が2400円に増額したことがわかる。支払い方は従来通り3か月ずつである。中国人では時報社の狄葆賢とよく会っているのは，宗方が同社の名義人であり，かつ5月に時報と両江総督の間に何らかの衝突事件が起こって，宗方が有吉領事と相談している（5月29日）こととも関係しているかもしれない。また，6月27日には，時報の狄の他，神州日報，民立報，中外日報，中国商務日報の責任者を招いた「支那新聞記者招待会」に出席している。これが宗方を中心として開いたものか，上記上海に言論機関を設ける試みの一環であるかは不明である。

時間が前後するが，宗方は6月21日に孫文あてに手紙を書き，孫文からは7月16日付の手紙がアメリカから宗方あてに出されていることがわかっている（『孫中山全集』第一巻，中華書局，1881年）。宗方の日記では8月21日に熊本で孫文の手紙を入手したとあり，何らかの理由で（孫文が上海あてに

出し、それが熊本に転送されるのに手間どったためか)、2ヶ月近くかかって、宗方に届いたのである。孫文のこの手紙を見ると、宗方が6月に出した手紙で、世界一周旅行でホノルルに寄ったことを知り、せっかくのチャンスだったのに会えなかったのは残念だと書いた上で、「私はこの冬再び日本に行きたいので、日本政府が私の入国を阻止しないよう力になってほしい」と宗方に頼む文面になっている。そして宗方は、受け取って3日後(8月24日)に海軍軍令部に孫文の手紙を郵送しているのである。

7月初め帰国して熊本に落ち着いた後、7月末から10日ほど上京して海軍軍令部、陸軍参謀本部、外務省などに顔を出してあれこれ相談しているようで、日記には何も書いていないが、その過程で9月に中国に行くことが話されたはずである。そして、9月半ばには上海に向かい、10月に武昌「兵乱」が起こったことを知ると、すぐに漢口に行って、「官軍」と「叛軍」の戦闘の様子を連日間近な距離から観察しては日記に書き記し、海軍に報告するとともに、時報社や上海日報社、さらには九州日々社にまで通信文を送っている。長年鍛えた取材力がここでも発揮されて、漢口周辺での戦闘が清朝軍に有利に展開されている状況を克明に記録し、と同時にそれを眺めている日本租界に住む日本人の様子も伝え、10月末に上海に引き上げる船上で見た長江沿岸の街の様子なども活写しているのである。

11月初めからは上海における革命派の動きを伝え、首謀者である陳其美や黄一欧などに会って直接話を聞いているのは、宗方が長年にわたって、革命派であるか否かを問わず中国の現状に関心を抱く多くの中国人と接触してきたからこそできる取材であり、その頃上海に来ていた北一輝とはよく会ってあちこちと一緒に「革命党」の行動を見て歩き、宋教仁が北とともに南京から上海に着いた時には、北や本庄繁少佐、井戸川辰三とともに宋に会っている(11月20日)。その際、宗方らは中国に連邦制度を採用することを宋に提案して、拒否されている(報告362号「革命党の領袖宋教仁の意見」)が、宋方にとっては、義和団事件発生時の唐才常らの蜂起計画に期待しつつ、中国南北分割の可能性を考えていた1900年の頃と似たような構想を抱いていたことになる。さらに12月25日孫文が香港経由でアメリカから帰国すると、27日に「仏大馬路408号」に滞在中のところを訪ねて「相見ざる十二年、談話少時にして握別」した。また30日は孫文、黄興らが主催する「アットホーム」に顔を出したが、黄、孫ともに2時間遅刻してから現れたという。

なお、武昌における革命軍の武装蜂起が始まり、さっそく現地に出かけて革命軍と清朝軍の戦闘を観察して詳細に記録し、上海に引き揚げる船上で見た長江沿いの混乱した様子、上海に着いたあとに革命軍幹部と会って取材した内容、さらに孫文や黄興に会った際の状況などをたんと記しているのが印象的である。そこには、革命派が大規模に行動を起こしたことへの共感はないし、清朝側に肩入れしている様子も示していないのである。ただし、旧知の清朝側要人が身の危険を避けて頼ってきたのに手をさしのべている状況を2,3記しているのは、昔からの関係でそうするのが当然であるかのような書き方になっているものの、宗方の本心としては、革命派のこのたびの行動を評価してはおらず、清朝側の行く末に関心を向けていることを感じさせるところである。

宗方は9月に上海に着いた後、前年まで家族とともに住んでいた北山西路の家を再度借りて住み、10月中には夫人も上海に来て、しばらくは腰を落ち着けるつもりで、のちに称する所の「辛亥革命」の成り行きを上海で眺めつつこの年を終えることになった。

ここで、明治44年に海軍軍令部宛てに送った宗方の報告の日付と号数を、『宗方小太郎文書』(以下、『文書』と略称)中の記載と対照しつつ日記から拾い出す。書き方の要領は前年と同様である。

1月10日—※第344号(上海所蔵「資政院の終局」)。1月12日「報告を發す」。1月17日—第345号。1月20日「政況報告を作る」、24日「政況報告を草す」、25日「報告を作る」、26日「政況報告書を脱稿す」、31日「朝來報告を淨写し…三十五枚…發送す」とあり、これらの記述は同じ報告を指しており、上海所蔵の1月30日付「清国の政況並に将来の変局」である可能性が大。2月21日「報告…を發し」、

25日「海軍…に到書す」。3月1日—第348号, 3月9日—第349号。3月24日—※第350号（上海所蔵「新政施行の困難」）, ※第351号（上海所蔵「憲法制定委員, 資政院副総裁の更迭」）。3月30日「普通通信を發す」。4月11日—第352号, 5月10日—第353号, 5月21日—※第354号（上海所蔵「鉄道国有に対する反動, 他」）。6月6日「報告を發す」。6月29日—※第356号（上海所蔵「清国現下の政況」）, 9月25日—※第357号（上海所蔵「四川変乱の概況」）。10月4日「政況秘報を…郵送す」, これが10月, 上海所蔵, 表題なしの内容を指している可能性あり。10月14日「…を訪ひ, 漢口の状況を敲き談話の概要を…報告す」, 15日「第三, 第四の両信…」, 16日「概略を報告し」, 23日「書信を發し概況を報ず」, 11月1日「報告を發し」, 3日「書信を發す」, 4日「發信す」。11月12日—※第358号（上海所蔵「清国変乱に対する卑見」）。11月13日「時局報告を發す」。11月17日—※第359号（上海所蔵「叛徒の仮政府」）, 11月21日—第361号, 第362号。11月24日「書信を發す」, 28日「致書」。12月1日—第362号（この号数について『文書』に11月21日の号数と重複しているとの編者の注がある）。12月5日「致書す」。12月9日—第363号, 12月12日—第364号, 12月15日—※第365号（上海所蔵「講和談判に就行」）, ※第366号（上海所蔵「革命党の内訌と匪乱」）, ※第367号（上海所蔵「新政府の組織と其發表期」）, 12月23日—第368号。12月26日「報告を發す」。

明治四十四年辛亥

日誌

上海, 熊本, 蘇州, 上海

正月元日 快晴。上海旅館東和洋行に於て歳を迎ふ。詰朝入浴。八時儀式を終はり, 十時半領事館に至る。聖影を拝し, 井手と知人を廻礼し, 正午倶楽部の名刺交換会に出席し, 午後井手と領事其他を歴訪して賀正, 日暮歸る。内外知人の年賀状至る。東京中島真雄より, 中西正樹北満旅行中十二月十九日百草溝出發寧古搭附近に於て馬賊の難に遭ひ従者一名害せられ中西は重傷を負へりとの報に接す。元旦口占一首。

鷄鳴生瑞氣, 旭日照瀛洲, 請見扶桑影, 蔽周禹九州。

正月二日 健晴。各地知人の年賀に答へ, 中西に見舞状を發し, 別に中島真雄に致書す。中根齊, 藤井太七來訪。蘇州高田の信至る, 之に復す。村上貞吉, 真島次郎來訪。東條隅田艦長, 大原信, 木幡恭三, 中野熊五郎來訪。

正月三日 快晴。蘇州姚文藻の信至る。宮崎民藏に復書し, 津野に五十金転送を囑す。蓋し宮崎帰国の時融通せしものを津野に送り, 其の急需に應ずる者なり。澤村幸夫來訪, 明日の船にて帰国すと云ふ。之に火腿一隻を托し留守宅に贈る。中食後車站に至り一時五分の急行にて蘇州に向ふ。二十[時]四十五分着。高田九郎來迎, 馬車にて西門外に至り小舟に投ず。四時横塘着, 夕鳩を打ち五羽を獲, 直に上方山下に至り泊す。織月如眉, 七子山上に懸り, 寒江夜泊の景状せんと欲すれども得ず。篷窓燭を剪て高田と閑話し, 十時就寢。

正月四日 晴。詰朝寺院の廢墟に朝鳥を打ち, 朝食後松林に入り獵し, 終日にて九羽と小鳥三羽を獲。五時船に歸る。夜半風雨。

正月五日 積陰, 風強。七時松林に獵す。獲る所無し。十時船に歸り, 十一時發船行春橋側より折れて横塘を過ぎ, 一時蘇州西門外に達す。高田と分れ車を駆て車站に至り, 休憩茶を啜り, 三時の汽車にて發し, 五時十五分上海着寓所に歸る。北京本莊中佐, 東京白岩の信, 並に各地知人の年賀状七, 八十通に接す。井手三郎の信至る。

正月六日 陰。留守宅に書信二通を發し, 各地知人の年賀に答ふ。留守宅の信至る。加藤中佐來訪。

正月七日 陰。留守宅に發信, 並に各地知人の年賀に答ふ。午後上海日報に至り, 転じて同文書院に小

田勝太郎，大原信等を答訪し，帰途上原宇佐太郎を訪ひ小談，紫檀テーブル，並に花瓶台製造の事を同氏に依頼す。大倉に小談，帰る。是日家賃減額運動の爲め英租界の各街皆門を閉ち市を罷む。加藤中佐，中島爲來訪。

正月八日 陰。是日六三に新年謡会有り，欠席す。午前加藤，中島を訪ふ。中島に中食し，午後二時中根齊の南清行を送り，帰途島田数雄を訪ひ小談，帰る。夜北京松本菊熊來訪，寛談十時に及で去る。当世得難き有爲の人物なり。波多の信至る。

正月九日 雨。井野，堀内，坂口來訪。各地の年賀状に答ふ。石渡邦之丞より今夕六三に招邀の請帖至る。池部雀彦來談。六時六三の招宴に列し，九時帰る。

正月十日 雨。北京青木少将より清国各種の事件に付き意見を徴し來る。直に之に復す。波多博に復書す。夜篠崎來談，十二時去る。

正月十一日 雪。海軍に報告を發し，外に奉天中西正樹に見舞状を發す。午前井野に至り齒療を爲し，帰途河野を訪て帰る。倉田敬三來訪。午後井手，篠崎を訪ふ。留守宅の書信，信片，並に伊集院俊の信至る。

正月十二日 快晴。朝西田耕一，三穂五郎，岡本武三來訪。三穂は濠州シドニーに転任の事となり，岡本は其後任として來れるなり。各地知人の年賀に答へ數十通を發す。吉田中佐に致書し，海軍に報告を發す。留守宅に致書し，理髮して帰る。西本來談。

正月十三日 陰天。午前井野に抵り齒療治を爲して帰る。午後上海日報に至る。四時井手宅に帰り黄粉餅，雑煮の饗を受け，七時帰る。

正月十四日 晴。朝三穂五郎，高田九郎の帰国を送り，高田蜜柑一籠を贈り留守宅に一籠を托送す。午後松本菊熊，浮田，並に同文書院学生二名來訪。七時半倶楽部の青年会講演会に臨み一場の談話を爲し，九時帰る。留守宅の信至る。

正月十五日 晴。午前六時井手宅に至り朝食し，西郊に獵し鳩一，小鳥三を獲て，六時井手宅に帰り晩食後歸寓す。長尾より乾隆時代の文人陳撰の紫檀紙筒梅鶴の彫刻有る者を送り來る。

正月十六日 陰天。午前加藤壯太郎，中島爲喜を訪ふ。松井少佐來訪。熊本留守宅に発信す。池部雀彦來訪。晩井手宅に會食し，九時帰る。

正月十七日 陰。終日在寓，政況報告を草す。留守宅より餅五十個を送り來る。夜加藤壯太郎來訪。澤村幸夫の信至る。

正月十八日 半晴。午前福田祿太郎，松井少佐，藤堂大蔵前後來訪。藤堂は台湾銀行支店設立の爲め來れる者，香港高道竹雄の紹介状を携へ來れり。村山正隆，軍令部の信至る。海軍に報告を發し，外姚賦秋に復書す。西本來訪。晩松井の招邀に赴く。同座は加藤，中島，浮田，西田耕等なり。十一時半散ず。

正月十九日 晴。午前森茂を豊陽館に訪ふ。昨夜來着せる者也。帰途藤堂を敲き小談，帰る。井手三郎，山根虎に致書す。澤村幸夫に復書す。午後土井伊八，森茂來訪。

正月二十日 晴。午後竹井某，青木喬來訪。終日政況報告を作る。井手友喜來訪。井原と小談，明日の船にて帰国すと云ふ。

正月二十一日 快晴。是日同文書院の講話会に出席の筈なりしが，都合により來週の土曜に延期せり。午前郵便局に至り海軍よりの送金五百五十円を受取る。爲替の差にて六百二十七弗と為れり。之を正金銀行に預入す。午後井原を弘満丸に送り，帰途森茂を訪ふ，在らず。上海日報社に小談，帰る。長春中西正樹の信至る。負傷略ぼ治癒せりと云ふ。喜ぶ可きなり。宮崎の信至る。津野一雄に余の托する所の五十円を送れりと云ふ。水上生來訪。

正月二十二日 晴。日曜。津野，天野恭，留守宅に信片を發す。午前六時半井手，池部等と電車，徐家匯に至り龍華地方に獵す。小鳥一を獲たるのみ。午後六時半帰る。嘉悦敏緬甸，雲南，四川の旅行よ

り帰る。之と談ず。

正月二十三日 晴。午前中久喜信周来訪。中島為喜，加藤中佐来訪。津野一雄より金子領収書至る。北京上野岩太郎の信至る。夜井手に抵り会食す。九時嘉悦敏，中久喜の帰国を春日丸に送る。

正月二十四日 快情。終日在寓，政況報告を草す。午後松本菊熊，池部雀彦来訪。

正月二十五日 陰天。午前森茂を訪ふ。報告を作る。北京波多の信二通至る。夜加藤中佐宅の無名会に出席す。来会者は南新吾，桂少佐，西郡，浮田，神崎，外二人なり。十二時散ず。

正月二十六日 積陰。午前六時半出て招商局申棧に至り森茂の大連行を送る。午後西本来訪。是日政況報告書を脱稿す。時報館より昨年五月より十二月に至る報酬全部四百元を送り来る。

正月二十七日 雨。午前出て理髪し，正金に至り銀三百四十円を預入す。真藤，村山の信至る。之に復す。外に岡幸七に致書，武昌楊，李に年賀片を致す。夜加藤駒治の処に加藤壯太郎等と談ず。

正月二十八日 陰。中食後同文書院の講演会に臨み，支那の政況に付き二時間以上の談話を為す。南新吾，松本菊熊亦各一場の談を為せり。上野貞正の処にて食事を為し南と共に帰る。池邊吉太郎，村松岩彦の信至る。

正月二十九日 微雨。水上生来訪。北京李盛鐸，汪康年，良弼，蘇州姚文藻等に年賀状を發す。池部，西本，佃正次郎，島田数雄，有吉領事，浮田郷次，加藤中佐等前後來訪。午後四時出て松石少将を迎ふ。佐々木武蔵，加藤駒治来談。

正月三十日 雨。是日陰曆正月元日たり。九時狄平に抵り正を賀，井手に小談，帰る。報告を浄写して午前一時に至り寝に就く。

正月三十一日 晴天。朝来報告を浄写し午後に至り之を畢る，総て三十五枚。二時郵便局に至り書留にて之を海軍に發送す。夜加藤駒治の処にて篠崎等と談ず。

二月一日 陰。午後真鳥次郎来訪。二時松尾を訪ひ謡曲稽古の事を商量し，去て高橋栄七の病を問ひ，帰途松井，中島を訪ひ，五時帰る。独逸武者小路公共の信至る。夜西本来訪。

二月二日 陰。午後池部政次来訪，本日より杭州より来れりと云ふ。熊本宅の信，並に井手三郎，松倉，山根，高田九郎，澤村の信至る。

二月三日 晴天。熊本宅，木下温知，山根虎之助，松倉善家，内田友義，吉田増次郎，池邊吉太郎，波多博，澤村幸夫に復書す。合原金八来訪。午前上海日報に至る。午後北四川路松尾氏に至り謡曲を学ぶ。池部政次を古谷栄一宅に訪ひ，五時帰る。安河内弘来訪。

二月四日 晴。鳥居，狩野，古莊韜，留守宅に杭州の画葉書を送る。西本，加藤中佐前後來訪。五時半より俱樂部謡会に出席，俊寛を謡ふ。十一時半帰る。去年今夜家族と春日丸に乗り明早帰国の途に就けり。

二月五日 快晴。立春。日躍。去年今日上海を發して帰国せるなり。午前井手を訪ふ。午後島田，西本，池部来訪。共に出て川本を誘ひ電車同文書院に至り，安河内，真鳥等を訪ひ，五時帰る。井野来訪。

二月六日 晴。午前西本来訪。午後河野，中島等を訪ふ。島田数雄宅より萩餅を送り来る。西本来訪。夜藤田劍峯を訪ふ。

二月七日 晴。中久喜信周の信片至る。午後俱樂部に謡曲を学ぶ。上海日報に至り，五時帰る。加藤壯太郎宅の晩餐に赴く。同座は岡本，西田耕，加藤駒なり。十時半帰る。

二月八日 半晴。三穂五郎の信至る。青年会幹事某来訪。夜藤井太七来談。

二月九日 快晴。留守宅，海軍吉田中佐，白岩龍平，高田九郎に致書す。午後出て理髪し，篠崎，上海日報を訪ひ，五時帰る。松本菊熊来訪せりと云ふ。独逸中島半次郎の信至る。伏見鑑長より来十一日紀元節祝宴の案内至る。蘇州行の約有るを以て之を辞す。

二月十日 健晴，春色漸動。布哇杉本重道の信片至る。午後出て上海日報に至り，転じて俱樂部に謡曲

を学び、三時半帰。中島為喜来訪。夜河野久太郎来訪。共に謡曲を謡ふ。神寄正助来談、十一時去る。

二月十一日 積陰。紀元節。五時半起床、七時車站に至り井手、池部雀、宮崎、小笠原等と七時四十分の汽車にて蘇州に至り、虎邱附近に獵し僅に小鳥一羽を獲、七時帰る。井手宅にて晩食。井原真澄の信至る。森茂の信至る。

二月十二日 陰。熊本宅、海軍吉田中佐の信至る。午後出て井手、加藤壮太郎、中島、島田数雄を訪ふ。古莊弘来訪。夜香月梅外と談ず、本日来着せりと云ふ。加藤壮太郎来談。

二月十三日 微雨。池部雀彦来訪。熊本留守宅、嘉悦敏の信至る。夜香月梅外来談。

二月十四日 雨天。外務省伊集院公使、海軍吉田大佐、熊本留守宅、塩浜田畑丸に致書す。公使には上海に言論機関を設けることを提議せり。午前出て香月、河野久太郎の帰国を送る。露国大使館小田紹五郎、信州鈴木格三郎の信至る。午後松本菊熊来訪。二時倶楽部に至り謡曲蟬丸を学ぶ。

二月十五日 陰天。午後姚文藻、加藤壮太郎、松本菊熊来訪。姚は本日蘇州より来着せりと云ふ。鉄嶺内国友義の信至る。

二月十六日 陰。熊本宅、実相寺の信至る。終日書類を整頓す。朝来頭痛。夜松井の病を問ひ、中島と談じ、十時帰る。

二月十七日 陰。松本菊熊、加藤壮太郎来訪。松本は今夕北京に帰ると云ふ。午後倶楽部に謡を学び、去て領事館に有吉領事を訪ひ小談。松本菊熊を常磐に訪ひ別を叙し、帰途上海日報社、加藤中佐を訪ひ帰る。西本省三来訪。

二月十八日 陰寒。十二時加藤の雲南行を税関碼頭に送る。北京本多書記官に致書す。午後六時中根齊の招邀に六三に赴く。同座は福島安正の三男三郎、御幡雅文、川本、佐々布等なり。十時前帰る。海軍大井少佐の信至る。

二月十九日 陰。午前西本省三の浙江行を送らんが為め之を其寓所に訪ふ。已に発程せりと云ふ。去て山田純、澤村良臣を訪ひ帰る。午後中根齊、桂頼三、転じて松井の病を問ひ、五時帰る。北京波多の信至る。西村時彦高野山よりの信至る。

二月二十日 晴天。朝中根齊来訪。午前正金に至り銀百五十元を受取り、内百円を熊本留守宅に滙送の手續を為す。大井五郎、齋藤國男、伊集院公使、熊本宅、吉田大佐に致すの書状を認む。外に熊本宅に西湖写真を郵送す。池部雀彦、合原金八来訪。中澤武兵衛と談ず。本日来着せる者、昨年世界一週会の周游者なり。夜井手宅の晩餐に赴き、九時帰る。夜中津、秦と談ず。

二月二十一日 陰。中食後郵便局に至り海軍への報告、並に熊本宅、為替、其他書信を發し、二時倶楽部に謡曲の稽古を為す。鉄峯内田友義の信至る。

二月二十二日 雨。晚秦長三郎の招饗に大慶樓に赴く。同座は中澤武兵衛、藤堂大藏、中野熊、前島次郎、外二、三人なり。八時散ず。中澤の室に秦と三人蟬丸、俊寛、岡村の三番を謡ふ。

二月二十三日 晴。午後中島来訪。昨夜来齒痛、夜に入て殊に甚しく幾ど眠る能はず。本願寺金松三直来訪。

二月二十四日 晴。波多、田中水穂、岡幸七郎の信至る。午前理髮。井野に至り齒根を切開し悪血を去り痛漸く鎮す。夜中澤と談ず。

二月二十五日 半晴。海軍の信、並に松岡玄雄より其銀婚式の案内至る。病を以て辞す。海軍、並に安河内に致書す。午後加藤宅、並に松井、中島を訪ふ。鳥居、並に天野恭太郎、七利恭、荒賀直順合作多広川玉泉亭の信片至る。上妻の信至る。夜水上生来訪。

二月二十六日 快晴。日曜。朝中島来訪。中西正樹、深水十八、田中水穂、内田友義、上妻博路に致書す。午後加藤駒、荒田と江湾競馬場に至り仏国人の演放する飛行機を観る。形蜻挺の如く左右二重の翼を設け尾頭に回転機を装備し、司舵手一人中央に坐し高三、四十間の空中に騰上し、三分間許に競馬場を円形に一週するもの三次、観る者堵の如く、其数約一万五千人許。六時帰。留守中郵便局長杉

本啓来訪せりと云ふ。夜佐々布，本願寺開教師金松三直，龍溪玄義来談。

二月二十七日 快晴。午後上海日報に至り，転じて豊陽館に藤堂大蔵を訪ひ小談。本願寺に金松三直，龍溪某を訪ひ，去て杉本郵便局長宅に名刺を留て帰る。加藤壯太郎香港よりの信片至る。夜松井の病を訪ふ。

二月二十八日 晴。午後上海日報より倶楽部に至り謡曲を習ひ，帰途篠崎を訪ひ，五時帰る。東京三井銀行松元勢蔵，伊集院軍令部長の紹介にて来り訪ふ。羅馬吉田書記官の信，並に西本杭州よりの信至る。

三月一日 晴。午前高田九郎を山口丸に迎ふ。午後三時に至りて始て入港す。安河内，高田来訪。安河内を留め晩食し共に謡曲二，三番を謡ふ。白岩，齋藤國男，松倉，留守宅，同文会の信至る。

三月二日 晴。午前中根齊，並に三井銀行，松元勢蔵来訪。蘇人王至愚，石裕生二人，姚文藻の紹介状を携へ来り訪ふ。紐育青木新の信片至る。夜井手を訪ふ。

三月三日 快晴，春色漸動。北京本庄少佐に致書す。午後倶楽部に至る。北京波多の信至る。北京波多の信至る。松井の病を訪ふ。紐育齊藤力の信片至る。

三月四日 雨。海軍に報告を發す。吉田大佐の信至る。午後中根の帰国を山口丸に送る。

三月五日 雨天。日曜日。午前八時狐装井手宅に至り，晴を待て出獵せんとす。晌午に天候益す悪く遂に中止す。東京井戸川辰三，大阪西村晴彦に致書す。

三月六日 陰。午後池部雀来訪。夜中島来談。

三月七日 陰。午後上海日報，倶楽部に至る。夜月並謡会に出席，十一時半帰る。高田九郎蘇州よりの信片至る。

三月八日 陰。午前井手，桂伏見艦長来訪。桂と俊寛一番を謡ふ。午後三井銀行尾崎敬義来訪。

三月九日 陰。頭痛。海軍より四，五，六，三ヶ月分の手当を送り来る。齋藤國男，岡次郎，熊本宅の信至る。夜軍艦伏見四川溯航の送別会に倶楽部に出席，九時帰る。重慶宜昌間に最初汽船の航路を開きしは明治三十年重慶在住の立德（リットル）なる者之を試み，三十二年英国の小軍艦ワードコック，ワードラク二隻溯航して成功，其後仏，独兩國の軍艦争て四川に入り，四十二年四川人の組織する汽船会社成り，蜀通号を以て宜昌重慶間通航を開けり。帝国軍艦の入蜀は伏見を以て嚆矢と為す。揚子江の汽船航路は上海宜昌間一千哩，宜昌重慶間四百五十哩，重慶以上尚四百哩，汽船の航走に便なれば通計一千八百五十哩有り。

三月十日 雨，雪。海軍に報告，並に手当領収書を發し，熊本宅に發信す。午後謡曲を学ぶ。夜七時半日本義勇隊の賞品授与式に倶楽部に列席す。式終て立食の饗有り。十時半帰る。

三月十一日 晴。軍令部吉田大佐の信，並に犬養毅以下連名の中西正樹の負傷見舞金募集の通知書到る。午後理髮。石，陳二人姚文藻の信を携へ来訪。海軍吉田大佐に復書し，別に岡次郎に致書，文山集四冊，濂亭集二冊，並に軍令部囑購の官商快覧一冊，便便通書一冊を岡に送致す。熊本宅に沙糖漬を小包にて郵送す。蘇州高聞に致書す。大阪鳥居に孔子の肖像を送る。夜姚文藻来談。連名にて村山正隆に致書す。

三月十二日 陰天。日曜日。是日蘇州に出獵の筈なりしも天候不良を以て中止す。中島為，藤井太七，嘉来，島田数前後來訪。晩村上貞吉宅の晩餐に赴く。安河内同座たり。

三月十三日 晴。東京山内崑に中西正樹への見舞金拾円を郵送し，東洋協会に会費二月分迄を送る。領事を訪ひ蘇州新聞発刊に付き西本を名義人と為すことを商量し，帰途姚文藻を蓬路第三号に訪ひ小談，帰る。吉田大佐，阿南の書信至る。午後秦，藤井を訪ひ，帰途河野宅を敲き帰る。大連森茂の信至る。森に復書し，別に森少将，宝妻，阿南，林貞雄に致書す。夜平井来訪。

三月十四日 雨。高田の信至る。午後倶楽部に至る。夜桂伏見艦長の送別謡会に月之家に赴き，十時帰る。集る者十二人。北京松本菊熊の信至り前借銀百元を返附し来る。

三月十五日 雨天。小村俊三郎に信片を發す。午後秦，松井，加藤を訪ふ。

三月十六日 雨天。午後領事館に至り館員，並に居留民の重なる者二十名と小汽船にて呉淞口に至り，本日来着の練習艦津軽を訪問し，七時半帰る。雨甚。

三月十七日 積陰。午前撫順の横川安三郎來訪，中西正樹托する所の本人遭難後の写真を贈る。北京松本菊熊に復書す。午後俱樂部に至る。桑野締三來訪。中村俊秀の信至る。晩軍艦津軽將校の招待会に六三亭に出席，九時帰る。

三月十八日 陰天。正午俱樂部に至り軍艦津軽の歓迎会に臨む。

三月十九日 快晴。村山正隆，鳥居赫雄の信片至る。晌午税関碼頭より乗船，呉淞口外の軍艦津軽の아트ホームに出席す。四時帰る。神崎，中島を伴ひ帰て晩食を共にす。

三月二十日 晴。鳥居，中村俊秀に復書す。午後御幡雅文來訪。上海日報に至り往日借る所の三十元を返却す。

三月二十一日 雨。熊本宅に發信す。午後俱樂部に至り，帰途松井，中島を訪ひ，加藤宅を一訪して帰る。

三月二十二日 雨。午前安河内來訪。遠藤留吉來談，四川より下來せる者なり。東京大井少佐に致書す。一昨日来風邪の気味有り。熊本宅，宝妻の信至る。夜佐々木，合原來訪。合原は浙江の内地より昨歸來せる者也。

三月二十三日 陰。宮島大八より其父誠一郎氏の卒去を報じ來る。之に弔詞を致す。村山正隆，中根齊の信至る。木下温知來訪，本日歸來せる者なり。東京吉田大佐，山内崑，鳥居赫雄の信至る。

三月二十四日 晴。海軍に報告を發し，並に調査部設置費用予算を郵送す。創業費三百五十円，毎月三百五十円，旅費年千二百円。俱樂部に至り，轉じて領事を訪ひ，上海日報に至り，井手友と遠藤留吉を豊陽館に訪ひ帰る。太田外世雄來訪。狄楚青を時報館に訪ふ，在らず。北京波多より官員録を送り來る。

三月二十五日 晴天。午前佐原篤介に東京に致書す。本日欧米の遊より歸京するを以てなり。狄平に致書す。九時半日本小学校の卒業式に列す。東京井戸川中佐の信至る，新たに英国より歸來せる者。理髮。池部と小談。松井の病を問て帰る。

三月二十六日 快晴。前五時半井手の処に朝食。井手，池部，小笠原と西郊に獵す。柳眉初て展び，緑麦菜黄，春色頗動く。午前小鳥僅に二羽を獲。頭痛を以て諸氏に別れ，午後一時帰る。神崎來訪。

三月二十七日 晴天。去年今日熊本を發し世界漫遊の途に上りしなり。熊本宅に發信す。午前領事館に領事，西田，古谷等を訪ふ。熊本宅の信至る。

三月二十八日 快晴。午後郵便局に至り海軍よりの送金を受取り之を正金に預入し，秦を一訪して帰る。北京波多の信二通，並に野満四郎，中村俊秀の信至る。熊本宅に復書す。晩月並謡会に俱樂部に出席し，十一時帰る。夕刻坂口幸三來訪。

三月二十九日 晴天。午前井手友，安河内來訪。安河内より昨年九月より本年三月末日迄の利子三百拾五円を納付す。早川新次本月二十四日熊本にて自殺の訃報に接す。早川宅に弔詞を發し，波多，野満，澤村幸，留守宅に信片を致す。正金に至り二百五十元を預入す。篠崎，中島列を訪ひ，五時帰る。西田耕一來訪。

三月三十日 陰天。古閑次郎來訪。昨日来着，漢口税関に赴任する者なり。海軍々令部に普通信を發す。九州日々社に通信を出す。古莊弘來訪，留て晚餐す。夜川本静夫來談。

三月三十一日 雨。上海日報社に至る。午後六時中島と西茂路の領事官宅に至り時報館狄平，陳景韓，瞿紹伊，西田，浮田，中島等と会食し，十時帰る。波多博の信至る。

四月一日 積陰。土屋，鳥居，佐野に葉書を致す。晌午筑前丸に至り松尾謡曲師匠の歸国を送る。午後松井，中島を訪ふ。山田勝治來訪せりと云ふ。夜金松三直來談。

四月二日 陰。山田勝治，辻真逸来訪。昨年の本日地洋丸に神戸に搭じ遠遊の途に就きたり。午後中島と電車徐家滙に至り，製筆会社古莊弘の処に至り小休。熊本千反畑人宮崎某在焉。弘濟丸の船員なり。中島と郊外を散策し桃花を賞し，徐家滙より電車に乗じる。雨。夜今井邦三，篠崎都香佐，加藤駒治来訪。

四月三日 晴天。神武天皇祭。午前上海日報に至り，人に托し加藤留守宅より依頼の為替金二十八元二十九仙を正金より受取り，秋田，篠崎を訪ひ小談，加藤宅に金子を渡して帰る。山田勝治を豊陽館に訪ふ。午後村上夫人来訪。一昨日帰来せる者，熊本留守宅を訪問せりと云ふ。清水十二郎に信片を出す。七時村上宅の晚餐に赴く。安河内来会。十時帰る。秦長三郎来訪。

四月四日 雨天。熊本宅に発信す。午後石渡邦之丞の帰国を送る。心気不舒，上床静臥。

四月五日 雨。心気不佳。正午坂口幸三来り，晚餐後去る。山内崑，宮島大八の信至る。

四月六日 雨。午前雲南旅行中の加藤壯太郎帰来に訪。海軍吉田大佐の信至る。正午俱樂部午餐会に出席す。花坂円，並に欧洲行の客二，三人来会。二時半吉阪に至り撮影す。是日昨年世界一週の首途地洋丸横浜解纜の当日なるを以てなり。加藤中佐を訪ひ，四時帰る。有吉一雄，西本省三，本莊少佐，林貞雄の信，並に同文書院端艇競争の案内状至る。夜竹井，金松三直来訪。松井石根来訪。明晩出発，帰国する者なり。

四月七日 雨。山内崑に復書す。長沙領事堺與三吉来訪。午後松井石根，金松三直を訪ひ辞別す。兩人とも明朝帰国するを以てなり。松井来訪せりと云ふ。

四月八日 陰。午後安河内来訪。台湾銀行支店開業披露の案内状至る。晩木幡の案内にて六三亭に赴く。同座は本日来着の堀田英夫，並に加藤壯太郎なり。席上連名にて竹下大佐，白岩龍平に致書す。十時半帰る。岡田徳好来訪。津野一雄，村山正隆の信至る。中島，神崎来訪せりと云ふ。

四月九日 雨天。日曜日。午前池部政治夫婦を常磐舎に訪ひ，帰途豊陽館に堀田を訪ふ，在らず。晌午帰る。堀田英夫，中島為来訪せりと云ふ。午後池部夫婦来訪。熊本宅の信至る。村山の信片に接す。蘇陳，石兩人来訪。夜中島を訪ふ，在らず。加藤壯太郎に抵り小談，帰る。

四月十日 雨天。午前池部政治を訪ひ，帰途中島を敲き帰る。堀田少佐来訪，軍令部よりの用事を商量す。午後加藤壯太郎来訪。晩加藤宅に至り晩食す。堀田並に豊島宇治艦長同座たり。

四月十一日 快晴。海軍に報告を發す。午後狄楚青来訪。佐野，中西正樹，鳥居，松倉，岡次郎，三浦喜傳，澤村幸の信至る。三浦は天津を引上げたりと云ふ。午後五時半電車張園に至り台湾銀行の披露宴に列す。日清人二百人。余興として手躍り，並に支那人の手品等有り。十時半帰る。

四月十二日 晴天。午前西本来訪，昨日浙江より帰来と云ふ。有安，三浦喜傳に復書す。西村時彦に致書す。晩井手宅の晚餐に赴く。

四月十三日 快晴。中西正樹に復書す。午前堀田を訪ひ，去て領事館に有吉領事と小談，上海日報社に立寄り帰る。午後中島来訪。狄楚青より十五日招宴の請帖至る。台湾銀行理事二宮基成，竹井，北岡亀雄等来訪。

四月十四日 陰。午前二宮を豊陽館に訪ひ，池部に筆筒，其他二，三品を托して帰る。明日熊本に帰るを以てなり。岡次郎より状袋二百枚を贈り来る。之に礼状を發す。津田俊三郎，高島醇，外一名来訪。六時半新六三の会に赴く。会者加藤壯，上野貞正，加藤駒，黒川，中島，井手等なり。十時散す。

四月十五日 陰。台湾銀行吉野小一郎，並に池部雀彦来訪。十一時池部，竹井の帰国を博愛丸に送る。熊本宅に発信す。南陽丸に木下艦長を訪ひ，其の熊本県日奈久にて獵獲せし白雉の剥製を一見す。午後堀田少佐来訪。六時井手，加藤を訪ひ小談，去て中島を誘ひ電車清和坊怡情別墅に至り時報館の宴に列す。主人側は狄平，狄南士の兩人，並に記者として葉昌燾，楊錦森，瞿紹伊等にして，客席は有吉領事，浮田，西田，中島，廣田，及余なり。九時散す。

四月十六日 陰。午前十一時半軍艦宇治の招宴に赴く。同座は有吉領事，伊東，加藤，中島，堀田，杉

本郵便局長、及び余なり。二時辞帰。有吉と同車と[で]藤瀬宅の園游会に赴く。五時帰る。熊本宅の歌信至る。北京波多、東京齋藤國男の信至る。齋藤は海軍大学に入学せりと云ふ。

四月十七日 晴天。午前井手友来訪。午後有志十余人と本日入港の旗艦対馬に至り、司令官以下を訪問す。夜堀田干城、外一名、篠崎都香佐来訪。

四月十八日 快晴。熊本宅、海軍吉田大佐に致書す。露都田中佐の信至る。午後中島を訪ひ、正金より百円を受取て帰る。西本、石来訪。夜加藤壯太郎来談。

四月十九日 陰天。増田参謀、中島為喜来訪。是日午後英皇戴冠式参列の為に渡欧せらるる東伏見宮殿下、並に妃、東郷、乃木両大将の一行加茂丸にて来着の筈なるを以て午後二時税関碼頭より乗船、滙山碼頭前の加茂丸に至り奉迎し、同船にて渡英の鳥居赫雄を迎へ、東和洋行に帰る。船上にて両殿下に謁し、並に東郷、乃木両大将に面晤す。晩鳥居を杏花楼に招飲す。井手、島田、中島、秦、澤本同座たり。九時半帰る。井手、島田、中島等来談。鳥居と談じ十二時就寝。井手三郎の信至る。

四月二十日 快晴。午前鳥居、井手と馬車河南路に至り筆墨を購ひ、雅叙園に中食し、張園、愚園を一周し、中島の処に至る。晩中島の寓に鳥居、島田、井手、西本と会食、十時帰る。

四月二十一日 快晴。島田、西本、井手来訪。鳥居、中島と中食し、午後税関埠頭に伏見宮殿下を奉送し、三菱の汽船にて賀茂丸に至り両殿下に謁し奉別し、三時二十分鳥居素川と握別して帰る。独逸武者小路に致書、鳥居を紹介、並に写真を贈る。夜加藤、荒田来談。

四月二十二日 晴天。金松三直の信片至る。西本来訪。午後加藤壯太郎殿君の病を問ひ、中島を敲き小談帰る。三泰紡績より馬車を以て来迎、小野兼基、田辺、外十余人と晚餐、終て社員三十余人に対し二時[間]に亘る講演を為し、十時半馬車にて帰る。

四月二十三日 快晴。午前八時の汽車にて江湾に至り鳴獺を為す。獲る所無し。一時帰る。午後義勇隊の慰労会に六三園に出席。園内の桜花正に満開たり。是日炎威如烘三伏に異らず。五時半帰る。第三艦隊司令官川島少将より福建茶一缶を贈り来る。

四月二十四日 晴、熱甚。午後理髮。河野久を訪ひ、正午帰る。池田、美濃部来訪。夜中島、西本来談。北京波多の信至る。司令官より二十七日、二十九日両日晚餐とアットホームの案内至る。

四月二十五日 晴、熱甚。午後姚文藻、上海日報を訪ふ。美濃部生来訪、馬場に添書を与ふ。夜更大風雨。

四月二十六日 晴、冷。午前河野と旗艦に至り司令官、参謀と談じ、十一時帰る。午後中島、西本来訪。熊本宅の信至る。晩食後増田中佐来訪。中島と三人新六三に至り小酌、九時半帰る。

四月二十七日 快晴。朝白岩、香月を春日丸に迎ふ。正午白岩と中食を共にす。陸軍少佐天野平八、並に香月梅外来訪。午後五時小汽艇にて第三艦隊旗艦対馬の招宴に赴く。同座は有吉領事、伊東、中島、白岩、河野、藤瀬、鈴木、岡本、徳永、秦、馬場、杉本、外一人。主人側は川島司令官、増田参謀、町田艦長、豊島艦長、田中参謀、対馬副長なり。九時辞帰。香月梅外の宜昌行を送る。

四月二十八日 晴天。加藤壯、安河内来訪。夜白岩、木幡と談ず。海軍より余の政況報告の印刷を送り来る。

四月二十九日 陰天、風大。徴兵官の一行午前十時半の春日丸にて帰る。事故有て送らず。加藤壯太郎、中島を訪ふ。午後加藤来訪。二時半軍艦対馬のアットホームに出席す。日清両国の客約二百人。五時帰る。風雨波高。熊本宅の歌信至る。夜中島来談。

四月三十日 雨天。日曜日。朝蘇州領事池永、白岩、神崎、島田儀一、佐々木武蔵、佐々木母堂来訪。嘉来生来訪。熊本宅に発信す。晩豊陽館に川島司令官の招宴に列す。対馬、宇治両艦長、増田、田中両参謀、加藤中佐等同座たり。

五月一日 半晴。美濃部来訪。一[午]前十時領事列と旗艦対馬に至り別を叙す。本日午後長江を溯るを以てなり。正午帰る。熊本宅、井手、北京波多に復書す。井野春毅、河野久太郎来訪。相良利吉、

並に歐洲行途次鳥居香港よりの信至る。相良に復書す。

五月二日 陰。海軍に私信を發す。三井銀行松元勢藏，加藤中佐來訪。午後中島を訪ひ，共に出て有吉の寧波行招商局の江天号に送り，五時歸る。北京波多，松本より写真を送り来る。

五月三日 陰。清子の信，並に松井石根の葉書至る。午後同文書院に安河内，真島を訪ひ，帰途上原に名刺を留めて歸る。夜中島，白岩來談。明日白岩の漢口行に托し岡幸七に写真一枚を贈る。台湾銀行理事二宮基成の信至る。

五月四日 雨天。西澤公雄，松井石根，波多博，清子に致書す。外に三井銀行員松元勢藏の為に北京実相寺，豊島兩人に添書を認む。六時武田の送別謡会に俱樂部に出席し，十一時半歸る。寧波より有吉明の信片，並に北海道村山の歌信至る。

五月五日 雨天。山田勝治，加藤壯太郎來訪。海軍に發信，並に川内に致書す。北京波多の書信至る。筑後丸に至り山田，高木に名刺を留て歸る。明日帰国するを以てなり。

五月六日 晴天。三井銀行松元の為に漢口橋，岡，來栖，角田に宛たる紹介状を作る。午前上海日報社，篠崎を訪て歸る。高島義恭，村山正隆，熊本宅の信至る。高島に覆書す。木下温知來訪，晚餐の案内を為す。中島と共に南陽丸に赴き，八時半辭歸。高島醇來訪。

五月七日 晴天。日曜日。熊本宅に復書す。朝加藤，井手を訪ふ。浮田，井上清秀等前後來訪。午後江湾附近に獵す。獲る所無し。五時歸る。夜加藤來訪。

五月八日 晴。岡幸七の信至る。之に復す。熊本宅に金百円を郵致す。神崎來訪。午後郵便局に至り，帰途浮田，木下，河野を訪て歸る。海軍田中中佐耕太郎に復書す。近日露都より帰朝せし者也。佃正四郎來訪。夜河野久，今井邦來訪。午前理髮。

五月九日 晴。報告を作る。夜坂口幸三，中島為喜來訪。

五月十日 積陰。午前十時島内侍從武官を筑前丸に迎ふ。十一時歸る。陸軍中佐古川岩太郎來訪。海軍軍令部に報告を發す。午後中井洋行，郵便局に至り，四時歸る。晚豊陽館島内侍從武官の処にて支那料理を会食す。同座は加藤，東條，南，浮田，岡本，外一人なり。九時半歸り明渡の処に小談。

五月十一日 晴天，熱甚。正午領事官舎にて中食の饗を受く。島内侍從武官を主賓とし，加藤，東條，岡本，浮田，青木某，及余なり。二時散ず。六時島内の漢口行を襄陽丸に送り，六時半俱樂部の月並謡会に出席，十一時歸る。

五月十二日 雨天。晌午領事館に至り有吉に会す。昨年北京にて伊集院公使と商量の件成立し，上海に根拠を置き予之を主持することとなれり。九月より実行の事に内定せり。

五月十三日 晴天。軍令部吉田大佐に致書し外務省との關係を通告す。北京波多博に九月來滬する様申送れり。中島為，鈴木房雄前後來訪。夜白岩來談，昨夜漢口より歸來せりと云ふ。井手友來訪。

五月十四日 雨天。日曜。午前五時より井手等と江湾附近に獵す。獲る所無し。晌午歸る。三谷一二，加藤壯，中島為等前後來訪。

五月十五日 晴天。朝井手，加藤，篠崎を訪ふ。午後秦，河野，佐々木を歴訪す。宜昌香月より袖を送り来る。夜東條隅田艦長來訪。大江岳父と友義氏に婚事の祝詞を致す。宜昌香月に復書す。

五月十六日 晴。晚加藤壯太郎と南陽丸木下の処に至り晩食す。平岡小太郎同座たり，本日湖南より歸來せりと云ふ。池邊吉太郎，松井石根の信至る。篠崎來訪。

五月十七日 晴。山根，川内，松崎雀雄に致書す。松崎には九月より上海に來らんことを勧む。熊本宅に致書す。西村時彦に致書す。午前領事を訪ふ，在らず。午後二時高島義恭，佐原篤介を三島丸に迎ふ。熊本宅の信至る，之に復す。宜昌香月より袖二反送り来る。松井石根に復書す。夜高島と談ず。河野久來訪。

五月十八日 晴。朝橋三郎に電報を發し下江を促す。井手，島田，高島，平岡小太郎來訪。正午佐原を訪ふ。本日大連に赴くを以てなり。池邊吉太郎に復書す。荒田武卿來訪。晚牛島の晚餐に杏花樓に赴

く。同座は高島義恭、白岩、佐々木常記、河野久、井野、河本静、井手等なり。九時散ず。

五月十九日 陰天。午前豊陽館に島内侍従武官を訪ひ、平岡小太郎を敲き、帰途有吉領事を訪ひ、十一時帰る。高島来談。晩河野、神崎来訪。橘三郎の来るを聞き河野と出て之を訪ふ。小談の後博愛丸に至り、島田侍従武官並に平岡小太郎の帰国を送る。京都大学富岡謙蔵来訪、本夕上船、帰国すと云ふ。西澤公雄の信至る。

五月二十日 雨天。午前白岩来訪。午後高島、西本、鈴木房夫、橘三郎、河野久太郎来訪。徳丸の信至る、之に復す。夜高島と鉢木一番を謡ふ。細川護立男、尾越辰雄に高島、中島と合作の信片を發す。

五月二十一日 暗。午前中島と出て、三谷、伊東、神崎、秋田、最上、南、浮田、西田、古谷、井野、島田儀市等を歴訪して、一時帰る。午後河野を敲き、四時帰寓。加藤来訪。夜隅田艦長東條来訪。

五月二十二日 晴。海軍に報告を發す。豊陽館に隅田艦長を訪ひ別を叙す。明日長沙に赴くを以てなり。橘三郎と小談、帰途理髮。芝罘武田隆夫、四川堀田英夫の信片至る。武田に復す。正午白岩の招邀に新六三に赴く。同座は高島、橘、中島、古莊、河野等なり。席上筑前琵琶を聴く。三時散ず。河野来談。晩西本、美濃部、高島来談。

五月二十三日 陰天。午後橘、河野、高島来訪。晩高島の招宴に六三に赴く。客の未だ集まらざる時高島、河野と俊寛、松風を謡ふ。有吉、白岩、橘、中島来会。席上筑前琵琶を聴く。十時散ず。池邊吉太郎に致書す。

五月二十四日 晴。吉田大佐、松本菊熊、内田友義の信至る。緒方、本庄少佐、岳翁、軍令部の信至る。晩白岩の招饗に六三亭に赴く。蔡乃煌、葉德輝、劉罄宜、陳、外一人、並に有吉、西国、木幡、及余なり。十時半散ず。

五月二十五日 雨。加藤壮来訪。午後橘三郎、荒木善八、齋藤卯門、高島来訪。晩高島、橘の漢口行を岳陽丸に送り、十一時帰る。

五月二十六日 半晴。河野来訪。東京本庄少佐、松本菊熊に復書す。晩食後村上貞吉、井手友を訪ふ。

五月二十七日 半晴。午前上海日報に至る。緒方二三に復書す。河野来訪。六時軍艦対馬の招宴に赴く。是日日本海々戦の記念日なり。九時辞帰の途俱樂部に至り井野の義太夫を聴き、十一時帰る。

五月二十八日 陰。朝八時の汽車にて江湾に猟す。獲る所無し。十一時帰る。夜白岩、中島と談ず。風雨甚暴。留守宅に致すの信を認め、深更就寝。夜狄平来訪。

五月二十九日 雨天。午前領事を訪ひ、時報と両江総督との衝突事件を商量して帰る。加藤中佐来訪。夜白岩、中島来談。

五月三十日 晴天。午前十時同人と軍艦対馬に至り別を叙す。本日午後出港、帰国するを以てなり。帰途領事を訪ひ小談、帰る。竹井来訪。鳥居コロンボよりの信片、徳丸汕頭、田中耕太郎、熊本宅の信至る。夜倶楽部の謡会に出席、十時半帰る。

五月三十一日 晴天。午後根律一を迎ふ。徳丸汕頭に復書す。島田数、加藤を訪ひ帰る。西本来訪。秦、松井、内田友義、軍令部、森茂の信至る。

六月一日 陰天。井手三郎、澤村幸夫に致書す。午後河野来訪。二時半白岩、中島、河野三人と六三花園に至り小集、詩を賦して閑談、午後九時に及で帰る。近來の雅会なり。河野来談、十一時去る。雨。是日陰曆端午節たり。

六月二日 雨天。午前多田、並に本願寺木村常諦、吉川小一郎来訪。吉川を〔は〕新疆に赴くと云ふ。海軍に致書す。川内の信至る。之に復す。松元の信片至る。中野熊来訪。

六月三日 晴。朝正金に至り金を受取り、領事館に浮田、西田を訪ひ、理髮して帰る。夜坂口、狄南士来訪。夜白岩、中島と談ず。

六月四日 晴、午後雷雨。午前同文書院根津一、安河内、真島を訪ひ、帰途上原に抵り小談帰る。九州日々社に通信を發す。西本願寺より古蹟発掘の爲め伊犁に赴く吉川小一郎の爲に、漢口波多野養作に

紹介状を作る。

六月五日 雨。八時有吉を官舎に訪ひ暢談，同車して帰る。狄平来訪。共に出て領事館に至り，帰途西本願寺を訪ひ，正午帰る。午後二階十九番に移転す。清水十二郎，土屋員安に信片を致す。夜有吉の帰国を送る。神崎来訪。郵便局に至り発信。

六月六日 陰天。根津一，河野久太郎前後来訪。高島義恭漢口より帰来。海軍に報告を發す。軍令部吉田大佐の信至り，七月より手当二千四百円に増額の通知至る。熊本宅に発信す。軍令部より七，八，九，三ヶ月分の手当を送り来る。直に領収書を發す。池邊吉太郎の信至る。逗子上野岩太郎の信至る，之に復す。仏国鮫島鐵馬の信片至る。夜狄平，藤井太七，西本，加藤壯太郎，高島来訪。

六月七日 雨天。午前郵便局に至り海軍よりの送金四百円を受取り小為替十五円を取組み，領事館に至り西田，浮田，南等と小談。大河平隆則に邂逅，本日来着明日長沙に赴任すと云ふ。上海日報に小談帰る。大河平，高島来訪。熊本宅，松崎鶴雄の信到る。松崎に復す。野添熊太より信片至る。佐々干城に致書す。河野来訪。浮田より新六三に招飲。三井藤瀬より晚餐の招き有りしも，浮田と先約有りしを以て之を辞す。夜高島，白岩，河野，中島と談ず。

六月八日 雨。熊本宅に発信す。中澤武兵衛，西本，河野前後来訪。晩秦の招宴に大慶樓に赴く。中澤，中野，平井等同座たり。大河平の湖南行を南陽丸に送る。井野来訪。

六月九日 陰。荻野元太郎来訪。午前領事館に至り，帰途佐原篤介を訪ふ，本日帰来せりと云ふ。中食して帰る。午後三時河野の東道にて高島，中島，川本，佐々木等と六三園に至り小集，九時帰る。

六月十日 陰。郵便局に至り，帰途加藤中佐を訪ひ帰る。十時佐々木の帰国を筑前丸に送る。中澤武兵衛来訪。荻野北京行に付き伊集院公使，川島浪速，実相寺貞彦へ紹介状を与ふ。水野梅暁，上野岩太郎，徳丸作三，緒方二三，土屋員安の信至る。水野に復書す。大阪牧卷次郎に致書す。高島義恭，松岡玄雄，中澤武兵衛来訪。七時三菱三谷一二の招宴に六三亭に赴く。会者三十人，三谷長崎転任の留別宴なり。九時木幡，河野と東京席に桃中軒星衛門の義士講談を聴き，十一時帰る。

六月十一日 晴。佐原来訪。午前中澤の漢口行を車站に送る。正午高島の招宴に新六三に赴く。根津一，上野貞正同座たり。帰途高島と橘三郎を訪ひ，四時帰る。嘉来生来訪。夜高島，中島と出て赤穂義士講談を聴く。

六月十二日 陰天。上野岩に復書し，書籍，焼餅，歌一冊を郵送す。熊本宅に致書す。岡田徳好，西本省三来訪。午後領事館に至る。天野少佐，三谷一二来別，明日の船にて帰国する者なり。七時倶楽部の三谷送別会に出席す。九時帰る。山田，村松虎雄，狄平等来訪。夜白岩，大谷藤次郎と談ず。

六月十三日 雨。青野寅三，加藤壯太郎来訪。晌午弘濟丸に高島，橘，天野平八，塩崎，三谷，小山田劍南等の帰国を送る。熊本宅に信片を發す。三井太田孝造来訪。北京波多博の信至る。晩高島醇，坂口，西本来訪。波多に復書す。夜義士伝の講談を聴く。

六月十四日 雨。七時熱田丸に至り土屋員安，佐藤敬太を迎ふ。土屋は歐洲に，佐藤は新嘉坡に赴く者なり。二人を伴ひ東和洋行に帰る。午前川島司令官を豊陽館を訪ふ，昨日漢口より帰来せるなり。午後安河内，高島醇来訪。井手三郎の信至る。晩七時土屋，佐藤を主賓とし西田，中島，井手，島田，安河内を杏花樓に饗す。十時帰る。

六月十五日 陰。佐藤，中島来談。土屋の為に香港高道竹雄，船津辰一郎，伯林武者小路公共に紹介状を作り，別に鳥居赫雄，中島半次郎に致すの信を托す。井手，西本，島田，同文書院生三名来訪。土屋と俊寛，松風を謡ふ。夜西田耕一の招邀に其寓に赴く。散後浮田宅に至り筑前琵琶を聴き，土屋と共に電車にて帰る。大連牛島吉郎の信，並に根津一の案内状至る。

六月十六日 晴天。晌土屋員安，佐藤敬太を送りて熱田丸に至り，午後一時握別して帰る。西本，安河内来訪。晩新六三の会に赴く。会者佐原，大谷，白岩，南，浮田，岡本，加藤，中島，河野，井手，最上，幡生，黒川，木幡等なり。九時半倶楽部に至り，十一時帰る。

六月十七日 晴。加藤，中島来訪。熊本宅に発信す。高島醇三菱入社のをに漢口長安，濱，茂木等に添書を与ふ。中島為喜奉天転任のを，中西，井深，原口，深海，菊池に添書す。午後出て理髮。二時半田中参謀，大谷，古荘弘来訪。大谷藤次郎等の帰国を送り，三時帰る。外務省より電報有り，二十日前後着京の予定にて打合せの爲め帰京を促し来るも，七月一日出発の日期を変更する能はざるを以て返電す。水上生来訪。午後大安棧黎宗嶽を訪。七時根津の招宴に杏花楼に赴く。会者白岩，篠崎，浮田，上野，福岡等なり。十時帰る。

六月十八日 雨。高島，白岩来談。京都有吉明に致書す。午後五時公園に至り同文書院卒業生一同，其他知人と撮影し，杏花楼に至り会宴，九時半散ず。川本，西本，井手，中島来談。

六月十九日 晴。午前美濃部，島田儀市来訪。午後狄，加藤，佐原を訪ふ。夜狄南士来訪。夜加藤中佐来訪。同文書院卒業式の案内状至る。

六月二十日 陰。有吉明，高尾亨，根津一，山田勝治に致書す。時報館より正月より五月に至る五ヶ月分二百五十元を送り来る。北京津田武の信至る。同文書院熊本県学生四人来訪。出て六神丸，筆墨，石刻等を購ふ。松崎雀雄，平岡小太郎，葛岡徳蔵，高島義恭の信至る。藤瀬政二郎来訪。夜謡会に出席，十一時帰る。

六月二十一日 雨。牧卷次郎の信至る。孫文，熊本宅に致書す。牧卷次郎に復書す。晚佐原，中島の送迎会に倶楽部に出席，九時帰る。

六月二十二日 陰。北京森少将に致書す。是日英皇の戴冠式に当る。各国の商店皆休業祝意を表す。午後豊陽館に堀田英夫を訪ふ。五時白岩，中島と河野宅に至り晩食し，夜に入て提灯行列を観る。黄浦灘一帯の家屋，並に江上の船艦皆電灯粧飾を爲し不夜城の観有り。大街小巷群衆雑踏，上海開港以来未有之盛事なり。十一時白岩と偕に公園を徜徉して帰る。雨。

六月二十三日 雨天。北京杉野耕三郎に致書す。堀田英夫，森茂，井手等来訪。東京齋藤國男の信至る。

六月二十四日 微雨。朝堀田英夫を送る。森茂を山田純三郎宅に訪ひ，転じて島田数雄に抵り小談帰る。正午藤瀬政次郎宅の午餐に赴く。同座は佐原，中島兩人なり。三時帰る。熊本宅の信，並に有吉明，海軍，永原虎雄，西田耕一の信至る。加藤中佐来訪。日田次郎，稲村大佐の添書を携へ来訪。晚白岩，河野の招宴に新六三に赴く。同座は中島為，増田高頼，木幡等なり。

六月二十五日 陰。正午上海日報の招邀に杏花楼に赴き，午後同文書院の卒業式に列す。畢て立食の饗有り。五時白岩と馬車にて徐家滙道を廻り，六時帰る。

六月二十六日 雨。朝軍艦対馬を訪はんとす。途川島司令官，増田参謀に遇ふ。偕に豊陽館に帰り小談帰る。有働生来訪。堀内干城来訪。上野岩太郎，高島義恭，三谷一二，佐々木常記の信至る。七時辰虹園支那新聞記者招待会に出席す。浮田，西田，佐原，中島，岡本，平田，並に画家竹垞氏と，清人側には時報狄南士，神州日報經理張寅（号無塵，安徽人），民立報朱蓬葆康（号少屏），中外日報總理兼総編輯章保世（号佩乙），中国商務日報總理兪礼（号達夫）等なり。十二時散ず。

六月二十七日 陰。朝東條隅田艦長，河野久太郎，加藤中佐，中島為，並に佐藤，中島両生来訪。十時中島為喜，上野貞正，安河内，青木等の帰国を筑前丸に送り，晌午帰る。上原来訪。上野岩太郎，平井徳蔵に信片を發す。午後海軍大尉菊地豊吉，外一名来訪。

六月二十八日 晴天。午後理髮，領事館，篠崎，河野，村上，井野を訪ふ。行李を整頓し郵船会社に往復切符を買ふ。井手三郎の信至る。井手，土佐屋，三谷一二，稲村大佐に信片を發す。松島正吉，坂口幸三，西本列来訪。嘉来生来訪，明日より蘇州に赴くと云ふ。夜司令官を豊陽館に訪ひ寛談，去て加藤，井手を訪ひ辞別。

六月二十九日 晴天。河野来訪。岡，波多に信片を發す。高島義恭に復書す。村上夫人来訪。高島醇，井野春毅来訪。七時新六三に河野の招宴に赴く。会者森茂，松島正吉，内藤熊喜，川本，今井，清水等なり。山根，田岡，石橋に合作の信片を送る。十時帰る。浮田来訪。

- 六月三十日 陰天。午前白岩，加藤，森茂，内藤熊喜，同文書院学生四人来訪。政況報告，並に普通信を軍令部に発す。午後白岩，河野，秦と軍艦伏見に桂艦長を訪ひ，帰途上海日報社，森，佐原を訪て帰る。井手，西本来訪。七時浮田の招宴に六三亭に赴く。川島司令官，桂伏見艦長以下二十余人。九時半帰る。山根立庵に致書す。
- 七月一日 晴天。是日上海を發し熊本に帰らんとす。午前佐原，本願寺森，島田数，白岩来訪。午後二時東和洋行を辞し弘濟丸に上る。二時半出港。浮田，岡本，桂，東條兩艦長，加藤中佐，白岩，木幡，伊東，志保井，児玉，藤井，秦，河野，井手友，森茂，松島，川本，秋田，井野，篠寄，上原，島田，澤本，西本，辻，川内，佐々木，今井，並に上海日報諸人来て行を送る。根津一，美代清彦，松本幸次郎，赤谷由助等同船たり。
- 七月二日 陰。夜事務長，機関長美代と俊寛，牛手，蟬丸の三番を謡ふ。十一時五島の燈光を望む。
- 七月三日 雨。朝七時長崎に入る。朝食後根津，美代等と別れ上陸，土佐屋に投ず。井手三郎在り焉。大阪毎日社員宮田文作，長崎日々新聞中村不二男来訪。中食後井手と別れ午後一時の汽車に乗ず。井手は本日の春日丸にて上海に赴く者なり。鳥栖に至り松本幸次郎，赤谷，西田等と別る。細川子爵の来乗有り。八時四十分上熊本に着し直に新屋敷の宅に帰る。
- 七月四日 晴。朝岳翁来顧。午後内藤儀十郎，鎮西館，山田，小早川，川口，田中，中島為，上妻，大江を歴訪，四時帰る。佐々布遠来訪。夜古閑信夫来訪。
- 七月五日 晴。上海東和に致書す。川口介男，田中清司，古閑信夫等前後來訪。
- 七月六日 晴。午前辻武雄，佐々干城，平山岩彦来訪。午後古莊嘉門翁を訪ふ。二時帰る。緒方二三，山田珠一，安達一時，石原醜男等来訪。辻源助の信至る。夜家族と市内を散歩し，川口に至り小談帰る。
- 七月七日 雨意。午前生田清範，毛利篤来訪。別府温泉有吉明の信至る。午後高田九郎来訪。晚内人と古閑信夫宅を訪ふ。上海浮田郷次より北京高尾亨の信を転送し来る。
- 七月八日 晴。徳田来訪。有吉明，浮田郷次に復書す。午後宇土に至り細川子爵邸に候し，去て法華寺，城山の先塋を展し，奥村家に至り小談，四時の汽車にて帰る。松倉善家を春日に訪ひ小談，帰途緒方二三，三浦喜傳を敲き帰る。
- 七月九日 晴。朝古莊韜来訪。午前永原虎雄来訪，留て中食す。午後津野一雄来談，其の主催する講会に加入を勧む。因て一口を引受く。夜川口，古閑兩夫婦来訪。
- 七月十日 晴。上海井手，佐原，白岩三人合作の信，並に山根虎之助，中西正樹の信至る。午前毛利，武藤，辛島，小早川，板井，阿部野，榎木等を訪ふて帰る。夜出て理髪。白岩の信至る。
- 七月十一日 晴。中島為，河野久，阿南等の信片至る。岳翁，武藤巖男，住田来訪。村山正隆に其の巖君の逝去を弔す。榎木俊三，平田彦熊前後來訪。
- 七月十二日 陰。午前佐々布遠，辻武雄，井場熊喜諸氏を歴訪す。白石卯来訪。小川平吉の信片至る。夜鎮西館に至り喜多流謡曲を傍聴して帰る。
- 七月十三日 晴。
- 七月十四日 晴。午前鎮西館に至り，中食後河田巖と車を駆て北園神社に参拝し能楽を觀，午後二時河田と別れ松倉を訪ひ，共に出て再び能楽を觀る。巴，羽衣，大仏供養の三番なり。三浦喜傳に邂逅，相伴て帰る。緒方，河口列来訪せりと云ふ。夜石原醜男，立石登来訪。上野岩，井手三郎，岡幸七，有働政喜，山田勝治の信至る。山田勝，上野に復書す。

○以下は，次ページに記されたメモ

「王者にてもあれ百姓にても有る自分の家族に平和を見出すものこそ最も幸福なれ（ゲーテ）
宗教無くして人を教育するは恰剛なる悪魔を造るなり（威林頓）

最も貴き勝利は自己の心に克つに在り (ラ・フォンデーヌ)」

明治四十四年辛亥七月十五日起

日誌

熊本, 東京, 熊本, 上海, 漢口, 上海

七月十五日 晴。午前長野一誠翁, 勝木恒喜来訪。古城貞吉の信至る。晩家族と大江に至り, 九時帰る。

七月十六日 晴。朝徳田生来訪。午後古荘, 小早川, 中路, 阿部野来訪。共に熊野, 羽衣の二番を謡ふ。諸人を留て晩食し, 八時津野宅に至り勝木に会し一, 二番を謡ひ, 十一時半帰る。

七月十七日 晴。上海本庄少佐, 西本, 高島醇の信至る。午前長野一誠氏を訪ひ小談, 帰途阿部野, 緒方を訪ふて帰る。古城に信片を發す。井手, 本庄に復書す。徳田の為に黒龍会清藤に致書す。村松, 村井前後來訪。夜古閑信夫来訪。

七月十八日 晴。終日在家。去年今日世界一週を終はり敦賀に着せり。

七月十九日 晴, 暑熱甚し。内田友義, 加来敏夫, 上妻博路の信至る。内田, 加来, 上妻に復書し, 海吉田大佐に致書す。別府温泉有吉明に致書す。

七月二十日 晴。別府有吉明の信至る。大連牛島吉郎に致書す。夜大江を訪ふ。

七月二十一日 晴。辛島格, 荒木善八前後來訪。午後二時沙取に佐々干城氏を訪ひ庭前の舟中にて小談, 去て臨水亭に至り江良惟一, 古荘, 緒方, 阿部野, 中路, 稲田, 松村等に会し, 晩食後帰る。熱甚し。山田勝治の信至る。

七月二十二日 晴。清藤幸七郎の信至る。晩中将姫の祭を観る。松倉善家来訪。微雨。

七月二十三日 晴。午前池田勇, 井場熊喜来訪。午後上妻博之, 津野一雄来訪。井手, 加藤壯に致書す。雷雨大に至る。夕陽に及で歇む。齋藤國男の信片至る, 之に復す。晩出て理髪。

七月二十四日 晴。島田数雄の信至る。葉室侃温来訪。是日午前十時の汽車にて家族と八代坂本に至る。十二時二十分着, 友恵屋に投ず。玖摩川に枕み, 緑水青山風致甚佳。中食に鮎を焼く, 味極美。夜に入て蛙声浪々, 鈴を振るが如く溪声と相和し, 幽趣言ふ可からず。頓に身の塵寰に在るを忘る矣。

七月二十五日 晴。午後四時五十分の汽車にて坂本を發す。八代にて松倉親慶に邂逅す。午後七時半春日着, 車を賃し家に帰る。佐々干城, 津野, 原田隆升, 辻等来訪せりと云ふ。井手三郎の信, 並に有吉明別府よりの電報至る。

七月二十六日 晴。朝佐々干城, 辻武雄来訪。夜大江を訪ふ。

七月二十七日 晴。去年今日欧米漫游より帰来せり。朝井手友喜の子息死去の報に接し正木宅に至り弔詞を述ぶ。津野に至り講金九円を納め, 九日社に小早川を訪ひ, 河口宅を一訪して帰る。加藤中佐, 佐藤逸人の信至る。明日より上京せんとす。午後行李を收拾す。

七月二十八日 雨。安河内弘, 上野寅彦, 有吉明に致書す。七時二十分家を出て上熊本に至り八時の汽車にて發す。新橋往復車票三十五元六角なり。不破昌材と同車, 長洲に至り分る。鳥栖にて車を換へ, 二時馬関発の山陽列車に乗り神戸に向ふ。

七月二十九日 晴。午前六時半神戸着, 七時四十分の最急行車に乗ず。大阪にて南新吾上車, 名古屋に至り分る。午後八時半新橋着, 旅館主人, 並に山田勝治来迎。九時佐々木旅館に投ず。齋藤國男来訪, 午前一時に至て辞去。是日村山正隆, 河野久太郎, 橋三郎, 水野梅暁, 高島, 古城等来訪せりと云ふ。夜更雨大。

七月三十日 風雨甚猛。水野梅暁来訪。熊本宅, 並に牧卷次郎に致書す。荒賀直順に致書す。午後上車, 芝に清浦氏を訪ふ。小田原に転居して在らず。同文会に根津を敲く。京都に赴けりと云ふ。山内崑を訪ふ, 又在らず。山田勝治を舞鶴館に訪ひ立談, 去て村山正隆を麴町五番丁に敲き, 談時を移て

帰る。橘三郎来訪せりと云ふ。信盛堂に至り帽子其他数品を購ふ。

七月三十一日 陰。朝荒賀直順来訪。九時軍令部に至り竹下、吉田、田中三大佐、伊集院、大井、堀田諸氏に面し暢談、去て参謀本部に福島中将、宇都宮少将、松井少佐等を訪ひ、帰途朝日新聞社に池邊、佐藤に名刺を留め、尾越辰雄に抵り小談、帰る。村山正隆来訪せりと云ふ。午後上車、小石川水道丁に荒賀直順を訪ひ小談、去て岡本源二を訪ふ、在らず。転じて古城貞吉を関口台町に敲き寛話、出て細川侯爵邸に候す。侯爵、並に夫人に見ゆ。武田寧と暢談、辞して市谷田町に佐々信一、守田愿を訪ひ、五時帰る。安河内の信至る。岡本源次、齋藤國男来訪、深更辞去。

八月一日 晴天。汕頭徳丸に致書す。朝理髮。亀雄、狩野に致書す。晌午岡本来り共に電車、青山高樹町に細川護立男を訪ふ。中食の饗を受け男爵、並に蓑田、岡本と暢談、二時辞出。青山墓地に佐々氏の墓を展し電車にて帰る。山根立庵に致書。山田勝治、高島義恭来訪。牧卷次郎の信至る。橘三郎、高尾亨に致書す。井手三郎の信至る、之に復す。夜尾越辰雄来訪、深更辞去。

八月二日 晴。朝電車、軍令部に至り藤井中将を訪ひ談時を移し、齋藤海軍大臣に抵り小談、去て竹下、吉田両大佐、大井、堀田両少佐と小叙。外務省に倉地政務局長を訪ひ、十一時半帰る。午後吉田寿三郎来訪。二時電車出て有吉明を京橋南鍛冶町対山館を訪ふ、在らず。去て芝白金台町に吉田大佐を、泉岳寺前に竹下大佐を訪ひ暢談、転じて品川に細川立興子爵を候し小談、辞して金杉竹芝館の同県人の招待会に出席す。守田、古川、久品、尾越、黒瀬、古城、岡本、富田来会、十時散ず。上野岩太郎の信、並に東洋協会より案内状至る。蓑田、佐々木常記、村山正隆来訪せりと云ふ。

八月三日 雨。齋藤國男来訪。八時有吉を対山館を訪ひ諸事商量し、東洋協会に門田正経を訪て小談、去て海軍々令部に大井、並に軍令部副官を訪ひ帰る。村山、齋藤久熊来訪せりと云ふ。上野岩、古城、熊本宅、山内に致書す。軍令部藤井中将、並に吉田、田中諸氏より四、五両日に懸け案内有り、先約有るを以て之を辞す。午後二時外務省に至り石井次官に会し有吉と三人商量する所有り。三時永田町に伊集院俊を訪ひ寛談、去て村山を敲き、五時帰る。大井少佐来訪、其広東行に付き相談有り、食事を共にす。十時辞帰。京都狩野直喜の信至る。暴雨。

八月四日 暴雨。狩野、齋藤久、安河内に致書す。北京公使館高尾亨の信を外務省より転送し来る。山内崑、古城の信至る。午前池邊吉太郎、成田鍊之助来訪。成田を留め中食す。大谷藤次郎、津田武、水野梅暁等来訪。池辺、山内に致書す。晩大倉喜八郎の案内に柳橋亀清に赴く。同座は高島義恭、有吉明、橘三郎を合せ主客5人なり。九時半散ず。松岡千寿来訪。石橋藤次郎の信片至る。

八月五日 晴。朝有吉を訪ひ上海に於ける設備費、其他五百円を受取り、海軍に竹下、吉田両大佐、田中耕太郎、大井等を訪ひ、去て赤阪新坂町に橘三郎を訪ふ、在らず。転じて四谷に高島、安達を訪ふ、皆在らず。十二時帰る。山田勝治、宮田信一来訪せりと云ふ。午後松岡千寿、宮田信一、山田勝治来訪。五時半東洋協会の招宴に上野精養軒に赴く。朝鮮基督教伝道士二十九人主賓たり。西餐の饗有り。小松原文部大臣に会見す。柴田家門、古市公威、大倉喜八郎以下主客合せて六十余人。九時半散ず。是夜月清風涼。小林吉人、菅沼周次郎、佐々木常記、成松静雄等来訪せりと云ふ。古城の信至る。

八月六日 晴。朝小林吉人来訪。渡辺徳太、三城豊造の紹介状を携へ来訪。晌午山内崑の招宴に支那料理店明楽園に赴く。山内夫婦と其長女、荒賀、成田の諸人なり。三時散ず。荒賀を誘て帰る。伊集院俊、橘三郎前後來訪。是夜西下の予定なりしが汽車不通の為に明夕に延期せり。池邊吉太郎来談、深更に及で去る。

八月七日 晴。朝起床前村山正隆、中村、海田来訪。午後高島義恭、村山、佐々木常記等来訪。是日西下せんとす。行李を戒む。十時二十分旅館を出で新橋に至り十一時の汽車に乗ず。小越平陸、佐々木常記、黒瀬弘志、成田鍊之助、中村、海田来送。乗客雑踏纔かに膝を容るのみ。

八月八日 快晴。黎明富士を望む。十時中泉に至り下車。四日以来水患の爲め線路破壊せるを以て徒歩にて行く十余丁、仮橋を渡る。二次群衆擁擠互に相排して進む。雑踏の状言喻す可からず。天竜川附

近に至り上車，晌午浜松に至り中食す。停車一時間，三時名古屋に至り急行車を待て之に換坐す。林安繁に邂逅す，同車岐阜に至りて別る。九時京都を過ぎ，十時大阪，十一時神戸着，直に下ノ関行に転乗す。中原淳蔵，三谷一二に邂逅す。客多くして寛坐する能はず。

八月九日 晴。広島に於て三谷と別る。此に至て乗客の大半車を下り七日以来始めて少しく寛ふすることを得たり。午後二時下関着，三時半門司発の車に乗ず。五時博多にて中原博士と分袂し，鳥栖にて車を換へ，九時上熊本着，直に車を駆て家に帰る。鳥居，武者小路列合作の信片，並に牛島，佐々布等の信に接す。

八月十日 晴。牧野義智，武藤巖男両氏来訪。午後米原繁蔵来訪，之を留て晩食す。

八月十一日 晴。宮島大八より其先人の遺墨摺本を送り来る。天野平八，宝妻，佐々木利助の信至る。

午前鎮西館，小早川，河口宅，緒方を訪て帰る。松崎雀男の夫人来訪。晩大江を訪ふ。

八月十二日 晴。午後江良惟一，田中之雄，平山岩彦，河口介男前後來訪。大阪中島為喜，東京安田善雄等の信至る。古閑信夫来訪。夜通町に散歩す。

八月十三日 晴。画家福田麥僊，高田九郎，原田隆升，村松虎男等前後來訪。福岡安河内より西南記伝を郵送し来る。夜藤本親信来訪。

八月十四日 晴。川島浪速，宮島大八，中島為喜に復書す。川島の信至る。立石登来訪。天野平八，宝妻寿作に復書す。安河内，井手，中澤武兵衛に致書す。

八月十五日 暴風雨。上海加藤壯太郎の書留信至る。北山西路家屋引譲の事を通告し来る。高島義恭に致書す。藤本来訪。古城貞吉上海行に付き浮田郷次，西田耕一に紹介状を致す。是日宇土に墓参し，転じて人吉林温泉に遊ぶ予定なりしも暴風の為に中止す。河野久太郎樺太よりの信片至る。

八月十六日 陰。辻武雄来訪。高島義恭に致書す。午後一時の汽車にて宇土に至り法華寺，城山の先塋を展し，一里に至り小坐，四時四十分の汽車にて人吉に赴く。七時着，車を賃して中原村の林温泉翠嵐楼に投ず。楼主人川野廉君に晤す。直に温泉に浴す。快甚し。

八月十七日 晴。午後玖摩河畔に散歩す。

八月十八日 晴。朝河を渡りて左岸に至り散歩す。是日楼主人の書画帖に七絶一首を題す。小川平吉，白岩龍平，小早川秀雄に信片を發す。

山明水秀小仙寰，漁笛樵歌意自閑，嵐翠滴衣涼味足，半江斜日落帆還，
滿月青山入晚晴，仙郷風物画難成，靈泉浴罷凭欄望，嵐翠落窓分外清。

北京高尾亨，東京加藤壯太郎，有吉明に致書し，漢口岡幸七郎に信片を發す。

八月十九日 晴，晩雷雨。高等女学校教師犬童某，並に沙取人藤本老人来談。

八月二十日 晴。朝内人と前川橋一帯に散歩し，茶店に小憩して帰る。

八月二十一日 晴。午前八時半翠嵐楼を辞し，庭前より舟に乗り玖摩川を下る。急流箭の如く舟行甚疾，激湍を過ぐる毎に奔波舷を打ち飛沫衣を沾し，快言ふ可からず。清正公岩下を經過し槍倒を過ぐ。水激して崖洞の下を衝き雪を噴て奔流す。懸崖天井の如く舟其の下を行く。甚奇絶なり。十一時白石に達し上陸，岩屋を觀る。空洞深邃内に権現を祀る。洞奥池有り，其底を窺ふ能はず。窟内一足鳥有り。天陰れば則ち出で晴れば則ち穴隙中に隠ると云ふ。停車場側の茶店に投じ休憩す。林温泉場より此に至る七里，二時間半にして達す。船資三円半，中食に鮎を焼かしむ，味甚美。午後四時四分の汽車にて發す。八代にて岡辰喜と同車，七時熊本駅着，直に車を賃して家に帰る。米国孫逸仙，上海井手，北京波多博，唐津中澤の信に接す。

八月二十二日 晴。朝井芹，上妻，中島為喜，阿部野，緒方，正木列を訪ひ，十一時帰る。夜大江に至り，九時辞帰。

八月二十三日 晴。山口山根虎之助の訃至る。本月十四日午後三時逝去せりと云ふ。悼む可きなり。安河内，加藤壯太郎の信至る。加藤の信は昨年五月二十二日上海より余の世界漫游中英国に宛て發送せ

しもの一年三ヶ月の後に落手せる者なり。加藤に信片を發す。午前井芹経平来談。中島為喜を晚餐に招く。十時散ず。波多，高尾，齋藤の信至る。

八月二十四日 雨。午前中島為喜を訪ひ其奉天に赴くを送る。帰途江良惟一を寺原に訪ひ小談。安達謙蔵を研屋支店に訪ふ，在らず。山田を訪ふ，又在らず，帰る。安達来訪せりと云ふ。高尾亨，波多博に返信を發す。孫文の手紙を海軍軍令部に郵寄す。

八月二十五日 晴。宇野哲人，佐々干城来訪，佐々氏を留め申す。閑談晡時に至る。

八月二十六日 晴。午前三浦喜傳，宇野哲人を訪ひ小談，去て春日に松倉善家を訪ふ，在らず。帰途洗馬に帽子洗濯を托し，白水館に住田を訪ふて帰る。夜家族と広丁の夜市を觀る。

八月二十七日 晴。午前古莊韜を訪ひ，十一時帰る。本島正礼来訪，鮎を贈る。晩三浦喜傳，宇野哲人，本島正礼を邀へ晚餐す。九時散ず。

八月二十八日 熱甚，午後驟雨。午前松倉来訪，留て申す。毛利来談。西本省三の信至る。生田清範来訪。

八月二十九日 晴。午前阿部野，徳田来訪。晌午清子を伴ひ練兵場に至り模擬戦を觀る。長崎土佐屋，福岡安河内に信片を發す。本島正礼の信至る。

八月三十日 晴。三浦喜傳來訪。独逸鳥居赫雄の信，並に米原繁の書信至る。鳥居に復し，別に山根虎之助未亡人に弔詞を致し奠儀五円を送る。岡本源次に致書，克堂翁墓所石燈籠建設費二円を送る。米原に復す。海軍吉田大佐の信至る。

八月三十一日 風強塵埃煙の如く不快甚し。午前松崎鶴雄に旅費七十五円を長沙宛に郵送す。上海蛭子に致書す。井芹，葉室，田中之雄を歴訪す。午後徳田生来訪。清藤幸，土佐屋に致書す。

九月一日 晴。井手友，徳田来訪。夜内人と通町に散歩す。古城貞吉上海よりの信至る。

九月二日 晴。午前山田珠一，鎮西館を訪ふ。途中古城貞吉の来訪せるに會す。昨日清国より帰来せりと云ふ。松倉，緒方来訪。大連中島為喜，市原源二郎の信至る。晩静養軒の集會に出席す。古城貞吉，山田珠，小早川，宇野，松倉，緒方，阿部野，中路，片野，沼田，渋谷，古莊，武藤，久野，諸員なり。十時帰る。

九月三日 晴。午前田中清司，古城貞吉を訪ひ，上熊本駅に至り井手友の上海行を送る。十一時半發車。上妻と共に歩いて帰る。石原醜男来訪せりと云ふ。古城貞吉，上田正喜来訪。夜雨。

九月四日 晴。毛利来訪。狩野直喜に致書。別に武田充に致書，其父寧氏の死を弔す。安河内に致書。理髮。木下俊雄来訪。

九月五日 晴，涼味可人。午前三浦喜傳を訪ひ，去て春日に松倉を訪ふ。正午松倉の案内にて出て鰻飯を吃し，午後帰る。夜上妻，三浦國器来訪。井手友長崎よりの信片至る。

九月六日 晴，秋涼透衣，神氣如洗。白岩，辻源助，安河内，長崎郵船会社に致書す。清藤幸の信至る。佐々干城氏来訪。午後白石卯一來訪。四時家族と車を賃し本妙寺に至り肥州公の墓を展す。帰途宝物館を觀る。秀頼を護して二条城に家康と会見せし時携へし五寸許細身祐定の短刀，賤ヶ岳七本鎧の一，旗，立物，真筆の書翰，歌等貴重の宝物甚多し。五時半帰。夜濟々覺教論今井精一，石原醜男，金津等来談。

九月七日 晴。午前徳田，大野謙二郎，佐々干城氏三男来訪。午後三浦を訪ふ，在らず。夜雨。

九月八日 半晴。草津温泉川島浪速，京都狩野直喜の信，並に安河内の葉書至る。三浦喜傳來訪。

九月九日 雨。午後佐藤敬太，安達謙蔵，牧野義智，田中清司等を訪ふ。生田清範来訪。

九月十日 晴。午後池内源七来訪。夜大江を訪ふ。

九月十一日 陰。徳田生来訪。竹下小太郎，井手友喜の信，並に佐藤逸人八月二十九日西安發の信片に接す。十三日間にて達せしなり。竹下に復す。是日より藤崎神社の祭事執行，夜家族と藤崎神社に参拝す。

九月十二日 晴。井手友喜，古城貞吉に致書す。井手三郎，蛇子義治の信至る。午後池部鶴彦，角田政治来訪。角田は其近著外国地理集成一冊を贈る。池部を留め晩食す。夜河口介男，石原醜男来訪。九時石原と藤崎神社の大神楽を観る。

九月十三日 微雨。朝岳翁枉顧。午後緒方，阿部野来訪。是日今井，金津，石原の為に書数枚を作る。

九月十四日 陰，頗熱。午前古莊来訪。午後緒方，阿部野を物産館に訪ひ，去て河口，古閑を訪ひ小談，転じて田中，角田を訪ひ，紙類を購て帰る。土佐屋と井手三郎に信片を發す。晩石原醜男来り其先人の佩刀朝日丸を示す。雨。

九月十五日 陰。晌午石原と上車，新町に至り藤崎宮祭典の能楽を観る。古莊嘉門翁亦在焉。雲雀山を演する時雨大に至り衣袂皆沾ふ。衆皆傘を翳して観る。三時石原と城内を通過して帰る。久野，勝木，高田九郎，今井等来訪せりと云ふ。夜大江に至り告別。

九月十六日 晴。辻来訪。上妻博路の信至る。午前古莊，久野尉太郎，今井，正木，辻列を訪ひ別を叙す。長野一誠翁来訪。勝木来訪。牧野義智，井芹経平来訪。午後清子を伴ひ高道の処に至り齒の診察を受け，去て長野翁，小早川，山田，井芹を訪ひ，別を叙て帰る。長野翁より煙草一箱を贈り来る。竹下小太郎の信至る。夜田中夫婦来訪。

九月十七日 晴。是日家を辞し清国に遊ばんとす。朝岳翁，並に今井精一，三城豊造，安達謙蔵，正木，井場熊喜，河口，佐々干城諸氏来別。十一時家を出て上熊本駅に至る。内藤儀十郎，佐々布遠，田中清司並に其子三人，三城豊造，今井精一，井芹経平，木下俊雄，徳田廣作，松倉善家，石原醜男，牧野義智，辻武雄，高田九郎，古閑信夫，河口介男，山田珠一，小早川秀雄，阿部野利恭等来り送る。十一時半発車，諸友と握別す。高瀬に至れば池部雀彦来送，柿一簍を贈る。二時半鳥栖に至り換車，早岐に至れば雨大に至る。大村諫早の間前日水災の跡極て惨憺たり。七時十五分長崎着，車を駆て土佐屋に投ず。大雨注ぐが如し。熊本宅に致書す。平井中佐，桂少佐に信片を發す。

九月十八日 陰天，熱甚。熊本留守宅，並に井手三郎，野満四郎，波多博に信片を發す。午後二時旅館を出て税関碼頭より小蒸気船にて博愛丸に至り搭乗す。午後四時出港。加藤壯太郎来乗。

九月十九日 雨。海上。

九月二十日 晴，熱甚。午前八時船黄浦に入る。上野貞正始て出て来る。日く，長崎にて乗船後室内に静臥して出でざりしと云ふ。九時半郵船碼頭に着す。井野，井手，島田，西本，村上，藤井，白岩，今井，河本等来り迎ふ。上陸，領事館を訪ひ，東和洋行に投ず。本庄繁，井手，西本，白岩，佐原，明渡等来訪。軍令部副官より十月より十二月迄の手当を送り来る。松本，河野，佐原，中島為喜，松崎雀雄の信に接す。木幡，伊東，浮田，村上，蛇子，佐々木，高橋，井野，東和に土宜を分贈す。海軍に領収書を發し，別に吉田大佐，熊本留守宅に發信す。西本来訪。

九月二十一日 晴。午前狄，有吉に土宜を分送し，漢口有安には白岩に托し転送す。狄，井手，西本を訪ひ，去て北山西路の旧宅を視，佐原，篠崎，嶋田数，有吉，浮田列を訪ひ，正金に至り預金三百二十円を受取り，大馬路に村上，井野を訪ひ，去て大倉に川本を敲き帰る。午後加藤を豊陽館に訪ふ。増田高頼と会談。晚司令官の招邀に杏花楼に赴く。会者町田対馬艦長，加藤中佐副官，並に歐洲に派遣せらるる小林少佐，少佐安東昌喬，造兵中技士吉川晴十，及余の主客八人なり。九時散ず。歩して帰る。加藤来談。紀成虎一より其著呂氏教訓一部を送り来る。

九月二十二日 晴天。午前井手，佐原を訪ふ。午時佐原来訪。松崎雀雄長沙より来着。一時半豊陽館に加藤中佐と会し，軍艦に至り川島司令官，増田參謀等を訪ひ，三時秋津洲に立寄て帰る。村上夫人，藤井来訪。西本，松崎，井野，川本，古澤，安河内来訪。西本，松崎，川本を留め晩食す。安河内談夜深に及で帰る。

九月二十三日 晴天。午前九時根津一氏来訪。白岩，迎英輔来別。晌午松崎を伴ひ領事館に至り諸人に紹介し，白岩，迎を博愛丸に送り，帰途松崎と加藤，上海日報社，佐原宅を訪ひ帰る。神尾，西本，

並に熊本県学生八人来訪。六時本荘と大慶楼の第三艦隊歓迎会に出席，九時帰る。井野，井手来談。三浦國器，三原経治の信至る。

九月二十四日 晴。午前池田郡蔵，島田，荒木来訪。午後村上宅を訪ふて帰る。加藤，神崎，美濃部，松寄来訪。

九月二十五日 晴。夜鈴木島吉の宴に六三亭に赴く。

九月二十六日 晴。午前沖長松，西本，井手来訪。十一時有吉，浮田，西田を訪て帰る。午後佐久間楨来訪，毎日新聞の南京通信員なり。出て北山西路の宅を視て帰る。竹井，村上貞吉，本荘少佐来訪。坂口幸三の信至る。海軍に成都事件の報告を發す。宮田大利船長来訪。夜藤井太七，松寄雀雄来談。

九月二十七日 晴。熊本宅，森茂，白岩龍平，堀内干城の信至る。海軍に報告中の誤字訂正を送る。本荘来談。午後四時半東和洋行を辞し，松寄雀雄と北山西路第三号の旧居に移転す。回顧すれば，昨年正月三十一日夜十一時家族と此の寓を出て東和洋行に移てより約十七ヶ月を閲し再び余の寓する所と為る。室内の陳設，並に僕役に至る迄旧時と大差無く，懐旧の念禁ずる能はざるなり。夜井手，藤井，加藤壯太郎，島田儀市来訪。熊本留守宅に発信す。

九月二十八日 晴。熊本宅に発信す。井手三郎，森茂に致書す。午後理髮。新馬路登賢里に姚文藻を訪ひ，土宜を贈り談時を移て帰る。加藤，越来訪。六時正金銀行鈴木島吉，児玉の送迎会に倶楽部に出席し，九時豊陽館越太郎を訪ふ。秘密にて姓名を變じ物資調査の爲め湖南に赴く者なり。藤井太七来訪。是日鞞鞞を撤去す。

九月二十九日 晴。晌午領事館の新築落成式に列す。内外人約七百人立食の饗有り。一時帰る。宜昌香月梅外より桐材の大なる者一個を送り来る。香月，松岡千寿等に致書す。晚倶楽部の謡会に出席，十時半帰る。夜半雷雨。

九月三十日 陰。午前同文書院に根津，安河内を訪ひ，帰途正金銀行より百五十元を受取て帰る。平岡小太郎に其母堂の死を弔し，外に紀成虎一に致書す。内人と清子に画葉書を郵送す。是日伊太利，土耳其と宣戦を公布せりとの耗に接す。辻源助来り点心三箱を贈る。木村信二死去の訃に接す。其兄丑徳に弔詞を發す。北京波多博に致書す。七時根津一の招宴に杏花楼に赴く。会者七十名許，九時半散ず。雨。

十月一日 陰。井手三郎の信至る。西本来訪。山澤幾太郎の訃至る，弔詞を發す。島田数雄を訪ふ。五時半帰る。本庄少佐来訪。川本静雄来訪。

十月二日 半晴。岳翁，内藤儀十郎，佐々布遠，小早川，池部雀彦，佐々干城，井芹，今井精一，三城，石原，河口，田中，古閑に致書。別に海軍吉田大佐に普通信を發す。加藤中佐を豊陽館を訪て帰る。辻，緒方，牧野，阿部野，松倉に信片を發す。齋藤國男，津田武，小林吉人に信片を發す。夜根津一，鈴木島吉の帰国を送る。雨。

十月三日 雨。藤井太七来訪。野満四郎，辻武雄の信至る。御幡雅文，水野梅暁，清藤幸七郎に致書す。

十月四日 晴。心気不舒。西本，加藤来訪。軍令部に政況秘報を増訂し之を郵送す。岡幸七郎，有安一雄の信至る。夜松崎と月を踏て租界内を散歩し，電車にて帰る。

十月五日 晴，涼味人に可なり。北京野満，波多に致書す。是日愛而近路の家に至りガス，水道の設置を為す。夜松寄，井手と新公園に月を賞し，帰途井野春毅を訪て帰る。

十月六日 晴。是日清曆中秋たり。東京亀井六郎，広東大井五郎に致書す。大井には申報郵送の事を報ず。郵便局に至り，帰途有吉一雄，本庄少佐を訪て帰る。午後正金に至り銀三百五十元を受取り，松寄，西本と北京路に赴き家具を購て帰る。東和洋行より団子を送り来る。松浦次郎なる者，山ノ井格，辛島格の添書を携へ来訪。夜に入て中秋の明月皎々として南窓を照し清絶不可状。本荘少佐来談。有詩，

蕭颯金風万木鳴，窓燈欲滅暗愁生，中秋今夜一輪月，照得満清興廢明。

十月七日 晴。是日愛而近路第十六号租屋の設備成る。松寄、西本此に移寓す。午前浮田を訪ひ小談、帰る。

十月八日 微雨。日曜。午前加藤壮太郎、浮田郷次、山田純三郎、藤井太七来訪。藤井室内の整頓に助力す、留て中食す。是日より西本、松寄等と食事を共にす。午後松元勢蔵来訪、三井銀行員也。篠崎来談。六時杳寄、西本と加藤の晚餐に豊陽館に赴く。布目秋津洲艦長、森副長、佐原等同座たり。九時散ず。秦長三郎来訪せりと云ふ。熊本宅、吉田大佐、大井五郎、生田清範の信至る。

十月九日 晴天。熊本宅に致書、金二百円を郵送す。大井少佐に復書す。外に岡本源次、齋藤國男、狩野直喜、生田清範、前島真に致書す。波多に致書す。午後郵便局に至り金子四百円を受取り二百を熊本に郵送す。有吉、西田を領事館に訪ひ、去て松浦二郎を東洋館に敲き、転じて秦長三郎、大倉、本庄、狄南士を訪て帰る。夜辻源助来訪。西本と文路に至り食事用品を購て帰る。

十月十日 半晴。橘三郎、神尾茂の信至る、之に復す。岡吉次郎来訪。午後理髮。本庄繁の浙江旅行を江天号に送り、五時帰る。夜加藤を訪ふ、在らず。

十月十一日 雨、冷氣大に加ふ。朝加藤壮太郎の北清行を送り税関碼頭に至る。加藤来り告て日く、出帆明朝に延期せりと。帰る。正午河野久太郎の帰滬を迎ふ。昨日武昌兵変、張統制殺され総督難を江上に避け督署焼かれたりとの電報有り。夜佐原と談ず。熊本宅、井手、松倉、川内の信至る。

十月十二日 快晴。朝加藤を訪ひ、去て有吉、西田を訪ひ、正金より金百五十円を受取り、井手を敲て帰る。副島、加藤来訪。午後海軍大尉佐々氏の葬儀に本願寺に列し、二時半帰る。辻武雄の信至る。佐原来訪。武昌変乱視察の爲め今夜の南陽丸にて漢口に向はんとす。行李を收拾す。海軍々令部、熊本宅に漢口行を報ず。

武昌の兵変は十月九日（□□十日午後）に起り総督衙門、布政司衙門を焚き、兵營を焼毀し、瑞総督は兵船に逃れ第八鎮統制張彪は日本租界に避難せり。叛徒は革命党を主とし官兵中の特科兵全部、歩兵二個大隊、反して官兵と交戦せり。官兵の数は歩兵四個大隊のみ（以上張彪の談）。寺西中佐の報告には、叛徒は歩兵二個聯隊、砲兵一個聯隊、工兵一個聯隊にして官の爲に戦ふ者は騎兵一個聯隊のみ云々。

三井よりの電報には、叛徒は砲兵一個聯隊、歩兵一個聯隊、工兵一營と有り。

叛徒は第八鎮二十一旅団長黎元洪を推して主將とし、城門並に山上に砲列を布し官兵を砲撃中。

叛徒は漢陽の製鉄所並に槍砲局を占領し、兵器交穿せり。

叛徒は黄帝紀元四千六百〇九年の年号を用ひ中華銀行紙幣を發行せる爲め、各外国銀行は取付けを受けつつ有り。

外人に対しては飽迄敬意を表し紀律厳明なり。

北京の禁衛軍南下の報有り。

又た長沙にも事変發生せりとの説有り。

張彪の部下二個大隊武昌より江を度り漢口日本租界の下游に上陸し、開封来援の兵を待て之と合せんとす。

又た武昌より沙市に出張中の兵五百人大吉丸より下江武昌の急に赴く。

夜加藤、神崎来訪。狄平亦来訪。十時狄と馬車を同ふし郵便局に至り海軍と小早川、並に熊本宅への信を投じ、南陽丸に上る。加藤、佐原、木幡、神崎、河野、狄、井手友、松寄、西本、島田、副島、並に日清汽船より四人、上海日報より全員来送。加藤午前一時去る。

十月十三日 晴。七時起床。廬山を望む。風大にして浪高。木下船長と談ず。秋晴如画心気甚佳、斜陽江陰を過ぐ。十一時半鎮江着。広東大井五郎、上海佐々布質直に致書す。

十月十四日 健晴。朝八時南京着。正金銀行最上、加美山、古河公司上島清蔵来乗、漢口に赴く者なり。九時南京發、下関には英国小砲艦一隻と支那水雷艇一隻有るのみ。

十三日申報の武昌事変摘要如左。

革党小銃二万挺，外に山砲，野砲を奪獲す。武昌諮議局を軍司令部と為し，叛軍の将第二十一協統黎元洪大統領と為り，黄帝四千六百〇九年八月の年号にて告示を發す。其文如左。

一不許私匿官員。 一不許傷及外人。 一不許侵害商務。 一不許攻撃外国義勇隊。
一不許濫殺同胞。

右違者論死。

新軍の叛せしは砲兵一協，騎兵二隊，歩兵二協，工兵一營にして，官軍は歩兵四營のみ。

総督は逃れて楚謙兵輪に在り。

外国軍艦は英国二，日本二，米国三，独逸一隻なり。

北洋第一，第二，兩鎮応援の為め十一日夜專車に乘じ十三日北京發，廕昌之を統督して武漢に赴援す可き命を受けたりと云ふ。

又た薩鎮冰，程永和も艦隊を率て湖北に向ふ可き命を受けたり。薩は上海にて長江水先案内者十人を募集せり。

昨日午前上海にて接到せし電報によれば，叛軍は大別山に砲列を布き江上の支那砲艦と砲火を交へつつ有り。又曰く，漢口に在りし官兵尽く叛て革党に投ぜり。

午後三時蕪湖着。恰も昨日午後漢口を發せし大利丸の投錨せるを見，木下船長等と往て宮田船長を訪ひ漢口の状況を敲き，談話の概要を認め海軍に報告す。四時半蕪湖發。大利丸に托し海軍吉田大佐に二通，加藤中佐に一通を発信す。夕陽甚佳。晚最上，加美山，上島等と鋤焼を会食す。

十月十五日 健晴。前六時安慶を過ぐ。午後三時湖口県を過ぎ四時九江着，御園生，柴田，山口等に面す。岳陽丸漢口より入港，往て船長を訪ふ。海軍に第三，第四の兩信，熊本宅，上海有吉，加藤に致すの書信を岳陽丸に托す。五時開船。

長江水師提督程允和武昌応援の命に接し十四日安徽太平府の根拠地を發し，長龍舢板に乘じ砲艦江亨に引かれ，外に三隻の小舢板を伴ひ漢口に向ふに遇ふ。速力遅緩の為め其漢口着は十七日午前なるべし。

招商局の江永号，並に日清の岳陽丸も漢口の避難民を満載せり。

南昌の第二十七協の五十四標全部を漢口に赴援せしむる為め九江に召集せしも，叛軍に内応の恐有りとして再び南昌に帰還せしめたり。現に九江の清国砲艦一隻有り。

九江駐在の五十五標の一部を武穴迄派遣しつつ有り。

九江の鉄道は現に開通区域二十三哩，客車四輛有り。

岳陽丸船長の談に曰く，京漢鉄道は今も往復しつつ有り。

革命軍は規律厳明にして秋毫も犯さず，其の閭閻の患を為し放火掠奪を為せるは土匪盜賊の徒なり。

革命軍居留外人に通告して曰く，若し外人に危険の及ぶ恐有る時は二十四時間前に通報す可し云云。

十月十六日 快晴。午前十時半漢口着。橘來迎，木下に辞別し船を下り，領事館に松村，來栖を訪ひ小談，去て橘氏に投ず。司令官に途中の要聞一，二を報告す。寺西中佐，最上國勝，加美山，岡，中知來訪。海軍に概略を報告し，別に熊本宅，加藤壯太郎に発信す。岡を訪ふ。夜司令官を領事館に訪ひ，寺西，増田等と会談，九時帰る。

叛軍の兵力は砲兵一鎮半，砲兵二標と，毎日続々新兵を募集しつつ有り。小銃一万八千挺，小銃弾千六百万發，大砲六十門と砲弾とを有し，被服，糧食の倉庫も占領し，官錢局にては銀貨，銅貨を鑄造し，且つ中華銀行の名義にて紙幣を發行せり。

十五日より大漢報，十六日より中華民國報を叛軍の司令部より發行せり。総司令部を武昌諮議局に置き，都督以下尽く選挙に出つ。漢陽，武昌の知府も選挙法にて任命し民政を行ひつつあり。諮議局議長湯化龍は総参議に挙げられたり。

瑞総督は軍艦中に蟄伏し、張統制彪は日本租界に隠れつつあり。北京政府は袁世凱を湖広総督に岑春煊を四川総督に任じ、陸軍大臣蔭昌をして北洋第二鎮の半数と第六鎮の半数とを率て漢口に南下せしむることとなれり。

開封の援軍千二百は已に江岸車站附近に達し武昌の残兵五百と合せり（残兵は歩兵二百、工防兵二百）。

南下の援軍は信陽州に本拠を置くに至るべし。

岳州、沙市に在る二營の鄂軍は皆黎元洪の部下にして、四川より帰還の途に在る鄂軍の情勢、岳、沙兩地に在て規ひつつあり。

薩鎮冰は十五日夜漢口に達し楚有を旗艦とせるも、交戦の意思無き者の如し。叛軍は張彪に向て頻に加盟を勧告しつつ有り。張の第二子は黎元洪の部下に在りて其父の來投せんことを請ふて己まらず。張は北洋軍の來着を待て軍務を引続き軍事を抛つての決心を為し、黎に対し革命軍に反抗せざることを明言し、又た其部下の革軍に帰向することを抑止せざ[る]べきを誓へりと云ふ。

九日漢口、武昌にて革命党二十余人捕はれ五、六名を斬首せり。十日夜八時兵變、督署、藩署を攻撃す。総督逃る。十一日張彪逃る。十二日漢陽、漢口の占領全く成る。

現に支那軍艦の当地に在る者楚豫、建威、楚有等六隻にして水雷艇四隻有り。外国軍艦は英国五隻、米三隻、獨逸二隻、日本二隻なり。

十月十七日 健晴。午前支那街を視察し、帰途菱華公司に長安、茂木、福島等を訪ひ、正金に最上を敲き帰る。午後軍艦隅田に艦長を訪ひ、共に旗艦對馬に至り増田參謀と寛談、五時帰る。小林和介、最上來訪。渡邊郵便局長、古閑次郎、岡幸七等來訪。

革党は左腕に白布を纏ひ、旗は紅地に十曜の紋を用ゆ。市内に興漢招兵の旗を立て兵を募る。応募者市を為す。

陸軍大臣蔭昌約四千の兵を率ひ本日午前十一時江岸車站着。本日官軍の兵力は約六千五百乃至七千なり（永年駐屯の兵と先着河南兵）。其主力は度支部造紙廠に在る者の如し。

十月十八日 快晴。午前七時半起床。洗面終はる時銃声を聴く。直に衣を換へ領事館に至らんとす。途上町田對馬艦長に遇ふ。相携て測候所の高樓に上れば兩軍の銃声甚盛。官軍は劉家廟の村落と鐵道線路に拠り、革命軍は競馬場の北角柳樹の下に砲四門を排列して敵を砲撃し、其歩兵は劉家廟と競馬場の中間村落を占めて銃火を交へつつあり。革軍の兵数約千五百許。九時兩軍交綏、歸て朝食、直に出て鐵道線路に至る。八鎮統制張彪貨車に乗じ兵三十名を率ひ敵状を偵察するに會ふ。午後隅田艦長來談。三時艦長並に橋と出て競馬場に至り、展望台に上て形勢を觀る。革命軍の騎兵來り告て日く、砲兵二隊を出して敵を砲撃せんとす、危険の恐有り、乞ふ台を降んと。因て台を下り觀馬場に至り休憩す。時三時半なり。少焉砲声近傍に起る。革命軍七百許競馬場入口の道路に散解し砲二門を以て前面の村落を砲撃す。余輩其陣地に入りて觀戦し、去て測候所に至る。官軍は劉家廟に拠て出でず。革軍の一隊は線路に沿て鐵道の交叉点に來り、砲二門を拉し來て頻に劉家廟を砲撃す。其歩兵の大部隊は競馬場に拠り一枝場外に出て北角に展開して進まず。右翼の線路に在る者、白衣の隊官有り之を率ゆ。始終先頭に立ち勇悍匹無く諸般の指揮を為せり。四時四十分江上に在る六隻の軍艦より盛に革命軍を砲撃す。革軍始て退却、五時七分砲撃中止、五時三十分再び砲撃を行ふ。鐵道線路に沿へる村落に火起り、終に八ヶ処に炎上し光景慘憺たり。五時四十分戦全く止む。革軍兵数午前と大差無し。競馬場より劉家廟迄約三千米突、鐵道交叉点より千五百の距離を有せり。

張彪の二子張學騫叛軍に在り○漢口上海間の電は叛軍電報局を占領せる為め暗号の發電を許さず○武昌に中華民國軍政府を置き、黎元洪都督と為りて軍務を統べ、湯化龍總參議として民政の衝に當り、漢口に軍政分府を置き（元の江漢閩道衙門跡）、大江報主筆詹大悲を軍政司に任ぜり。

武漢三地革命党軍政施行後秩序漸く恢復せり○岑春煊は上海に逃れ、端方四川涪州に在り。

官軍は糧食に窮せしが、漸く九江より米三万石を購入することを得たり。

革命軍は現に三百万の軍資を有し、銅元局、官錢局には貨幣を鑄造しつつあり。

十月十九日 晴天。午前六時起床。八時四十分銃声を聴き馳て測候台に上る。十二時叛軍競馬場内に入り、砲列を布き劉家廟に向て発砲す。弾丸其半距離に達する能はず。少焉歩兵の大部隊約二千五百人、馬場を中心として左右両翼に分れ砲を伴て進む。沿道の村落多くは其の火する所と為る。尖兵の劉家廟に至りし頃は官軍已に退去して一兵を留めず。叛軍は天幕六十、並に糧食を戦利品として運回せり。初め叛軍の密集行進中六隻の艦隊は砲撃最有功の位置に在りながら一砲をも発せずして下流に向て去りしは何の意たるを知らず。是日湖北軍にして叛軍に降りし者有り。

黎元洪の本日邦人に語りしは、昨日の戦味方の死傷八十人、弾丸は武昌に二千万発を有し、尚漢陽にて二千万発を製造に着手せり○機関砲四門有り○現兵三万○小銃二万挺○糧衣軍資不足無し○本日の戦闘に準備せし兵は四千人○

本日の役叛軍の劉家廟に於ける戦利品は、貨車三台にして山砲、弾丸、米、被服、靴、天幕等なり。漢口にては、夜に入て叛軍の将士所々に祝勝の宴を張り慶賀全勝の旗を立て意気甚揚れり。

漢口に在る支那軍艦は八隻にして雷艇四隻なり。

楚有（薩提督旗艦）、建威、楚同、楚泰、建安、江元、江亨、楚豫（瑞総督在此）。

上海有吉、加藤、熊本小早川に致書す。重慶より十六日宜昌に達せし電報によれば、左の諸府県匪乱猖獗なりと云ふ。

新津県、温江県、大邑県、嘉定府、雅州、叙州、□為県、及び岷江一帯にして幾んど四川全省の半に及べり。

一電に日く、右の諸州県、賊と良民と区別し難し云云、又た宜昌、沙市一帯人心動揺、事變の発測る可からず。湖南、湖北、四川、広東、安徽、江蘇、浙江の七省聯絡起事の電報暗号、宜昌電報局にて発見されたり。此れは四川に打電せんとせし者なり。

十月二十日 晴。時報館に戦況を通信し、西本、松嵒に致書す。午前製鉄所総弁李維格、長安來訪。午前橋と出て王孝繩を訪ふ。相見ざる十余年、談時を移て帰る。

王の談に日く、陸軍大臣蔭昌昨夜孝感県に達せり。北軍の動員は第一、第二、第六の三鎮よりの各半数を出し総員約一万六千人、第二の二十二協と第六の半数先着、第六には馬玉崑の旧部と新軍と混合し、新軍には戦意無きが如し。

北軍の一万六千の中二千を黄河鉄橋に残し、其他黄河以南沿道の要地に若干を配置し後路に備ふるの計画なるが如し。

革命党黄興十七日漢口に至りしも、黎元洪と事を共にするの意無しと云ふ。

北京への電報は十八日夜より不通と為れり。

昨十九日の役は、叛軍何錫蕃を将とし精兵五百を新兵中に混し砲十一門を以て進攻せり。十八日來劉家廟に於て戦し官軍は河南兵六百と湖南兵三百、並に張彪の部下の兵を合せ一千内外なり。

午後領事を訪ふ。二時半角田、橘等と小蒸気船で沙口に至らんとす。江岸車站の前を過る時叛軍より下江中止を要求す。下游に在る支那軍艦に石炭を供給せんことを恐れたるなり。因て上陸、江岸車站に至り叛軍占領の状況を視察す。兵四百許此に屯す。四時半帰る。神崎正助來訪、本日上海より來着せりと云ふ。夜岡、神嵒を訪ひ、九時司令官の所に至り談じ、十一時半帰る。

本日五時頃セブンマイルクリーキに在る官軍を約六百の叛軍砲二門（山砲五センチ七）を以て攻撃し、直に之を駆逐せり。官軍の数七百許にして背後の山上には大部隊の屯せるを見たりと云ふ。

十月二十一日 陰。朝岡を訪ひ、去て領事館に至る。上海日報に通信を發す。上海加藤、佐原の信至る、之に復す。有吉領事に致書す。

沙市の電報によれば、宜昌は一兵を用ひずして叛徒の手に落ち、沙市も旦夕を保たざる形勢なり。

長沙も爆発の機目前に迫り、外国人は皆水陸洲に避難せりと云ふ。

本日宜昌より下りし沅江にて鄂軍百六名漢口に着せしが、入港と同時に左腕に白布を纏ひ叛軍に変形せり。

晩岡氏の晩餐に赴く。隅田艦長、上島清造来訪。隅田は明朝大冶警備の爲め下江すと云ふ。九時砲声五、六響を聴く。岡と馳て領事館の望楼に上れば砲声全く止む。江岸車站の対岸より襄陽丸を攻撃せし者の如しと云ふ。司令官と談じ、十一時半帰る。

本日叛軍二千五百セブンマイルクリーキに進み、砲七門を以て午前十一時半より午後三時迄砲撃を試みたるに、官軍も遙に砲火を開て応戦せりと云ふ。叛徒の指揮官は何錫蕃にして参謀は張福麟なりしと云ふ。

十月二十二日 快晴。午前九時半より岡、波多野、神尾等と歩して劉家廟に至り、更に小舟を賃してセブンマイルクリーキに至り上陸。二外人、並に邦人四、五名匆惶として来るに遇ふ。一外人右手掌に微傷を負ひ衣破れ裳裂て其状見るに堪へず。日く、瀟口附近に在る官軍の為に射撃せられしなりと。邦人も亦第二鉄橋と第三橋との間に於て前方の丘上より射撃を受け驚て逃げ来りし者なり。進で第二橋に至り千里鏡にて官軍の陣地を見るに、丘陵の上に人影の出没するを認むるのみ。叛軍は江岸車站に在り、主力は瀟口の側面に向て大迂廻を為しつつ有りと云ふ。五時小舟にて帰る。軍艦竜田入港。大阪朝日小池信美来着、鴨並に缶詰を贈る。夜小池、岡を訪ひ、領事館に司令官を訪ふ。高洲太助に逢ふ、本日来着せりと云ふ。

十月二十三日 快晴。午前小池を松ノ家に訪ひ小談、帰る。高洲太助来訪。海軍に書信を發し概況を報ず。午後角田、岡を訪ふ。夜十一時李維格を送りて軍艦対馬に至り、十二時帰る。李は革命党の物色急なるが為難を畏て上海に遁るる者なり。東和洋行辻源助より缶詰類を送り来る。

十月二十四日 陰、午後雨。土佐孝太郎、丸巖、外一名来訪。十一時日清の小蒸気船を借り武昌漢陽門に渡る。叛軍一隊八百人七里河鉄橋の戦に赴援するに遇ふ。今日朝七時より第一鉄橋と第三橋と相對して砲戦を開き、官軍は野砲二門を以て榴弾を發射し叛軍を撃退せり。叛軍の戦線に在りし者約千人、江岸には三千以上の兵を屯せり。此役叛軍の死傷四十名に及べりと云ふ。漢陽門より橋と車を賃し蛇山下の諮議局に設けたる叛軍の本部、軍政府に至り、都督黎元洪を訪ふ。軍務多忙の為に遇ふを得ず。外交科に至り劉鳳書、外二名に面す。彼等の談に日く、

現に叛軍の総数三万五千人、軍政府の参謀長は楊開甲にして革命黨員の本部の重職に在る者少なからず。日本留学出身者甚多く、帝国大学、同文書院、高等農林学校等に在学中の者有り。諸般の事合議体にして別に傑出の人物有るにあらず。軍務以外の事は革命党の留学出身者の手によりて決定せられつつ有る者の如し。黄興は未だ到着せずと云ふ。

正午軍政府を辞し日清の汽船にて帰る。司令官、寺西中佐、岡を訪ふ。香月梅外、神崎正助、迎英輔来訪。

武昌軍政府の門柱に聯有り。其一に日く、手執鋼刀九十九、殺尽胡人斯其時矣。

武昌城内毎戸歡迎得勝。並に漢軍百戦百勝等の紅旗を揚ぐ。

湖南長沙府二十二日革命党の手に落ち、巡撫余誠格逃れ黄忠浩害せらる。岳州は二十三日戦はずして叛徒の有に歸し、宜昌は二十日三十二標、四十一標の一部四百人の叛軍に占められ、岳州と同じく兵を用ゆるに至らず。宜昌の叛徒は復漢排滿、保教安民の旗を掲げたり。

向きに鄂省より襄陽に派遣せる馬隊四百人、馬を棄てて続々漢水を下り武昌の叛軍に復歸し、岳州より帰還の鄂軍は百六人にして、漢口に着するや直に左腕に白布を纏ひ叛徒に変形せり。

漢口に於ける招商局の快利号叛徒に抑留され龍旗を撤して占領旗を掲げたり。招商局にては上海漢口間の航業を中止するの已むを得ざるに至れり。

漢口にては、漢陽鐵政局総弁李一琴、交通銀行総弁盧鴻滄、洋務局委員吳凱元等に対し革党より圧

迫を加ふるを以て、皆他の地方へ逃走せり。

北京より送るべき援軍は二、六両鎮の半数と第四鎮の全部なるが如し。

備考、三營を一標と為し、二標を一協とし、二協を一鎮とす。一標の兵数は一千五百人なり。

北洋第一鎮は禁衛軍にして、二、六両鎮は保定に在り、四は天津、五は山東、三と第二十混成協は満洲に在り。

十月二十五日 陰、冷氣頓に加ふ。朝山口昇、角田隆郎来訪。午後出て理髮。帰途寺西中佐を訪ひ帰る。香月来訪。晚日本人倶楽部の招待会に臨む。鬼頭玉如、大連田岡、森の添書を携へ来り訪ふ。

九江二十三日刃に衄らず叛徒の手に帰し、四民相慶す。江上の軍艦に退去を命じ軍艦は命を聴くに至れり。

安慶、南昌も日内叛軍の有に帰す可く、蕪湖、南京一帶旦夕を保たず。若し鎮江、圖山、江陰等の要塞相踵で降らば長江の死命を制する者にして艦隊全く用を為さざるに至り、長江以南は復た現政府の有に非ず。形勢如此なれば武漢の本拠牢として不可動。

叛軍は五分利額面五元の軍事公債二十萬元を募集に着手せり。

沙市の形勢岌且不保夕、荊州に在る旗兵僅に五百人に過ぎず。

四川に調遣せられたる鄂軍三十一標千二百人、並に三十二標の一部二百五十、曾広大の統率にて武昌に向け帰還の途に在り、或は此の兵を以て荊州を屠らんも知る可からず。

叛軍には日本製野砲三十一門、山砲十一門有れども弾丸充分ならず。五珊七の山砲は六十門以上を有せり。

漢陽槍砲局に於ける小銃製造額は普通一日に三十挺、少しく工を加ふれば五十挺乃至七十挺を製出すべし。

北京よりは二、六両鎮より各半数、四鎮の全部を十五、十六、十七の三日に於て略ぼ輸送を終はれり。官軍の前進部隊は祁家湾に約五千、澗口に約五千を屯せりと云ふ。援軍中には良弼、馮国璋の兩人も加はり居れりと云ふ。

本日午後二時官軍五百人、野砲四門を以て第一鉄橋迄前進し叛軍と対峙せりと云ふ。坂口幸三の信至る。

十月二十六日 陰天。朝土佐来訪。叛軍江岸車站に退き以て第一鉄橋の官軍と対す。是日下江の予定なりしも明日決戦の形勢に致書す。夜司令官を訪ひ寛談、終りて領事夫人と小談、帰る。

十月二十七日 快晴。六時半砲声起る。香月と出て望台に登る。官軍第一鉄橋より劉家廟、江岸車站一帶の叛軍に向て榴散を發射し、九時半江上の軍艦四隻亦た砲を開て江岸を攻撃し、八時より砲声、銃声、機関砲の音と相和し轟々天地を震動するの勢有り。叛軍は野砲四門を車站の北側に排列して官軍と応戦す。十時半叛軍敗れ退き官軍進で劉家廟一帶を占領す。叛徒の野砲、山砲皆北軍の有に帰す。午後一時半香月、神崙、土佐、小池等と大智門に至り叛軍の状況を視察す。二時劉家廟の官軍行進を起し、叛徒は競馬場に兵を進め、三時開戦。官軍砲列を劉家廟に布き、叛軍は競馬場と鉄道線路に拠りて交戦す。官軍機関砲を乱射し左右の翼を張て進む。兵数第四鎮の一部約五千余、叛軍は二千に過ぎず。四時半叛軍の一隊競馬場の西北を迂廻し、官軍は突進して競馬場の東北を占領し、左翼の一隊機関砲を携て猛進して敵兵を駆逐し遠く迂廻部隊を乱射し、叛軍大に乱れ漢口市街に向て潰走す。六時十分官軍競馬場の全部を占領し砲声始て休み、鯨波大に起る。本日薩提督より列国艦隊司令官に照会有り、明日午後三時より艦隊武昌、漢陽を砲撃すべき事を通告し来る。東和洋行より鱒塩漬一包を贈り来る。本日の戦叛軍死傷六百名と云ふ。

十月二十八日 健晴。午前六時武昌側砲台より江上の軍艦を砲撃する、数十響。軍艦三隻之に応戦す。七時大智門附近銃声大に起る。直に義勇隊の望楼に上り観戦す。官軍砲列を万家廟と競馬場東側とに布き盛に敵軍を砲撃す。歩兵は馬場の西北を右翼と為し、左翼は鉄道線路に沿て大智門の敵に対せ

り。叛軍は大智門車站とゴルフ倶楽部一帯に拠りて防戦す。十時官軍の一部隊再び競馬場の西南方より迂廻してゴルフ倶楽部と大智門とを包囲せんとし、銃砲の声甚熾。万家廟村落の官軍砲兵は野砲六門（後四門と為る）を排列して頻に大智門一帯と漢口市街に榴弾を送り、叛軍大に窮し、十一時砲声漸く衰ふ。是日砲銃の弾丸日本租界に飛来し家屋を破り人を殺し危険甚し。午後橘、岡と同仁医院に在〔至〕り叛徒の傷者を視る。現に入院治療の者五十余名に及び惨状憐む可し。三時湘江丸に至り土佐、神崎、角田等と茶を啜りて休憩す。三時三十分軍艦海容、海琛、海籌の三隻日本租界の下游に進み来り、対岸の砲台と開戦す。叛軍は野砲六、七門を以て軍艦を砲撃し、砲声殷々極て壯觀たり。四時半に至りて罷む。砲台より発射せる砲弾の軍艦に命中する七、八個に及べりと雖ども、小口径の野砲なるを以て大損害を与ふるに至らず。夜領事館に川島司令官、高洲太助を訪ひ別を告ぐ。帰途岡、鬼頭を訪ひ、十一時帰る。官軍已に大智門を占領し前方百五十米突に前衛を出せり。

十月二十九日 晴天。是日南陽丸にて上海に下らんとす。行李を收拾し之を南陽丸に送る。香月来訪、十時橘宅を辞し香月と六碼頭に至り南陽丸に上る。長安、小池、角田、渡辺、土佐、宝妻、中知、福島等来送。大智門西方に当て銃声の断続たるを聴く。十一時花樓の北方砲銃の声盛に起り煙焰天に漲る。官軍頻に榴弾を放て漢口市街と漢陽とを乱撃し光景慘憺、避難者道路に絡繹たり。叛軍は市街と線路とに拠りて防戦し、官軍は大智門一帯より、右翼は喬口に迂廻して市街を圧迫せる者の如し。午後一時開戦。

軍艦海容、海琛、楚同、江利、江貞、建安の七隻と水雷艇湖鶚を合せ大小八隻七里河と青山との中間に碇泊す。海琛の煙突に弾痕有り。昨日の戦に受くる所なり。江岸車站の沿江、山砲八門と機関砲一門とを排列し以て叛軍の渡江に備ふ。江岸と亜細亜油房との間線路の下叛徒の屍体二十余具の横はるを見る。二十七日の役に斃るる者なり。漢口を回顧すれば煙焰迷濛たり。

神崎、香月、中西淳亮等と同船たり。上船の時途末永節に邂逅す、本日来着せりと云ふ。

同船伊太利宣教士の談に、昨日湖南より三千の兵武昌に着せりと云ふ。官軍の数は一万五千にして二千を孝感に留む。野戦病院は孝感と駐馬店に在り○官軍の師団長王遇甲、馬龍標の兩人なり。

湖北の蕪州、応山一帯哥老会員甚多し。

孫逸仙の弟武昌に在り。

夜十一時半九江着。今夜八時怡和洋行の太生号上海より入港の時支那軍艦と誤認され三回砲撃を受け、招商局の江孚も上海より入港の時革命党の為め現金三万両を押収されたりと云ふ。

当地二十三日午後十時革命党の占領に帰してより、旧道台衙門に司令部を置き聯隊長馬程之が首領と為り、砲台司令官徐某之に副たり。

新嘉坡よる革命党の軍艦若干隻着すべしとの謠言有り。

川島司令官、岡幸七郎に致書す。熊本宅、九州日々社に致すの信を作り、午前二時半就寝。

十月三十日 快晴。午前八時半九江発。

砲台二座、備砲合せて八門。

九時四十分湖口県を過ぐ。砲台兵營尽く革命軍の白旗を翻せり。九江地方の舟子、負販の徒に至るまで多く白布を左腕に纏て革命黨員たることを標榜せり。

もろ古志の百山川に秋ふけて木々の紅葉も色添へにけり

午前十時半大姑山の前を過ぐ。楓林濃淡秋色掬す可し。午後三時半安慶着。我駆逐艦「きさらぎ」此に泊す。支那軍艦は飛鷹一隻のみ。

此地にも革命党百人許入込み軍隊を煽動しつつあり。巡撫朱家宝は不虞の変を避けんが為め衙門内に宿泊せず、兵士は各白布一条を衣囊に蔵して事起れば直に之を用て左腕に纏ひ以て革党に変形すべき準備を為せり。人心恟々、輪船の下江毎に上海地方に避難する者甚だ多し。

午前一時蕪湖着。此地静穏、我駆逐艦神風、並に支那小砲艦一隻此に泊す。

十月三十一日 快晴。午前八時蕪湖開船，正午南京着。神尾茂来訪。我軍艦秋津洲此に碇泊す。神寄，中西等此より上陸，汽車にて上海に帰る。一時開船。

南京の新軍第九鎮全部と特科兵を昨日迄に南門外の秣陵関に移駐せしめ，鎮統徐紹楨以下司令部も此に移れり。城内は旧式の駐防軍と八旗を以て警戒し，弾丸は全部將軍鉄良の手に保管し新軍には弾薬を給せず。総督張人駿は演習の名を藉りて之を対岸の浦口に送らんとせしに，新軍は演習用の弾薬を要求せしも許さず。統制徐紹楨は其妻子を総督衙門に質として弾薬の支給を乞へども頑として応ぜず。之に謂て日く，新軍は外国との戦に用ゆる者にして内乱には駐防兵を用ゆべし云云。待遇の如きも以前は新軍に厚ふして旧軍に薄かりしが，今日は全く其地を換へ駐防兵を優遇して新軍を疎外するに至りしを以て新軍の不平極端に達しつつ有れども，弾薬無く資金無きを以て事を挙ぐる能はず。即今已に時機を失せる者の如し。若し漢口の敗報伝はらば自然屏息するに至る可きなり。南京にして一たび動かば鎮江，圖山，江陰の三地は直に響応す可く南京の動静を觀望しつつあり。一般の人心大に揺動し避難者市を成し商業全く中止せられ十室九空の概有り。

総督張人駿は，他の大官巨室の皆其家族を遠地に避難せしめたるに係はず極て鎮静の体度を持して平生と異ならず，城門の如きも夜中開放しつつ有り。

此地支那砲艦二隻あり。旗兵千人あり。

南京より鎮江迄の途中我軍艦最上の溯航せるに遇ふ。四時半鎮江着。町田武次郎来訪。

鎮江は南京と同く人心恟々，城内は居民の七分は各地に避難し商賈皆市を罷め動揺殊に甚し。新軍の將士武昌に依じて事を挙げんとするも軍資無く弾薬無く切に南京の形勢を觀望せり。

当地の兵力は第十八協の三十五，三十六の兩標と駐防隊一千，旗兵一千，砲台兵三百，約五千五，六百人，協統は杜某，三十五標統は敖姓，三十六標統は陶姓なり。

武昌事変以来長江沿岸一帯無政府の情態にして，鎮江の如きも塩梟の跳梁甚しく，避難者を中途に要撃し掠奪殺傷の案相踵で起り，人心恟々たり。八時鎮江開船。微雲澹月三山夢の如く画も及ぶ能はず。

鎮江にて聞く所に拠れば，盛宣懷北京にて炸彈の厄に遇て幸に免かれたり。政府は資政院の盛に対する攻撃と四川，武昌の事変に対する緩和剤として，盛を革職して永く叙用せざることとし，其の郵伝部の後任に唐紹怡を挙げたり。澤公は病と称して請假中に在り。広州將軍鳳山広東赴任の日炸彈に死せり。政府は国会速開の上諭と湖南湖北兩省の減租の諭を發し民心を鎮撫せんことを努めり。

十一月一日 晴。正午上海着，井手，島田，西本，松寄，木幡列来迎。有吉を領事館に訪ひ小談，帰る。

内人客月二十八日に到着せりと云ふ。海軍に報告を發し，九州日々社と熊本宅に致書す。午後加藤を豊陽館に訪ふ。陸軍大尉丸山豊，木村恒夫，並に若林龍雄，谷舞福恣，鈴木真一，副島，佐原前後来訪。夜井手，西本，山田純三郎夫婦，藤井，岡，若林，佐々布来訪。鳥居赫雄，土屋員安の信歐洲より，緒方，阿部野，大井五郎，橘三郎，松島正吉，小林吉人，津田武，上妻博路，香月，辻武雄，井口忠次郎，山澤，水野梅暁，清藤幸七郎，相良利吉，石川半山の信に接す。

十一月二日 晴。午前上野貞正，岡来訪。出て河野久太郎を訪ひ，橘より兌換を托されし銀百元を渡し，帰途東和洋行に本庄を訪ひ帰る。午後河野，香月来訪，共に出て佐原を訪ふ，在らず。本庄宅を訪ひ，転じ加藤を敲き，海軍への電報を發し，春日艦長と談じ帰る。夜篠寄，佐々布，水上来訪。領事館に本庄，丸山と会す。

黄興の子黄一欧主謀と為り二千人の会員と一週日内に於て江南器機局と吳淞砲台とを占領せんとす。昨日之を議決せり。兵器は拳銃二百五十，爆彈百個有り。黄興は二十九日已に漢口に着せり。宋教仁も漢口に在り。

十一月三日 晴。天長節。朝領事館に聖影を拝す。海軍に書信を發す。北京伊集院公使，石川半山に致書す。川島司令官に致書す。前島真，緒方二三の信至る。

是日午後六時を期し革命党は黄一鷗を主として事を挙げ，先つ高昌廟の江南製造局を占領し吳淞砲

台に及ばんとするを聴き、五時西本を遣はし実況を偵察せしむ。六時半西本の電話にて七時全く局の全部を占領し、李平書を推して該局総弁と為し革命旗を立て告示を掲げたり。道台衙門、並に城内の各衙門をも占領し道台衙門を焚却せり。

木幡、副島、本庄、井手友列来訪。

十一月四日 陰。午前本庄を訪ふ。北姓在り。中食後三人馬車にて江南機器局に至り革命党占領の状況を視、去て龍華火薬局に至り一覽して帰る。上海商団義勇兵、巡警、巡防兵の来て革党に投ずる者門前市を成せり。安達隆成なる者森井國維の紹介にて来訪。午後加藤を訪ふ。海軍に発信す。夜香月、河野来談。小早川秀雄の信至る。

十一月五日 雨。午前村上、松元勢蔵、加藤、安達隆成来訪。安達の為に漢口第三艦隊増田参謀に致書す。午後加藤、岡本柳之助、浮田等を訪ふ。豊陽館にて橋三郎に邂逅す、本日来着せりと云ふ。神寄来訪。

機器局にては、小銃一万挺、彈丸三百万発、ホッチギス三十門、革命党に鹵獲せらる。局にては小銃の製造高毎日三十挺、小銃彈二万発。

福州、蘇州、杭州、松江等の地昨今兩日革命軍に降れり。

十一月六日 晴。午前上海革命党首魁黄一欧に松寄洋行に会す。年齒二十才氣胆有り。午後相良、島田数、井手友来訪。午後領事館に有吉を訪ひ、帰途加藤、上海日報を訪ふ。夜香月、河野、志保井、佐々布、川本静夫、並に同文書院学生二名来訪。

十一月七日 晴。理髮。正午博愛丸に緒方二三、小早川秀雄、平山岩彦、古莊韜を迎ふ。豊陽館に至り小談。午後北輝次郎を訪ふて帰る。緒方、古莊、平山、小早川来訪。六時諸氏と出て井手の招宴に杏花楼に赴き、九時半豊陽館に帰り、加藤を訪ひ、緒方列と小談、帰寓。神寄、藤井等来訪せりと云ふ。齋藤國男の信至る。

十一月八日 晴。狩野直喜、波多博、竹下小太郎の信至る。八時北を松寄を訪ひ、朝食後本庄と三人小東門内旧海防分府の革命党の軍政府に至り、都督陳其美英士、参謀黄膺白、黄一欧に会す。陳は湖州の人、年齒三十七、温厚の人なり。

滬軍都督	陳其美英士 湖州人 三十七才
同軍政総理司令官参謀	李和燮
〃 軍政副理参謀	陳漢欽 (決死隊長)
〃 参謀	黄膺白
〃 〃	章梓
〃 〃	李顯謨
〃 〃	楊譜笙
〃	鈕建章
〃	沈虬
〃	葉惠筠
〃	王熙普
軍政府民政部長	李平書
〃 外交部長	伍廷方
〃 財政部長	沈縵雲

陸軍中佐土井市之進、加藤中佐来訪。緒方、小早川列本夕漢口に赴くを以て岡幸七郎、角田隆郎、高洲太助列に添書す。春日艦長森山慶三郎より本夕六三亭に招宴の帖至る。松村漢口領事、増田参謀、小池信義、宝妻等への紹介状を平山列に托す。午後領事を訪ひ、去て緒方列を敲き帰る。晚春日艦長森山大佐の招宴に六三亭に赴き、八時半辞出。豊陽館に小早川秀雄、橋三郎と小談、帰途北、土井市

之進を訪ふ。今夕已に上船せりと云ふ。

満洲朝廷蒙古カルカンに蒙塵の説有り。

十一月九日 晴天。頭痛。正金より預金百元を受取る。土井市之進を東和に訪ふ。本日福州に赴く者なり。

福州の革党叛軍と合し官兵と交戦中との報あり。

各省革命軍の都督、並に司令官左の如し。

湖北鄂軍都督 黎元洪 前第二十一混成協統 湖北董陂人

〃 〃 総司令官 黄興 湖南人 革党

宋教仁 〃 〃

呉少根 湖北人 〃

湖南長沙都督 譚

浙江杭州都督 湯寿潜

寧波軍政分府都督 劉詢 元統領

〃 副都督 常栄清 統領

江蘇蘇州都督 程徳全 巡撫

〃 〃 総司令官 劉緊之 日本士官校卒業生

広東水陸提督李準、北洋第六鎮統制と為り呉禄貞の後を承り、呉は叛志有りしを以て満兵の為に刺されしと云ふ。

六時台湾銀行江崎真澄、池田常吉の招宴に六三亭に赴き、九時半古荘、緒方列を豊陽館に訪ひ、去て橘三郎の処に河野等と談じ、十一時半帰る。白岩龍平、津田武の信至る。

十一月十日 晴。午前緒方列を武陵丸に送る。漢口に赴く者なり。出帆時間二時となりし為め諸人と出て鶏飯を吃し帰る。午後有吉、本荘を訪ふ。島村孝三郎、甲斐靖、森茂の添書を持し来訪。大連小泉土之丞の信至る。加藤中佐、井出少佐来訪。晚新六三の会に赴く。甲斐靖、橘、秦、土井、澤本、中野、青木諸人なり。九時半散ず。松島正吉、岡幸七郎の信至る。

十一月十一日 晴。松島、森、津田武、白岩、小泉土之丞に復書す。海軍軍令部に報告を發し、熊本松倉に復書す。島村孝三郎、平井徳蔵、甲斐、橘を豊陽館に訪ふ。平井は本日来着せる者なり。午後佐々布来訪。木下賢良の信至る。

十一月十二日 快晴。日曜。午前本庄繁、平井徳蔵、甲斐靖前後来訪。平井は廈門に赴くと云ふ。亀雄に致書す。水野疎梅、安河内弘、岩田愛之助来訪。岩田の漢口行に托し寺西秀武、波多野養作に添書す。北輝、小早川、平岡、高橋正二の信至る。

十一月十三日 陰。佐々布、岩田、加藤、橘来訪。海軍に時局報告を發す。夜加藤、平井を訪ひ、南陽丸に至り甲斐、橘等の漢口行を送る。十一時帰る。海軍より漢口行旅費四百円を送り来る。

十一月十四日 晴。木下賢良、高橋正二、江藤大吉、波多博に復書す。波多北京よりの電報至る。荻元太郎より六三亭に招邀、辞して行かず。平井徳蔵、有吉、本庄、上海日報社を訪ふ。外務省に時局に対する意見書を送る。

十一月十五日 陰、夜雨。午前姚文藻来訪。正午井戸川辰三、河野久太郎と新六三に中食す。井戸川は本日来着せる者なり。豊陽館に平井、加藤を訪ひ、四時御園生深蔵の葬儀に本願寺に列す。九江に於て病死せる者なり。平井、水野梅暁来訪せりと云ふ。海軍吉田大佐、伊集院俊の信到る。晚俱樂部に至り謡曲を学ぶ。終て平井中佐の廈門行を海晏号に送り、十一時帰る。

今夜上海革命党より兵三千を南京攻撃のために派遣せり。

南京張勳の部下七營、鉄良の旗兵千二百、張会鵬部下七營、其他を合せ約二十營なり。凜州第二十鎮統制張紹曾は革命党と気脈を通ぜる者の如く、趙爾巽、岑春煊等と聯絡有りて袁と対峙の形勢な

り。梁啓超の奉天に赴きしは、趙督と会商し袁と対抗の策を講ぜし者ならん。

十一月十六日 雨天。海軍に金子領収証を送る。漢口増岡高頼、加来敏夫の信至る。清藤幸七郎、近藤定喜、武下順次郎前後来訪。増田、伊集院両中佐に復書す。井手の病を問ふ。夜藤井、河野、香月、山田純夫婦来談。

十一月十七日 陰。心気不舒。石川半山の信至る。海軍に報告を發す。佐原来訪。
南京張勳の兵力は江防營七千を精銳とし、官軍は江浙兩省の兵一万人、野砲十八門、山砲四十門有り。

午後有吉、加藤を訪ひ、六時本庄少佐の招宴に其宅に赴く。会する者井戸川辰三、黄一欧、外二大尉なり。九時散ず。

十一月十八日 雨意。九州日々社に通信を送る。本庄少佐、原口新吉来訪。川島司令官、軍令部に報告を發す。安達隆成を通訳として南京碇泊の軍艦秋津洲に遣はす。夜謡曲鉢木を習ひ、帰途北生を松寄に訪ふ。宋教仁と共に本日南京より来着せりと云ふ。

十一月十九日 陰。心気不舒。午前台湾銀行池田の帰国を送る。船已に出口して及ばず。河野久太郎を訪ひ小談、豊陽館に加藤を訪ひ帰る。午後二時三井の小蒸気にて満洲丸に到り艦長大佐向井弥一氏に面し、安慶より避難せる巡撫朱家宝、並に漢口より避難せる漢陽製鉄所総弁李維格を迎ふ。二人とも旧知なり。五時向井、森山両艦長、並に加藤と共に帰る。郡島忠二郎来訪せりと云ふ。

十一月二十日 陰。午前井戸川来訪。郡島、河野を訪ひ、去て井野に至り齒の療治を為し、筆墨を購て帰る。午後理髮。四時井戸川、本庄、北三人と宋教仁に会す。宋は湖南人、年三十四、五才、革命党中黄興に次ぐの人物にして才略有り。五時半散ず。六時前島彪を松寄洋行に訪ふ、本日福州より来着せる者なり。七時前島、郡島、香月、河野、秦、澤本、土居等と新六三亭に会す。井戸川亦来会、十時散ず。

十一月二十一日 雨天。午前報告を作り海軍に送る。田添夫婦、李維格、高木陸郎、山ノ井格太郎来訪。晌午前島真の帰国を送り外務大臣内田康哉へ紹介状を与ふ。午後中井喜太郎来訪。上海日報、加藤を訪ひ、五時帰る。夜倶楽部の謡会に出席。大連森茂、波多博、橘三郎、緒方、小早川、古莊、平山列漢口よりの信、宝妻、清藤等の信に接す。夜波多博の電報至る。

十一月二十二日 雨天。橘三郎に復し、東京高島義恭に致書す。北、河野来訪。午後東和洋行に瞿鴻禨を訪ふ。昨日湖南より来着せる者なり。岡次郎の信至る。夜謡曲。

十一月二十三日 半晴。午前郵便局に至り金二百円を熊本宅に送り、領事館に古谷、有吉を訪ひ、九月より十月に至る経費、並に十一月分の一部を受取て帰る。西本、松寄両氏に十一月手当を渡す。午後豊陽館に加藤、中井喜太郎を訪ひ、帰途李維絡の寓に名刺を留て帰る。漢口岩田生の信至る。橘より客月二十九日大智門の役革命軍より放ちし砲弾のケースを送り来る。夜李維絡の招宴に北河南路陳公館に赴く。同座は森山春日艦長、加藤中佐、高木陸郎、陳薩明止瀾、王勳、陳煥文、外一人なり。
是日米国宣教士の手より銀十七万弗を上海革命軍の政府に貸与せり。金主は米国某弁護士なりと云ふ。

九時陳公館を辞す。森山艦長、加藤中佐来談。

十一月二十四日 健晴。海軍に書信を發す。近藤、竹下来訪。中久喜信周来訪、北清より帰来せる者なり。正午中久喜、松寄、西本を誘ひ松葉に至り中食す。帰途篠崎、喜多を訪て帰る。漢口平山、緒方、古庄、小早川列の信到る。夜佐々布来訪。

十一月二十五日 晴。朝兎玉英蔵来訪。午前志保井雷吉を高田商会に訪ひ佐々布身上の事に付き商量、去て五馬路馥興園の津輕候補生歓迎会に臨み、岸田、井野を訪ひ帰る。海軍吉田大佐に致書す。夜謡曲を学ぶ。

十一月二十六日 晴。朝海津駒治、岸田太郎来訪。午後古莊韜、安河内弘来訪。古莊は本日漢口より帰

来せる者なり。夜加藤壮太郎来訪。六時加藤と出て六三亭の会に赴く。対馬，春日，津軽，□□□四艦長以下二十余人なり。九時古荘を東和に訪ひ帰る。辻武雄の信至る。

十一月二十七日 陰。朝土屋鼎来訪。佐々布来談。午後郡島を訪ふ。晩古荘韜，井野夫婦，井手，島田，松崎，西本を招き支那料理を会食す。十時散ず。

十一月二十八日 暗。昨日漢陽革命軍大敗。漢陽の全部官軍の有に帰し，叛徒は潰乱して武昌に遁れ多数の死傷者を出せりとの電報有り。

潰乱の原因は湖北，湖南の両軍不和にして，総司令官黄興は上海に向け逃走せり。

又た一電，武昌の叛軍も戦はずして潰へ黎元洪は逃走せりとの説有れども，武昌は未だ陥落せるに非ず。

午前加藤を訪ひ東京に打電し，帰途北を松寄に訪て帰る。午後海軍に致書。有吉，本庄を領事館に訪ひ，帰途加藤を敲き帰る。中久喜，井戸川辰三，野満，波多の信至る。昨日安河内より四月よりの九月に至る利金二百七十円を受取る。

十一月二十九日 晴。午前郵便局，本庄を訪て帰る。午後河野，井手来訪。松倉，軍令部の信至る。夜狄葆賢来訪。七時倶楽部の総会に赴き，終て謡曲を学び，十一時帰る。

十一月三十日 晴。午前加藤を訪ひ，海軍に電報を發し，帰途北生を敲き帰る。

革命党の計画は，南京を攻略して根拠地と為し宋教仁を総理に推し黄興を元帥と為すことに一決せり。武昌黎元洪と官軍の間に於ける休戦妥協の件は，革命党は之を承任せずと云ふ。

午後佐々布来訪，其所有に係はる二連獵銃を三十五元にて購入す。漢口橋三郎の信二通至る。伊東より請帖至る。米国市俄古宇野海作の信至る。

十二月一日 雨天。頭痛。小笠原暢雄来訪。午後今井嘉幸，田中清，小早川秀雄，井手友喜，山根倬三，加来敏夫前後來訪。浮田，岡本を領事館に訪ひ，帰途五百木良三，井手少佐を豊陽館に訪ひ帰る。夜北，清藤に会し，帰途東和に小早川を訪ひ，十時帰る。橋三郎，高島義恭，安達，末永一三の信至る。

十二月二日 陰天。朝六時半弘濟丸に至り，海軍への報告を發し五百木に別を告て帰る。

黄興昨日午後漢口より着，勝田館に投宿せり。

午前山田純三郎を三井に，河野を大倉に訪ひ帰る。本田清人，今村直夫の信，並に海軍より本年内の臨時手当金三百円を送り来る。岩田，岡田晋太郎来訪。龍溪，加来来訪。晩村上貞吉の晩餐に赴く。食後其兄村上士文蒐集する所維新前後名人の書幅を觀る。其種類甚多，蓋天下の珍品也。十時歩して帰る。

南京城本日午前十時半陥落。総督張人駿，將軍鉄良は下関碇泊の軍艦秋津洲に逃れたりと云ふ。張勳は其の部下と共に浦口に逃れたり。

十二月三日 晴天。日曜日。朝加来敏夫を税関碼頭に送り，北京波多博に覆書し其南下旅費七十五円を托送す。領事館に浮田，岡本，本庄を訪ひ，去て加藤，小越平陸を敲き帰る。途中緒方二三，平山岩彦の漢口より帰来せるに遇ふ。即ち東和洋行に至り緒方等と談じ，四時帰る。六時半内人と共に伊東米次郎の招宴に春日丸に赴く。同座は浮田，藤瀬，児玉，本庄，村上，江寄，黒川等なり。十時散ず。姚文藻，汪甘卿，松元勢蔵，山根倬三等来訪せりと云ふ。橋三郎，岡幸七郎の信至る。

天津鎮総兵張懷芝六千の兵（混成協）を率ひ南京応援の爲め南下，本月一日浦口と六合の間に於て革命軍と衝突し革命軍を破り山砲二門を鹵獲せりと云ふ。

十二月四日 陰。午前姚文藻を訪ひ，十一時東和洋行に至り，転じて上海日報，領事館に至り小談。日報社にて中食し，帰途東和に緒方，平山，小早川と談じ，六時小早川，緒方，平山，島田，井手，西本，松寄を招き支那料理を会食す。小越平陸来訪，十時散ず。

十二月五日 陰。海軍に致書す。九時小早川秀雄の帰国を春日丸に送る。午後佐々布，緒方，平山来訪。出て理髪し，緒方，平山と有吉を訪ひ，帰途板屋大尉と小談帰る。牛田軍令部副官，吉田大佐に

致書す。合原金八来訪。北京亀井陸郎の信、並に莊村秀雄死去の訃音至る。

十二月六日 陰天。馬場義興蒲鋒より贈しを以て礼状を發す。漢口橋三郎、並に亀井陸良、平山氏清、本田清人等に復書す。午前緒方、平山来訪。午後加藤中佐、北、緒方、平山列を訪ひ、去て有吉領事を訪ふ。

兩江総督張人駿、江寧將軍鉄良、南京陥落後我軍艦秋津洲に逃れ来り、明朝の西京丸にて先つ大連に赴き然る後北京に入ることと為りしを以て、西本省三を派して之を大連に送らしむることと為せり。西本に旅費とし百五十元を渡す。

小池信美来訪。夜謡曲を学ぶ。

十二月七日 陰天。朝山田某来訪。十時大原武慶を勝田館に訪ひ緒方の事を商量し、去て加藤を豊陽館に訪ひ、海軍に打電し、有吉領事を敲き帰る。午後佐々布、緒方、平山、森恪等来訪。夜香月、藤井来談。雨。宇野海作の信至る。

六日、摂政王退位し世統、徐世昌の二人太保と為りて皇帝を輔弼し、行政の責任は國務大臣に負はしむとの上諭發せられたり。

十二月八日 雨。海軍より明年正月至三月の手当六百円送来、手当領収書を發送す。心気不舒。朝大原武慶、加藤壯太郎を訪て帰る。是夜伊東より竹越與三郎を主賓とし辰虹園に招宴す。病を以て辞して行かず。

十二月九日 雨。緒方、森恪、中久喜来訪。海軍に報告を送る。午後大連西本より無事到着の電報至る。領事館、加藤、小越、鬼頭玉如等を訪ひ、六時半有吉領事の招宴に赴く。同座は竹越與三郎、井戸川辰三、本庄繁、浮田、岡本、西日諸氏なり。十時散ず。緒方、平山を訪ひ小談、帰る。辻武雄の信至る。

十二月十日 晴。日曜。朝井川直衛来訪。緒方、平山来談。十一時月並謡会に出席、四時帰る。夜井手友喜を訪ふ。平山、緒方在り。九時半帰る。

十二月十一日 晴。午前篠崎に至り眼の診察を受け、入院中の宮崎寅蔵を訪ひ小談。去て加藤、有吉を訪ひ、転じて上海日報より東和に至り、緒方、平山と出で同芳に至り吃茶、大倉に河野を訪ひ、帰途東和に小休して帰る。田辺二吉、岡田晋太郎等来訪せりと云ふ。夜佐々布来訪。

十二月十二日 微雨。午前緒方、平山、神尾来訪。午後海軍に報告を發し、帰途アストルハウスに井戸川辰三を訪ひ、東和に平山、緒方と談じ帰る。夜河野、香月来談。軍令部牛田少将、吉田大佐、野満、波多の信至る。西本省三大連よりの信至る。

十二月十三日 雨。古莊弘来訪。正午有吉領事の招きに新六三に午餐す。井上雅二在焉、本日来着、新嘉坡に赴く者也。東和に平山、緒方、郡島等と談じ帰る。夜新六三の会に出席す。同座は井戸川、前島真、河野、香月、緒方、澤本、岡田晋、土井、吉原洋三郎等なり。後竹越與三郎、宮崎寅蔵、小池信美等来会。十一時散ず。野満四郎の信至る。

十二月十四日 陰天。午前領事館に至り有吉を訪ひ、帰途加藤を敲き帰る。加藤より広橋一箕、沙糖一缶を贈る。午後緒方、平山を訪ひ、緒方の香港行に托し孫逸仙への紹介状を作り之に与ふ。孫は二十二日香港に着するを以てなり。領事館に至り十一月分の経費を受取り、税関碼頭に緒方を送て帰る。六時石渡邦之丞の招宴に六三亭に出席す。湯河管船局長を主賓とし総数三十余名。九時散ず。吉原洋三郎、岡田晋太郎来訪。

十二月十五日 快晴。吉田昉来訪、京都日報の通信員たり。西本省三大連より帰来す。午前有吉、加藤を訪ふ。午後理髮。前島真、北を松崙を訪ひ、帰途平山を敲き帰る。原二吉、佐々布等来訪。平山氏清の信至る。

十二月十六日 晴。午前六時郵船に至り海軍への報告書を投函し、帰途前島を松崙を訪ひ小談、帰る。午前寺中猪介、萩原、本庄繁来訪。正金に至り銀二百元を受取り、有吉領事を敲き、帰途加藤中佐と

小談，帰る。午後田中清，加藤壯太郎来訪。西本願寺木村常諦，渡辺哲乗，内藤虎次郎の紹介にて来訪。東和に田中清を訪ひ，六時井手の招に杏花楼に赴き，七時散ず。倶楽部に至り九時半帰。佐々布遠，小早川秀雄，石橋藤次郎，荒賀直順，海軍吉田大佐，相良利吉の信，並に荒賀，井手，古莊韜三人熊本にて合作の信片至る。

十二月十七日 快晴。日曜。午前東和に至り今井，平山，山本を訪ひ，中食後平山，吉田某と談ず。三時平山と大原武慶を訪ふ。木村丑徳，小澤徳平，戸牧等を勝田館に訪ふ。木村，小澤は二十余年来の旧交にて，南京，四川に赴く者なり。四時帰る。江崙，有安，龍溪等前後來訪。留守中木村，小澤，高島醇，井手等来訪せりと云ふ。

是日午後二時半北京の媾和使唐紹怡，楊士琦の一行七十余人（内各省代表者二十二名）漢口より洞庭号にて来着。倫敦泰母斯北京通信員モリソン博士も同道来着せり。

十二月十八日 晴。午前山本安夫，岡田晋太郎，小越平陸来訪。午後有吉，加藤を訪ひ帰る。

十二月十九日 陰。早朝加藤，木村両中佐，小澤大佐来訪。平山，小越来談。晌午波多博北京より来着。二時波多と領事館に至り紹介を為し，加藤中佐を訪ふ。晩加藤の東道にて武田最上艦長，高洲太助，佐原篤介，前田彪等と新六三に会食し，九時散ず。上妻の信至る。

十二月二十日 晴。加藤，波多，佐々布，副島来訪。午後香月，前田来談。辻武雄の信至る。夜更平山岩彦来訪。

媾和談判の進行上本日商安二十四日より尚一週間各地の休戦を延期せり。

十二月二十一日 雨天。午前辻武雄来訪。午後四時六三亭の会に赴く。同座は武昌より媾和談判の代表者として来れる胡瑛（湖南桃源人），並に黄国康（晋夫，長沙人），余調輔を主賓とし犬養毅，寺尾亨，副島儀一，井戸川辰三，末永節，吉田某，平山岩彦等なり。十時散ず。門を出るとき増田高頼，加藤壯太郎に逢ふ。暢談十一時に及で帰る。

十二月二十二日 陰。井手友喜来訪。本年分利子を交す。辻武雄の為に北京高尾亨，奈良一雄への紹介状を作る。午後熊本宅に金三百円を郵送す。有吉領事の処にて松井外務省参事官と小談，帰途本庄，加藤，増田と談じ，五時帰る。夜井手，辻を訪ふ。

十二月二十三日 陰。午後姚文藻，辻武雄来訪。十時半春日丸に至り竹越與三郎，増田高頼等の帰国を送る。海軍に報告を發し，上海日報社に辻を訪ふ。加藤の処に中食し，東和洋行に平山岩彦を訪ふ。胡瑛，黄国康等と小談，帰る。佐々布常記，中久喜信周の信至る。

十二月二十四日 雨天。日曜。午前水上，青木喬，佐々布来訪。午後浮田，加藤を訪ひ，五時帰る。

十二月二十五日 雨天。朝緒方の香港より帰るを聞き往て之を訪ひ，去て領事館に至り有吉，松井と小談。加藤を訪ひ，軍令部に打電し，宮崎寅藏と談じ帰る。合原金作，渡辺某来訪。緒方を豊陽館に訪ひ，六時半胡瑛の招宴に月廼家に赴く。来客犬養，寺尾，副島，其他六十余人。九時半河野の馬車にて帰る。孫逸仙本日来着。

十二月二十六日 晴天。午前緒方，平山，宮崎寅，山田純来訪。午後海軍へ報告を發す。領事，本庄，加藤を訪て帰る。夜北来訪。松元勢蔵，加来敏夫，大井五郎，橘三郎の信至る。寶妻，水上，渡辺等来訪。

十二月二十七日 陰天。午前衆議院議員福岡精一，北前後來訪。午後東和に至り，緒方，平山と馬車を賃し仏大馬路四百〇八号に至り孫逸仙を訪ふ。二十五日英国より帰来せる者，相見ざる十二年，談話少時にして握別。帰途栗山満を豊陽館に訪ふ，未だ着せず。東和に帰り緒方，平山，山本安夫等と会食し，七時倶楽部に至り，八時半帰る。内藤熊喜の信至る。

十二月二十八日 陰寒。午前合原金八，水上喜代人，岡田晋，崎元大尉等来訪。崎元は北京より松本菊熊の添書を携へ来訪。午後正金に至り預金を受取り，加藤中佐，頭山満，犬養毅等を豊陽館に訪ひ，帰途高洲太助の病を篠寄病院に問て帰る。六時上海日報の宴に杏花楼に臨む。前島真今夜福州に向て

帰る。留守中森恪，香月梅外等来訪。

十二月二十九日 陰寒。午前水上，来原慶助来訪。午後室内を整頓す。中村吞牛，藤原若夫，東某，横山吏弓等来訪。大連市原より蠣一樽送り来る。

十二月三十日 陰。午前出て理髪し，有吉を訪ひ帰る。午後山田純三郎，佐々布等来訪。三時東和に至り緒方，平山の来訪を待ち，四時半孫逸仙，黄興等の主催に係はる「アットホーム」に赴く。張継，外三，四人，並に邦人五十人来会。黄，孫兩人遅刻，約二時間にして来る。七時去て緒方，平山の招宴に杏花楼に赴く。井戸川，川島，井手，井野等同座たり。九時半帰る。藤井太七来訪。

十二月三十一日 陰。山水速水，軍令部，石黒昌明の信，並に小川平吉の電報至る。崎元，佐々布等来訪。午後加藤，本庄等を訪ひ帰る。台湾銀行江崙真澄，奥山章次郎来談。家事を整理し夜半寝に就く。雨。